

成安造形大学紀要
第10号

Journal of
Seian University of
Art and Design
No.10

ISSN 1884-7919

成安造形大学紀要 第10号

目 次

研究論文

- 絵画史料からみた祇園祭鷹山…………… 小寄 善通 001
- 時の隙間のきらめき ―BIWAKO ビエンナーレ出展報告― …… 田辺 由子 007
- 京都つくば開成高等学校での情報デザイン基礎授業報告
―表現を通して自分の見方をみつめる― …… 藤井 俊治 017
- アーノルト・ハウブラーケンの『大劇場』における
schilderachtig (続報) …… 千速 敏男 033
- 「発達障害」・極私論2 ―世に棲む発達障害者像― …… 山川 裕樹 039
- 医療連携プロジェクト授業事例報告 …… 大草 真弓 055
石川 亮
- 京都芸術センター
素謡の会「うたいろあはせ」への参加報告 …… 谷本 研 073
- 生成する音楽
―ポップ・ミュージックの哲学の覚え書き2― …… 山本 和人 081
- 映像作品「水流 IX」の制作報告 …… 櫻井 宏哉 095
- 第8回『びかつ to アート展』展示計画を実施して
―障害者作品展の諸課題― …… 鳥先 京一 107

授業初回における学生の「教員選択行動」が大学生の受講姿勢に与える影響 —複数教員の並列開講型講義の事例から— ……………	濱中 倫秀 筒井 洋一 塩山 雄基	125
Building an EFL Course around a Feature-Length Film: Exercises to Accompany <i>About a Boy</i> and Its Screenplay ……………	三宅キャロリン	137
企画展示「きらめきの結晶体／紡がれる物語」報告 —版画技法“石膏刷り”を使用した出品作品解説をふまえて— ……	石井 誠	177
「地域とモダニズム・プロジェクトチーム」の取り組みと 《移動と収集—M・デュシャン「トランクの中の箱」より—》の展開 ……	馬場 晋作	189

絵画史料からみた祇園祭鷹山

Gion Festival “Takayama” Considered through Painted
Historical Materials

小嵯 善通

Yoshiyuki OZAKI

絵画史料からみた祇園祭鷹山

Gion Festival "Takayama" Considered through Painted Historical Materials

小嵩 善通

Yoshiyuki OZAKI

教授（共通教育センター：日本美術史）

This is a study of the characteristics of the Gion Festival Takayama as seen through "Gion sairei zukan" paintings by Yokoyama Kazan.

祇園祭鷹山の復興に向け、往時の姿を可能な限り忠実に再現した基本設計案を作成するため、鷹山の遺品類や、鷹山に関する文献史料、絵画史料などを検証する鷹山調査委員会が2016年6月に公益財団法人祇園祭山鉦連合会のなかに結成された。2018年3月に同連合会により『祇園祭 鷹山調査報告書』が刊行され、本稿筆者もその委員として「絵画史料からみた鷹山」という一節を執筆した。本稿では、同報告書刊行以後に確認されたことなど、微細な点についていくつか報告を行いたい。

横山華山筆「祇園祭礼図巻」に起因する問題点

「絵画史料からみた鷹山」のなかで、最も注目した作例が横山華山による「祇園祭礼図巻」であった。執筆当時は数葉の写真や既刊の論考〔註1〕を参考資料としており、実見の機会を得ぬままであった。先ずは、少し長文となるが「絵画史料からみた鷹山」のなかの本図巻に関する部分を以下に引用する（図版番号、文献番号等省略）。

「祇園祭礼図巻」2巻 横山華山筆 個人蔵

紙本著色による本図巻は祇園会の山鉦巡行、神輿渡御、宵山の光景などを横山華山（1781あるいは1784~1837）が卷子装2巻に描いたものである。上巻が縦31.7cm、全長1456.0cm、下巻が縦31.8cm、全長1487.0cmに及ぶ大作である。画中に描かれる綾傘鉦が曳鉦として描かれていることから、本図巻は同鉦が小型の曳鉦に改造された天保5年（1834）6月以降、華山が没する天保8年（1837）3月までの間に制作されたことが判明する。本図巻は全体的に図様が精緻に描かれており、懸装品なども実際に現存するものとの照合が可能なものも認められ、図としての信頼度も高いように思われる。

本図巻における鷹山は進行方向右前方から捉えられており、下水引から真松に至る部分が描かれ、前懸の一部がわずかに見える。実は本図巻が制作された時期、鷹山は既に居祭となっていることから、本図における鷹山の描写の信頼度については検討を要する。実際、本図巻では鷹山に、山には本来存在しない禿柱が鉦と

同様に描かれている。この点は鷹山だけではなく本図巻の南観音山においても同様であることから、華山は山の構造については関心が薄かったとも考えられよう。それでも本図に注目する理由は、本図に描かれる懸装品が正確に描かれている可能性が非常に高いからである。

本図における鷹山の懸装品の描写に注目してみると、天水引は赤色地に鳳凰と雲、一番水引は茶もしくは金地に麒麟に雲、二番水引は赤色地に蔓状の草花、三番水引は白地に桐の図様を描いている。これを三条衣棚町文書のなかの「鷹匠人形他一式覚」（天保3年（1832））と照合してみると、見事に一致するのである。同文書によると天水引は「猩々緋雲ニ鳳凰縫」、一番水引は「金地麒麟錦」、二番水引は「猩々緋唐花縫」、三番水引は「白地大内桐唐草金乱」となっている。このことから本図製作に当たって、華山は居祭であった鷹山の宵飾りを実際に見たであろうことが推測される。華山が綿密な実地観察のうえで本図巻を制作したであろうことを実証するもう一つの根拠がある。それは、京都市立芸術大学芸術資料館が所蔵する本図巻の下絵である。残念ながら所蔵されるのは前祭の分のみで鷹山は登場しないのであるが、そこに描かれた前祭の山鉦の描写には、本画制作に資するための数多くの部分写生図や、懸装品をはじめとする様々な装飾についてのデータが細かく記されているのである。

ここで少し疑問となるのが、本図巻に描かれる鷹山の前懸の描写である。周囲に緋羅紗を回した前懸は、水引と比較するとその描写密度が格段に低下しており、図様の詳細をたどることは困難である。先述の町内文書に前懸は「毛氈草花模様」とあるが、本図巻の描写を見る限り、華山はその現物を宵飾りで見ていないか、もしくは当該前懸が著しく損傷を受けていた可能性が高いように思われる。

その後2018年の秋、東京ステーションギャラリーにおいて「横山華山」展が実施され、その出陳品として本図巻2巻全画面が展示されたのである。以下は、その展示を実見したことに基づく本稿筆者の見解である。

先ず、本図巻の制作年代に関係することであるが、同展図録を執筆されている八反裕太郎氏によれば、下巻巻末に描写される「祇園ねりもの」において牛若丸に仮装した芸妓が描かれており、それは富本繁太夫の旅日記「筆満可勢」（東北大学附属図書館蔵）の記載内容から天保6年（1835）6月18日に特定できるとのことである〔註2〕。先述の拙稿引用文では「画中に描かれる綾傘鉦が曳鉦として描かれていることから、本図巻は同鉦が小型の曳鉦に改造された天保5年（1834）6月以降、華山が没する天保8年（1837）3月までの間に制作されたことが判明する。」としているが、八反氏の指摘によれば本図巻の制作年代は天保6年6月以降、天保8年3月以前となり、訂正しておきたい。

次に、本図巻による描写内容の信用性に関わることであるが、拙稿引用文中に曳山の禿柱の有無に触れている部分がある。「実は本図巻が制作された時期、鷹山は既に居祭となっていることから、本図における鷹山の描写の信頼度については検討を要す

る。実際、本図巻では鷹山に、山には本来存在しない禿柱が鉾と同様に描かれている。この点は鷹山だけではなく本図巻の南観音山においても同様であることから、華山は山の構造については関心が薄かったとも考えられよう。」という部分である。祇園祭には曳山が4基ある。江戸時代には南、北観音山は隔年で巡行に参加していたため、本図巻下巻には南観音山のみ描かれており、そこには鷹山と同様に禿柱が描かれているのである。ところが本図巻上巻に描かれ、前祭に巡行する唯一の曳山である岩戸山には禿柱が描かれていないのである。岩戸山は寛政6年(1794)に大屋根をもつ曳山に改造されており、本図巻に描かれる通り恐らく当時から禿柱を伴わず現在に至っているものと考えられる。ところが南観音山は現状禿柱を伴っていないのである。本図巻の描写を信じれば、南観音山は当時は禿柱を伴っており、その後改造したこととなる。しかし、現在禿柱を伴った曳山は無く、北観音山も南観音山と同様、禿柱を用いていない。

各曳山が大屋根を持つに至る経緯は、岩戸山が最も早い寛政6年であり、北観音山は文政11年(1828)に大屋根を持つ曳山に改造されたことが判明している。南観音山は史料が無いため詳細は判明しないが、天明の大火から復興するのが寛政8年であるので、この時に改造した可能性が高いとされている。

南、北観音山とも大屋根への移行は岩戸山よりも遅れてのことであり、岩戸山を手本とした可能性が高く、禿柱も当時から存在しなかった可能性が高い。また、鉾よりもスケールが小さく、全高も低い曳山ではそもそも構造力学上禿柱を取り付ける必要が無いのである。鷹山が屋根木地を新調するのが文化7年(1810)、そこへ金箔を置き彩色をするのが文政3年(1820)である。岩戸山、南観音山に続いての大屋根移行であることを考えると、やはり鷹山のみが禿柱を伴っていたと考えることは難しいであろう。としても、華山はなぜ岩戸山のみ正確に描き、南観音山と鷹山では誤認したのかという疑念は依然残されたままとなる。さらなる史料の出現を待ちたい。

最後に前懸の描写に関する点である。先述の報告書では次のように記した。「ここで少し疑問となるのが、本図巻に描かれる鷹山の前懸の描写である。周囲に緋羅紗を回した前懸は、水引と比較するとその描写密度が格段に低下しており、図様の詳細をたどることは困難である。先述の町内文書に前懸は「毛氈草花模様」とあるが、本図巻の描写を見る限り、華山はその現物を宵飾りで見ていないか、もしくは当該前懸が著しく損傷を受けていた可能性が高いように思われる。」

この点については本図巻を実見して、華山は前懸の実物を見ていないことを確信した。というのは、本図巻には上下巻を通して山鉾33基すべてが描かれており、それらには水引や前懸、胴懸、見送りなど様々な部位の懸装品が描かれている。そして、その中には現存する懸装品と一致する図柄のものも散見されることから、華山が宵山において実物を観察していることが確認できるのである。またそればかりではなく、すべての山鉾の懸装品の図様が詳細に描写されているのである。しかし、鷹山の前懸のみ描写密度が低く図様が判然としないのである。鷹山の前懸は巡行当時は毛氈であっ

たことがわかっている。本図巻の長刀鉾や南観音山にも胴懸に同じく毛氈が描かれているが、それらは類似した現物の毛氈を探すことが可能なレベルで図様がきちんと押さえられているのである。居祭時点の天保3年（1832）に記録された三条衣棚町文書「鷹匠人形他一式覚」（一紙ものと豎帳との2種あり、京都府立京都学・歴史館蔵）に「前胴幕毛氈草花模様」とあることから、天保3年当時は町内に当該毛氈が保存されていたことがうかがえる。文政9年（1826）の巡行時に大風雨にあつて大破し、その後居祭となった鷹山であるが、前懸も同時に何らかの損傷を受け宵山の居祭にも飾られていなかったものと考えられる。

本稿では横山華山筆「祇園祭礼図巻」を実見する機会に恵まれたことから、細々としたことではあるが鷹山の復興に関わった委員として記録しておきたいことを記した。それら以外にも美術史的には、本図巻が誰のために、何のために制作されたのかという点や、これほど精緻に描かれているにも関わらず、巡行順が一致する年がないことなど、まだまだ不思議な点が見られる。これらを今後の課題として本稿を閉じたいと思う。

〔註1〕 八反裕太郎「横山華山の画業展開に関する一考察—『祇園祭礼図巻』をめぐって」『国華』1417号 2013年

〔註2〕 八反裕太郎『描かれた祇園祭—山鉾巡行・ねりもの研究』思文閣出版 2018年

時の隙間のきらめき
—BIWAKO ビエンナーレ出展報告—

A Glimpse through a Crack in Time:
A Report on an Exhibition at BIWAKO Biennale

田辺 由子

Yoshiko TANABE

時の隙間のきらめき —BIWAKO ビエンナーレ出展報告—

A Glimpse through a Crack in Time: A Report on an Exhibition at BIWAKO Biennale

田辺 由子
Yoshiko TANABE

准教授（空間デザイン領域：テキスタイルアート）

This is a report on my exhibition at BIWAKO Biennale held in the old town of Omihachiman, Shiga Prefecture in the autumn of 2018. There are many machiya (traditional townhouses) originally owned by Omi merchants remaining in the old town. I presented an installation work utilizing a space of storehouse at the back of one of those houses, Kanekichi second house. Following a strong request by the organizer, I re-exhibited the work in a way different from the original exhibition twenty years ago.

はじめに

2018年秋、滋賀県近江八幡市旧市街にて開催された BIWAKO ビエンナーレの出展報告である。旧市街には近江商人由来の町屋が数多く残るが、そのうちの一軒であるカネ吉別邸の奥に位置する蔵の空間を使ってインスタレーションをおこなった。主催者からの強い要望で、20年経過した作品を別の形で再展示することとなった。（図1）



図1 BIWAKO ビエンナーレ展示風景 Photo: Yuto HIRAKAKIUCHI

1. Endless Net Way シリーズ

1996年～2001年にかけて、Endless Net Way シリーズとして連作を発表した。1990年のソビエト連邦崩壊をきっかけとする国際秩序の変化から派生したグローバル社会、情報が瞬時に世界を駆け巡るネットワーク社会の初期において、当時まだ一般的ではなかったインターネットに対する期待や予感を視覚的な造形に置き換える試みだった。

この作品の金属による編み目は開かれた立体構造となっており、幾何形態をベースにしながらも有機的な形が作られる。例えを用いて説明すると、六角形を連続すればハニカム構造となり、安定した平面の連続体となる。六角形に五角形を交えて連続させるとサッカーボールのような閉じた立体になる。六角形に七角形を交えるとドレープが生まれ鞍のような形となり、これは双曲平面である。多角形の辺を網目の線に置き換えることで、永遠に閉じることのない増殖する網目を表現した。

Endless Net Way シリーズは1996年ギャラリーマロニエ（京都）での個展（図2）をスタートとして、1997年ギャラリーギャラリー（京都）、一部展示を変更して同年にギャラリーインザブルー（宇都宮）での個展を経て、2000年には公募展であるフリップモリスアートアワード2000（東京）に出展、2001年にはイギリス各地で行われた企画展であるテクスチュアルスペース展、国内では京都文化博物館での選抜展（図3）と世紀をまたいで5年間に渡って発表し続けた作品である。

素材も当初の真鍮のワイヤーから作品を巨大化するためにモールを利用するようになった。モールに変えた理由は作業のしやすさと触覚的な心地よさ、線が太くなることでより網目構造が伝わりやすいことであったが、真鍮の場合、金属ゆえに時間の経過とともに当初の輝きに陰りが見えてくることが懸念されたこともある。

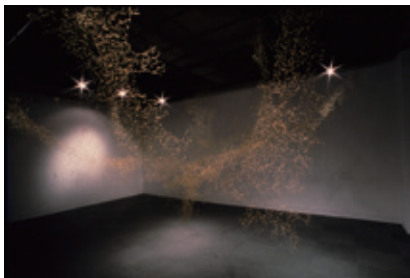


図2 Endless Net Way 1996年制作

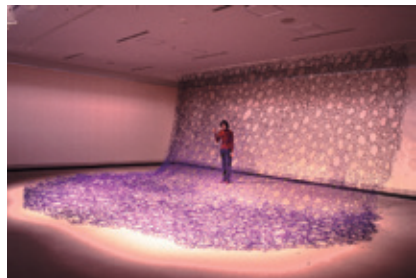


図3 WAVE 1999年制作

2. BIWAKO ビエンナーレとの関わり

以前、2007年にも BIWAKO ビエンナーレには出展しており、当時は本学のプロジェクト実習とリンクさせて学生による滞在制作「よーじ手芸プロジェクト」を行

なった。今回と同じカネ吉別邸の入口側のスペースで、学生が大きなフェルトの布に楊枝で刺繍を行い、それを見て触発された来場者も一緒になって作業をするというものであった。モノとしての作品ではなく、コトとしての場を作ることが目的であった。BIWAKO ビエンナーレの会期は2ヶ月と長く、会期中変化する作品に来場者の興味をつなげることができるのではないかと考えた。

結果的には予想外に制作が進み、当初用意したフェルト布が足りなくなり、フェルトで作られた座布団までが刺繍で一杯になるという嬉しい展開となった。(図4.5)以降、1年おきに開催される BIWAKO ビエンナーレには純粹に観客の立場に関わることで近江八幡という街に親しみを覚えていった。



図4 ヨージ手芸プロジェクト 途中経過



図5 ヨージ手芸プロジェクト 最終日

3. 出展の経緯

BIWAKO ビエンナーレの前年、2017年5月に京都のギャラリーにて個展、「風ふくむ時の隙間」を開催した。その際、20年以上前に制作した Endless Net Way シリーズの作品の一部をインスタレーションとして使用した。作品自体は、最近の研究テーマである紙縫りによる表現がメインであるが、縫るという手仕事が以前の Endless Net Way シリーズと極めて近い行為でもあり、過去の作品と最新作を同時に展示することで何か相乗効果が生まれないかと考えた結果である。

20年ぶりに取り出された作品は、保管のためにコンパクトにされて立体的な金属の網目は押し付けられて平らに、輝いていた真鍮は濁っていたが、そのままの姿がむしろ弱々しく儂い紙縫りと相性よく感じられた。時間による変化を経た作品も新作同様に見せる価値があると判断した。

空間全体に紙縫りによる作品を吊り、床にさりげなく一枚、直径1mほどの網目の作品を置いたインスタレーション(図6)となったが、意外にも床の作品に注目する来場者が多かった。その中の一人が BIWAKO ビエンナーレの総合ディレクター中田洋子氏であるが、これを展示空間の一つである蔵に設置するアイデアが、すでにできあ

がっているようであった。



図6 「風ふくむ時の隙間」 2017年制作

4. 展示空間

旧市街に点在する展示会場の一つであるカネ吉別邸（図7）の奥に位置する蔵の一階が、今回与えられた展示スペースである。幅奥行き4.5メートル、天井高3メートルほどの小ぶりなギャラリー程度の広さであるが、もちろんホワイトキューブではなく全てが木肌で覆われた空間である。西側に小窓が一つあり、そこからの午後の光が作品を通して床に影を作る。時間とともに窓から差し込む光の位置は移動し作品を照らす位置も変わる。床にうまく陰を落とすためには床に対して水平に浮かした状態で作品を設置する必要があることがわかってきた。



図7 カネ吉別邸 外観

この蔵の様な本来展示のためのスペースではない場所においては、展示に必要なことからといって容易に釘打ちやネジが差し込めるわけではない。備え付けてある棚やもともと存在する穴や隙間を利用して作品を設置することになり、展示の方法は限定された。

5. 展示方法

今回展示するのは1997年に制作し、イギリスにも巡回した真鍮で作られた網目である。直径1m厚みが10cmほどのもので10ピースに分かれている。以前はそれを床に対して垂直に吊るして展示していたが、今回は床に水平に展示することになる。

作品を空間に吊る場合、天井からテグスなどの透明のワイヤーなどで吊るすことが一般的だが、作品の設置位置が低いとワイヤーが目立って空間を台無しにしてしまう。今回は位置が低いのでワイヤーを水平に設置し作品を乗せる形にし、滑らないように突起のあるワイヤーを自作した。突起のあるワイヤーは作品の引っ掛かりはよかったが、時間とともに作品の重みでのびる事態が発生し、何度も張り替えた末、本数を増やさざる負えなくなった。

結果的には展示用のワイヤーが作品の視覚的要素として大きく加わったことになる。

6. 光の移ろい

展示作業や写真撮影のために長時間作品のそばにいと、一日を通しての光の変化に気づかされる。蔵の窓は西側にあり午前の光は一定しているが、午後1時以降、刻々と変化する光の位置が金属を照らす範囲が広がってくる様は感動的だ。(図8)

窓からの光は午後1時ごろから作品奥の一部を照らし始め、2時から3時ごろには窓からまっすぐ差し込んだ光は奥から手前にかけて光の筋になって照らす。(図9) 窓の光は床にそのまま作品の影とともに映し出される。(図10) 蔵の中は照明がなければ夕方や雨天はかなり暗くなるので、昼間も継続して照明を当てているのだが、人工的な光を凌駕するほどの太陽の光の強さにも驚かされた。



図8 「時の隙間の煌めき」 Photo: Yuto HIRAKAKIUCHI

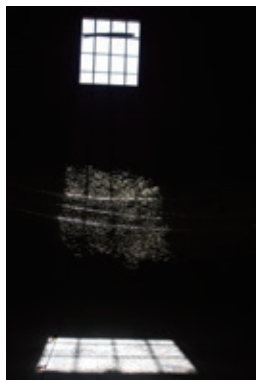


図9 窓から差し込む光の筋



図10 床に映り込む影

午前や夕方、曇りや雨の日はぼんやりした霏の様な見え方となり、週末行われるナイトツアー見学会では、暗さに目が慣れるのか反対に全体がキラキラと輝いて見えてくる。時間の経過で失われたはずの真鍮の輝きが、夜間の照明で蘇ったかのように見えるから不思議だ。(図11)

20年前の作品発表時はギャラリー内で人口照明の一定の光の下での展示だったが、今回は同じ素材を使いながらも表情の違う作品になった。作品は単なるモノではなく状況や環境次第で変わる可能性を持っている。



図11 夜の風景 Photo: Yuto HIRAKAKIUCHI

7. 過去との繋がり

過去の作品を展示することの意味を問われることがある。回顧展ではないので、見る人によっては過去のものだとわからないだろう。キャプションには制作年を1997年～2018年とした。来場者はこれを見てどう思うだろうか。22年間制作し続けたととらえてしまう人もいるかもしれない。過去の作品であっても自分にとって本当に過去の作品にならないものもある。それは制作スタイルに受け継がれているものであるし、現実世界の変化の中で今も自分にとってリアリティを感じられるものである。

かつては材木商であった町家の奥に位置する蔵は、この展覧会だけのために2年に一度重い扉を開けられる特別な場所だ。このように時間における意味性を帯びた空間に展示することで、今ある自分と過去との繋がりを垣間見ることができた。その上で、時間を経て新たに見えてくるものもある。それは作家自身の変化であり、社会の変化、物質レベルでは素材の変化、あるいは劣化かもしれないが、それらを全て受け入れた

今の展示を見せることに意味がある。社会も個人も過去の集積の結果であり、かつての輝かしい未来を予感したイメージは堆積物となって、やがては風化するものであるとしても。

くしくも今回のBIWAKO ビエンナーレのテーマは「きざし」である。元々この作品は20年以上前、ネット社会の「きざし」を作者自身を感じ取ったところで生まれたものであった。暗闇の中に差し込む一筋の光に照らされて煌めく網目を媒体にして、今現在の我々の中に湧き起こる何らかの感覚も、後々振り返ると何かの「きざし」であるのかもしれない。

京都つくば開成高等学校での情報デザイン基礎授業報告
—表現を通して自分の見方をみつめる—

A Report on a Class in the Foundation of Information Design at
Kyoto Tsukuba Kaisei High School:
Practice to find one's own viewpoint through expression

藤井 俊治

Toshiharu FUJII

京都つくば開成高等学校での情報デザイン基礎授業報告

—表現を通して自分の見方をみつめる—

A Report on a Class in the Foundation of Information Design at Kyoto Tsukuba Kaisei High School:
Practice to find one's own viewpoint through expression

藤井 俊治
Toshiharu FUJII

助教（共通教育センター・教育連携推進センター主担当：絵画）

I will report on a class in the foundation of information design held at Kyoto Tsukuba Kaisei High School. The aim of this class is for students to communicate their feelings through the experience of art. I also examine future possibilities of this class in accordance with the new official Japanese guide lines for high school education.

1. はじめに

本稿は自身が京都つくば開成高等学校で担当した情報デザイン基礎—バリューペイント—（以下、本授業）の授業構築の過程及び授業内容の報告であり、新高等学校学習指導要領から今後の授業展開について考察したものである。授業報告に入る前に、まずは京都つくば開成高等学校と成安造形大学（以下、本学）との関係について触れておこう。

2. 京都つくば開成高等学校と本学

2015年、京都つくば開成高等学校を設置する学校法人つくば開成学園〔註1〕と本学は、相互の教育に係る交流と連携を通して、進路に対する意識や学習意欲を高めるとともに、双方の教育の活性化を図る事業に取り組むべくパートナーシップ協定を締結した。協定による主な事業は、本学教員職員による高等学校への出張授業等の実施、本学での高等学校の生徒への授業等の実施、本学が主催する公開講座等への高等学校の生徒への受け入れ等である〔註2〕。その事業を管理運営しているのが本学の附属機関のひとつである教育連携推進センターである。

3. 本学教育連携推進センター

本学では、2018年度より「芸術による社会への貢献」という基本理念のもと、芸術教育を支援する教育連携に積極的に取り組むために「教育連携推進センター」が設置

された。この教育連携推進センターは、

1. 生徒の能力や意欲に応じた教育の実現を目指すために、高等学校等相手校と本学双方が連携し、教育のあり方を検討する
2. 芸術教育における研究を恒常的に深め、次世代に向けた芸術による教育の充実を目指す
3. 本学の在学生や学園の資産に対して、この活動によって価値を見出せることを目指す
4. 滋賀県唯一の芸術系大学としての責任を踏まえ、地域活動の推進や行政からの依頼についても積極的に取り組む

ことを目的とし、本学と姉妹校・パートナーシップ協定校関係にある高等学校との高等学校での3年間の教育と大学での4年間の教育を繋げた7年間という視点での教育連携、全国の高専・美術研究所・日本語学校にて展開される模擬授業への参加、高等学校等個別のニーズに合わせた本学教育職員によるオーダーメイド型の授業プログラムの運営、幼・小・中学校への美術教育と通じた連携、その他美術教育に関わる事業運営等を行う機関である。本授業はこの取り組みの一事例として位置付けられる。では授業の詳細に入る前に京都つくば開成高等学校の特色を確認していきながら授業内容を検討した経緯をみてみたい。

4. 京都つくば開成高等学校の特色

通信制、単位制、普通科を設置する京都つくば開成高等学校には、中学校から新卒で入学する生徒、他校から転入してくる生徒、一度学校を退学した後に編入してくる生徒等、様々な生徒が入学している。開講科目をみると、普通科目・総合学習・専門科目教育課程を持っている。普通科目を受講する方法として自分に合った登校スタイルを選択できるようになっており、決まった曜日に登校し、毎回同じメンバーと授業を受ける「クラス制」、決まった曜日の時間割を見て必要な時間帯に登校し、科目によりメンバーが変わる「フレックス制」、土曜日の時間割を見て必要な時間帯に登校し、教科単位で受講する自主学習スタイルの「土曜日選択制」、夏冬の長期休暇に集中して登校し、放送視聴を利用した自主学習スタイルの「夏冬集中受講制」がある。希望者が普通科目と組み合わせで選択でき、卒業単位として認定される専門科目教育課程には、芸術の他に保育、調理・製菓、美容など計13の専門コースとトライアルコースがある。専門コースは多様な専門的授業の受講が可能で、1年間単位でコースを変更することもできる。トライアルコースは専門コースの授業を気軽に試せるもので、全ての専門コースの授業がこのコースで開講されてはいないが、各コースの導入的な内容を受講することができる。それらの登校スタイルや専門科目教育課程を自

分なりに選択し、前籍校を含めて修業年限が3年以上で74単位以上単位を修得し、特別活動に30時間以上出席することが卒業条件になる〔註3〕。本授業は芸術コース内の専門コースの一授業であるため、希望者のみが選択するコースだ。普通科目の必修科目には芸術が含まれるが、芸術の開講科目は美術Ⅰ、音楽Ⅰ、書道Ⅰのいずれかを選択受講するため、本授業を受講する生徒が必ず美術Ⅰを受講しているとは限らない。さらに、芸術コースの専門コースは他にもデッサン、油彩、イラストが開講されている。

このように本授業は、興味の深度も美術の経験の差も多様な様々な生徒が受講する可能性を持ち合わせており、その特徴を考慮した上での授業内容を検討していく必要があった。

5. 授業内容の検討

前述のように多様な生徒が様々な目的で受講する可能性の中で、筆者が授業を担当して1・2年目は授業で何を伝えていけばよいのかを模索する期間だった〔註4〕。その中でも単なる技術指導に偏らない内容の構成が必要に感じられた。そんな中、ある日の授業中にある生徒が自らのクロッキー帳を見せてくれた。クロッキー帳には沢山のキャラクターが描かれてあった。聞けば好きでオリジナルのキャラクターを日頃から描いているとのことだった。授業の作品の雰囲気とは随分違う印象だったので驚かされた。その経験は、無意識の内に筆者自身が見たいものを課題を通して押し付けてしまっていたと反省するものになった。教育者の見方を追体験させる一方的なものではなく、様々な表現を認め合うような相互的な関係の構築が必要だと痛感したでき事だった。そのような経験から、普段から興味を持っていることや好きなことを活かし、様々な表現方法を学ぶ中で、自分を見つめることを目的にする授業構成を意識するようになった〔註5〕。そのため、履修に際しては技術習得だけがこの授業では目的ではなく、自分なりの視点を見つけようとする姿勢を評価するので、経験がない人でも問題ないと告知するようにした。評価の観点・方法についても出席、成果物、レポート、授業態度を総合的に評価するが、作品の完成度ではなく、自分の表現を考え、追求し、広げ、言葉にすることができたかを評価のポイントにした〔註6〕。では、授業内容について見ていこう。

6. 授業一覧

以下に各回の授業のテーマを記す。

- ・にじみ、シャボン玉で描く（2018年4月27日）
- ・筆をつくって描く（5月11日）
- ・コラージュでキャラクターをつくる（5月25日）

- ・コラージュでストーリーをつくる (6月8日)
- ・コラージュでストーリーをつくる (6月22日)
- ・写真を通した自分の視点 (7月6日)
- ・マトリョーシカに描く (9月21日)
- ・マトリョーシカに描く (10月5日)
- ・アートブックをつくろう (10月19日)
- ・アートブックをつくろう (11月2日)
- ・アートブックをつくろう (11月16日)
- ・アートブックをつくろう (11月30日)

授業時間

1回の授業時間は50分2コマ、計100分。

受講生数

3名〔註7〕。

6.1 授業内容及び考察

「にじみ、シャボン玉で描く・筆をつくって描く」

この課題は、多様な画材を使用しての描画実験である。まず、生徒に多様な作品例を見せ、技法が作品のテーマにどう関わっているのかをレクチャーした。次に実際に絵の具のにじみや、絵の具を溶いたシャボン玉溶液でシャボン玉を膨らませてイメージを得る実験を行った。その上で、身の回りの日用品等で描画に使えるものを持参してもらった。造花、毛糸、木の枝など様々なものが集まった。それを用いての描画実験を繰り返していく中で意外な表情が紙に現れていった。この授業のねらいはそ



図1 制作風景 撮影：藤井俊治



図2 制作風景 撮影：藤井俊治

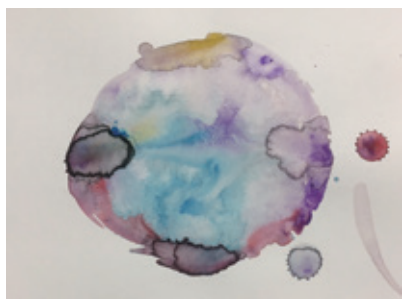


図3 作例 撮影：藤井俊治



図4 作例 撮影：藤井俊治

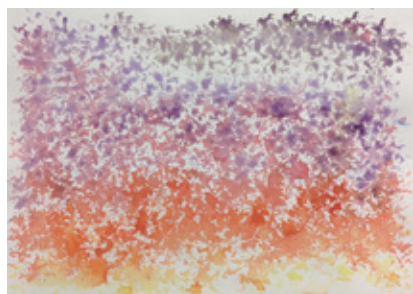


図5 作例 撮影：藤井俊治

の意外性—自らがイメージしていた仕上がりとは出来上がったものの差—を自らが発見していく過程にある。表現する際に、自分が描くことが“できる”ことに縛られるのではなく、偶然“そうなる”ことも取り込んでいくことで自分の表現性を広げることができる可能性がある。

「コラージュでキャラクターづくり」

更に生徒自身による発見を試みる課題が続く。前回の「にじみ、シャボン玉で描く・筆をつくって描く」で実験した様々な表情をもつ色面は、この「コラージュでキャラクターづくり」で生徒自らがデザインしたキャラクターイラストをコラージュで表現するための素材として使用した。授業のねらいは描画実験から偶然出来上がった絵の具の様を、キャラクターのイメージを作るための素材とし再構成する過程で、色面を注意深く見て、見えそうな部分や効果的な部分を選び出させることで、積極的に素材と関わり合う時間をつくり、素材の魅力や今まで見えてこなかったものを発見していくことだった。生徒からは、色面をちぎったり、やぶったりして素材から更に独自性を出そうとする工夫が自然と見られた。



図6 制作風景 撮影：藤井俊治



図7 制作風景 撮影：藤井俊治



図8 作例 撮影：藤井俊治



図9 作例 撮影：藤井俊治

「コラージュでストーリーをつくる」

この授業も前回に引き続きコラージュを用いた内容である。雑誌等の写真、文字、絵などから任意のものを選び出し、ストーリーをつくるというテーマで再構成するというものだ。ストーリーをテーマにしたのは、単なるビジュアルの構成では独りよがりなものになる可能性が高く、手が進まない生徒が出てくる恐れがあるためだ。また、自らの制作物を通して人に伝えることを意識させることも大きな目的だった。授業の最初に4コマ漫画、2コマ漫画などの事例を挙げ、フリとオチ、起承転結を意識させ制作に取り組んだ。制作時は元の意味やビジュアル、構成に引っぱられ過ぎずに展開できるかが重要である。そのため生徒には気になった素材をとにかくたくさん収集させ、並び替えを繰り返し、フラットに素材に関わる意識付けを行なった。

「写真を通した自分の視点」

デジタルカメラやカメラ付きスマートフォンを用いて高等学校の校内を撮影する内容である。といっても、単に写真撮影のテクニックを磨いたり優れた写真表現を問う内容ではない。撮影する行為を通して自らの視点を探り、切り取り、感じたことを言葉にする点に重点を置く。しかし、授業日に暴風警報が発令されたため休講となった。そのため休講措置として、高等学校校舎内で2箇所を撮影した写真と、その写真の考察をレポートとして提出してもらうことにした。



図10 作例 生徒の言葉“見上げた階段の裏面だが、いつもの階段にも見える”(2017年度受講生の作品) 撮影：藤井俊治



図11 作例 生徒の言葉“男子用トイレマークに見える”(2017年度受講生の作品) 撮影：藤井俊治

「マトリョーシカに描く」

ロシアの民族品人形であるマトリョーシカ〔註8〕を支持体に描く課題である。今回使用したのは3組がセットになっている白木のマトリョーシカで、一番大きいものの中に一回り小さいものが入っており、またその中にもう一回り小さいものが入っている構造をもつ。この授業ではマトリョーシカへの描画の完成度が目標ではなく、各自が入れ子構造をどのように活かして制作できるかという点にあった。また、平面とは違いマトリョーシカは立体物であり、立体的な支持体への描画の工夫もポイントになってくるので、マトリョーシカの作品例、展開図の作成方法を説明し、制作に取り組んでもらった。

完成した作品では、マトリョーシカの形を活かしてオリジナルキャラクターを描画するもの、胴回り一周して繋がっている風景の描写、時間の変化を表現し3場面を意識しストーリーが表現されているものなどがあり、次に出てくるマトリョーシカの意外性を出した作品も見受けられた。



図12 作品構想のためのエスキース
撮影：藤井俊治



図13 作品構想のためのエスキース (2017年度受講生の作品) 撮影：藤井俊治



図14 作例 撮影：藤井俊治



図15 作例 (2017年度受講生の作品)
撮影：藤井俊治

「アートブックをつくろう」

この一連の授業の最終課題である。各自が“自分”をテーマにし、アートブックを制作するというものだ。自分というテーマが難しい場合は別のテーマを設定してもよいとした。使用した絵本は表面・裏面・中面を合わせ30ページある〔註9〕。導入に基本的な本の構成をレクチャーし、ページ構成を考えてもらい、制作を行なった。使用してもよい画材は自由とした。この課題では、テーマの設定、どのような素材を用いるか、ページ構成はどうするか等、これまでの授業の総まとめとしての意味合いをもたせた。また、授業最終回に制作物のプレゼンをする時間を設け、それまでに完成させることを目標にし、生徒に制作時間の管理を意識させた。与えられた時間の中で逆算し、完成させることはものづくりだけに必要な力ではなく、広く求められる力である。同時に自らの考えを述べ、人に伝える行為もそうだろう。ものづくりを通して、様々な場面で応用できる力を伸ばすように心がけた。最終的に全員が完成させることができなかったが、それはこの授業の目的ではない。完成できなかったのは課題に対

して消極的だったのではなく、全員が各ページにかなりの要素を盛り込みながら作り込みをしていたためだった。授業は終了してしまったが是非完成に向けて取り組んでほしい。



図16 作例（2017年度受講生の作品） 撮影：藤井俊治



図17 作例（2017年度受講生の作品）
撮影：藤井俊治



図18 作例（2017年度受講生の作品）
撮影：藤井俊治

6.2 レポート課題

本授業では京都つくば開成高等学校の規定により6回のレポート課題を出題することになっている。レポートを設定する上で考慮したことは、単に授業内容の確認作業にはしたくなかったことだ。そのため、レポートを通じて授業内容を自分にとって興味あることで再度考え、発展可能な内容を目指した。授業での経験が自身の興味対象において見出されることで、その人らしく生きていくのではと考えたためだ。以下、出題した6回のレポート内容を記載する。

レポート1

作品には様々な技法・素材が用いられています。自分が気になった作品を挙げ、その作品の技法・素材の魅力を紹介してください。紹介する作品は、漫画でもイラスト

でも絵画でもかまいません。参考作品の画像を添付してください。作品5月15日（火）までに提出してください。

レポート2

自分が気になるマンガを挙げ、そのマンガにおけるコマ表現やストーリー性について考えたことをまとめてください。参考写真としてそのマンガのページをコピーして添付してください。参考写真については、「出版社名」「出版日」「作者名」「作品タイトル」「ページ数」を表記してください。6月5日（火）までに提出してください。

レポート3

自分がなぜか気になった写真を1枚紹介してください。写真は自分が撮影したものでも、そうでなくてもかまいません。写真のコピーを添付してください。7月3日（火）までに提出してください。

レポート4

後期、授業でアートブックをつくります。このレポートでは、出版されているアートブックについて調べ、自分が気になったものを1冊紹介してください。紹介内容、ページ構成、色使いで工夫されていること、特筆する点などをまとめてください。また、取り上げたアートブックの表紙写真を添付し、「出版社名」「出版日」「作者名」「作品タイトル」を記入してください。10月9日（火）までに提出してください。

レポート5

後期、授業でアートブックをつくります。テーマは「自分」とします。このレポートでは、そのアートブックのページ構成を計画してください。みなさんに作ってもらうアートブックのページは表裏表紙を含めて30ページあります。箇条書きでもいいですし、簡単な絵でもかまいませんので、ページごとの掲載内容を考えてください。また、アートブックには、自分で撮影した写真や自分の好きなイラストや写真を貼り付けたり、文字を書いたり、ページに色を塗ったり、イラストを描いてもかまいません。画材も自由とします。どうしても「自分」というテーマで取り組めない場合は、別テーマを設定することも可能とします。11月1日（木）までに提出してください。

〈箇条書きの例〉

テーマ「マイルーム」

表紙 タイトルと布団（きれい）のイラストを入れる

裏表紙 布団（きたない）イラスト

p1 タイトルを書く

p2. 3 自分の部屋の写真

- p4. 5 部屋からみた空の写真(朝)
- p6. 7 ページを真っ赤に塗って、自画像イラストを描く
- p8. 9 嫌いな言葉を書く
- p10. 11好きな言葉を書く
- p12. 13好きなキャラクターの印刷物をはる
- p14. 15 枕のイラストを描く、背景を銀に塗る
- p16. 17. 18. 19 気に入っているものの写真をはる
- p20. 21 見た夢の絵を描く
- p22. 23 見た夢のストーリーを文章で書く
- p24. 25 部屋からみた空の写真(夕方)
- p26. 27 未来の自分の部屋
- p28 言葉を書く

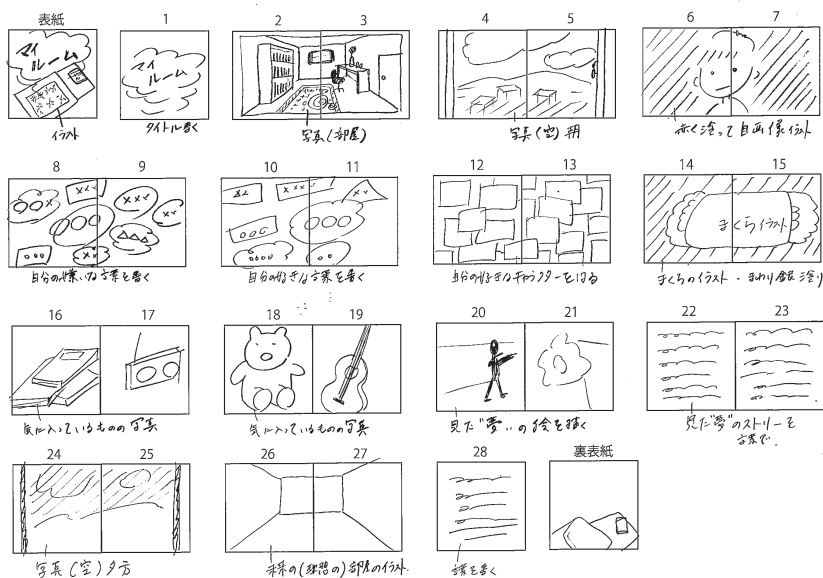


図19 イラストの例

レポート6

この授業では人に何かを伝えるというテーマで様々な表現を行ってきました。最後のレポートでは、下記の2つから1つを選んで記入してください。11月22日(木)までに提出してください。

1. 自分オリジナルの表現方法を1つ考えてください。

この方法を用いることでどんな新しい経験が期待できるのか、また、現存する今ま

での表現とどこが違うのかを考えてみてください。また、どうしてもアイデアが浮かばない場合は、過去の表現方法について調べ、誰がどんな表現を行い、その結果どんな効果があったかを調べて教えてください。

2. 人に何かを伝える上で大事なこと

私たちは日頃から様々な情報の中で生活しています。私たちは意識的、無意識的にその情報を取捨選択しています。受け取り方も様々です。また、情報の中には正確ではないものもあるかもしれません。そのような状況の中で、人に何かを伝えるために大切なこと、大事にすることはどんなことでしょうか。

まとめにかえて

最後に、平成34年から施行される新高等学校学習指導要領を確認した上で本授業の今後の可能性を考察したい。新高等学校学習指導要領では、少子高齢化、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展、人工知能やIoTの普及等によるSociety5.0社会の中で私たちの社会や生活が今後も大きく変化し、選挙権年齢の引き下げ、2022年度からの成年年齢が18歳へと引き下げられる等により高校生にとって政治や社会がより一層身近なものとなる社会の到来の中で、各教科の目標を「生きる力」を主体的・対話的な学びの中で具体化するような「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力」「学びに向かう力、人間性」の3つの柱で再整理するよう提言されている。美術の教科もその3つの柱を軸に、美術に関する学科において全ての生徒に履修させる科目としていた「美術史」「素描」及び「構成」に加え、「美術概論」及び「鑑賞研究」が追加され、美術に関する専門的な学習を通して多様で造形的な見方・考え方を学び、自己や社会、生活の中に活かすことができる創造的な能力の育成を目指すよう記されている。本授業では、単なる視覚デザインの技術修得にとどまることなく、表現から自分の見方を見つめ、広げることを目標にして実施を試みた。しかし、美術が生活や社会の中で果たす役割やその意義を考える展開については不十分な点があり、今後は他の授業科目の関連性も考慮した上で新たな内容を構築する必要があると感じている。そのまず一歩として、自分の見方を生徒間で積極的に共有できるような授業時間作りも重要だろう。また、単に作品の制作にとどまることなく、美術で得た経験から日常生活を捉え直すきっかけを作る授業展開が必要だと感じている。また、京都つくば開成高等学校は専門科目教育課程という独自の学びのスタイルをもつ。その学びを生徒が活かせるようにするためにも、本授業でも気軽に授業体験が可能なトライアルコースでの開講も検討する必要があるだろうと感じている。

[註1] 学校法人つくば開成学園は、京都つくば開成高等学校の他にも、つくば開成高等学校、つくば開成学園高等学校、つくば

開成福岡高等学校、つくば開成国際高等学校を設置している。

[註2] 「学校法人つくば開成学園と学校法人京

都成安学園・成安造形大学とのパートナーシップ協定書」より。なお、2018年度の本授業以外の事業は下記参照（2018年12月10日現在）。

授業・ワークショップ

・専門コースのコミック・アニメーションコースのアニメーションⅠ・Ⅱ（担当：翠緯泰 本学非常勤講師、筆者）

・高等学校主催のオープンスクールにおけるワークショップ（担当：翠緯泰 本学非常勤講師）

イベントへの参加

・本学主催のオープンキャンパスへ参加

・高等学校主催の進路説明会への参加

・本学主催の卒業制作展の鑑賞ツアー

その他

・高等学校の補習授業等開講のための施設貸し出し（年10回程度）

[註3] ウェブサイト京都つくば開成高等学校 | 夢を叶える高校 HP (<http://tkaisei-kyoto.jp>) (2018年12月3日閲覧) より

[註4] 筆者は本授業を2016年から担当している。

[註5] 榎木野衣が「感性は感動しない 美術の味方、批評の作法」の中でも触れているように、芸術における感性は、見る側の心の自由であり、高められるようなものではなく、自分を見つめるという行為そのものなのだと言っている。

[註6] 本授業を受講した生徒は本学の高大連携科目等履修生として登録され、単位認定

された本人が本学に入学した場合、当該単位を本学のプロジェクト科目として修得したものと認定される。

[註7] 2018年以前の受講生は2016年11名、2017年5名。

[註8] マトリョーシカは胴体部分で上下に分割でき、中には一回り小さいものが入っており、人形の中からまた人形が出現する入れ子構造になっている。また、中に収納されたマトリョーシカがどんなものなのか開けてみないとわからないびっくり箱のような要素を持つこともこの構造の魅力である。

[註9] 支持体は無印良品画用紙絵本ノート中・14枚・約185×185mmを使用した。

参考文献

新高等学校学習指導要領（文部科学省平成30年3月30日）

高等学校学習指導要領解説 芸術（音楽、美術、工芸、書道）編 美術編（文部科学省 平成30年7月）

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（文部科学省 中央教育審議会 平成28年12月21日）

榎木野衣「感性は感動しない 美術の味方、批評の作法」世界思想社、2018年、6p~7p.

アーノルト・ハウブラーケンの『大劇場』における
schilderachtig（続報）

“Schilderachtig” in *Groote Schouburgh* by Arnold Houbraken:
A Follow-Up Report

千速 敏男

Toshio CHIHAYA

アーノルト・ハウブラーケンの『大劇場』における schilderachtig（続報）

“Schilderachtig” in *Groote Schouburgh* by Arnold Houbraken:
A Follow-Up Report

千速 敏男
Toshio CHIHAYA

教授（共通教育センター：美学美術史）

There are lines including the Dutch word ‘schilderachtig’ in *De groote schouburgh der Nederlantsche konstschilders en schilderessen* (1718-21) by Arnold Houbraken. He used this word in the biographies of Roelant Savery, Pieter Lastman, Lucas van Uden, Aelbert Cuyp, Pieter van Laer, Johann Lingelbach and Aert de Gelder in the following sense: worthy of a picture.

筆者は、本紀要に「アーノルト・ハウブラーケンの『大劇場』における schilderachtig」（以下、「前稿」と略す）を寄稿した^{〔註1〕}。本稿は、その内容を補足するものである。

18世紀後半の英国で成立した美学思想「ピクチャレスク (picturesque、絵画的)」に先行して、17世紀のオランダでは「絵画的 (schilderachtig)」という言葉が用いられていた。この言葉は、カレル・ファン・マンデルの『画家の書 (*Het Schilder-Boeck*)』(1604年刊)にはじまり、サミュエル・ファン・ホーフストラテンの『絵画芸術の高等学校入門 (*Inleyding tot de hooge schoole der schilderkonst*)』(1678年刊)やヘラルト・デ・ライレッセの『大きな画家の書 (*Groot Schilderboek*)』(1678年刊)を経て、アーノルト・ハウブラーケンの『ネーデルラントの画家たちの大劇場 (*De groote schouburgh der Nederlantsche konstschilders en schilderessen*)』(1718-21年刊)にいたる美術理論書のなかにくりかえし現れ、独自の意義を有していた。

前稿では、オランダ王立図書館がインターネット上で提供するアーノルト・ハウブラーケンの『ネーデルラントの画家たちの大劇場』（以下、『大劇場』と略す）の全文テキスト^{〔註2〕}を検索して、schilderachtigという言葉がルーラント・サフェリ (Roelant Savery, 1576-1639年)の伝記^{〔註3〕}で用いられていることを確認し、その意義を考究した。

その後、ハウブラーケンが schilderachtig ではなく schilderagtig という綴りでもこの言葉を用いていることが明らかになった。その意義については今後検討していくこととしたいが、本稿では、ひとまず、その用例の存在を指摘しておきたい。schilderagtig の用例は以下の6件である。

ピーテル・ラストマン (Pieter Lastman, 1583-1633年) の伝記^{〔註4〕}

ルーカス・ファン・ウーデン (Lucas van Uden, 1595-1672年) の伝記^{〔註5〕}

アールベルト・カイブ (Aelbert Cuyp, 1620-1691年) の伝記〔註6〕
ピーテル・ファン・ラール (Pieter van Laer, 1599-1642? 年) の伝記〔註7〕
ヨハン・リンヘルバハ (Johann Lingelbach, 1622-1674年) の伝記〔註8〕
アーレント・デ・ヘルデル (Aert de Gelder, 1645-1727年) の伝記〔註9〕

ハウブラーケンの『大劇場』は3部から成る大部の著作であり、第1部には、16世紀前半のコレニス・アントニスゾーン (Cornelis Anthonisz., 1505頃-53年) からジャック・ダルトワ (Jacques d' Arthois, 1613-86年) にいたる170人余の画家たちの伝記が収められ、第2部には、ヘラルト・ダウ (Gerard Dou, 1613-75年) からピーテル・フリス (Pieter Fris, 1628-1706年) までの130人余の画家たちの伝記が収められ、第3部には、フランス・ファン・ミーリス (Frans van Mieris, 1635-81年) からアドリアーン・ファン・デル・ヴェルフ (Adriaen van der Werff, 1659-1722年) までの140人余の画家たちの伝記が収められている。

この浩瀚な伝記集のなかで、「絵画的 (schilderachtig/schilderagtig)」の用例は、ルーラント・サフェリの伝記を含めて7件となるが、そのうちの5件が第1部に現れており、第2部と第3部は1件ずつにとどまっている。

また、ピーテル・ラストマンの伝記とアーレント・デ・ヘルデルの伝記では、本文中に引用されたアンドリース・ペルス (Andries Pels, 1655-1731年) の同一の韻文〔註10〕のなかに出てくるので、アーノルト・ハウブラーケン自身が用いた用例は5件となる。

ところで、16世紀のイタリアで起こった、絵画においては素描が重要なのか、色彩が重要なのか、という論議は以後、盛んに論じられ、17世紀後半のフランスでは、素描を重んじる「プッサニスト (poussiniste)」と色彩を重んじる「ルーベニスト (rubéniste)」の対立が王立絵画彫刻アカデミーにおいて生じたほどであった〔註11〕。そして、この対比が、ハインリヒ・ヴェルフリンの『美術史の基礎概念』(1915年刊)における「線的 (linear)」と「絵画的 (malerisch)」という対立概念にまで及んでいるのはいうまでもない。

17世紀後半から18世紀にかけてのオランダの美術理論書においても、「絵画的 (schilderachtig)」に対する言葉として「素描的 (tekenachtig)」が散見され、ハウブラーケンの『大劇場』においても「素描的 (tekenachtig)」の用例が以下のように5件、確認された〔註12〕。

ダーフィット・テニールス2世 (David Teniers II, 1610-1690年) の伝記〔註13〕
フィリップス・ワウエルマン (Philips Wouwerman, 1639-1668年) の伝記〔註14〕
ヤン・バプティスト・ウェーニクス (Jan Baptist Weenix, 1621-1659年) の伝記〔註15〕
フィリップ・ペーテル・ロース (Philipp Peter Roos, 1655/57-1706年) の伝記〔註16〕
ヨハネス・ハッカールト (Johannes Hackaert, 1628-1685/90年) の伝記〔註17〕

まずは、「素描的 (tekenachtig)」と「絵画的 (schilderachtig)」がほぼ同じ回数用いられていることには注目すべきであろう。また、「絵画的 (schilderachtig)」の用例が実質的には第1部に4件、第2部に1件と、第1部、すなわち古い世代の画家たちの伝記に多くみられるのに対して、「素描的 (tekenachtig)」の用例は、第1部に1件、第2部に3件、第3部に1件と、比較的新しい世代の画家たちの伝記にみられる。こうした対照的な用い方にも、アーノルト・ハウブラーケンの独自性をみてとることができよう。17世紀を通じてオランダ絵画が「絵画的 (schilderachtig)」なものから「素描的 (tekenachtig)」なものへと移り変わった——という歴史観をハウブラーケンが抱いていたのではないかと推察される。これは、17世紀後半のオランダ絵画における古典主義化の傾向とも合致するものだ。

最後に、「絵画的 (schilderachtig)」から「素描的 (tekenachtig)」へとハウブラーケンの用い方が移り変わっていった実例を挙げておこう。ハウブラーケンは、『大劇場』の冒頭にちかいルーラント・サフェリの伝記のなかで「絵画的 (schilderachtig)」という言葉を用い、サフェリがティロル地方を写生旅行したとき、「絵にふさわしいと思われたすべて (alles wat hem schilderachtig)」を写生帳に描いたと述べている。ここでサフェリが描いたと思われる風景画は、アルプスの山岳の風景である〔註18〕。ところが、『大劇場』の最後にちかいヨハネス・ハッカールトの伝記では、ローマ近郊の山岳都市、ロンチリオネの情景〔註19〕を「岩山の上に素描的に横たわってみえた (op een Rots gelegen hun teekenachtig voorkwam)」と、ハウブラーケンは述べるのだ〔註20〕。

アーノルト・ハウブラーケンにおける「絵画的 (schilderachtig)」から「素描的 (tekenachtig)」への用例の変容については、今後、個々の用例について考究していくこととしたい。

- | | |
|---|--|
| 〔註1〕 千速敏男. アーノルト・ハウブラーケンの『大劇場』における schilderachtig. 成安造形大学紀要. No.8, p.43-57 (2017) | <i>schilderessen</i> . 2nd Ed. Vol.1, p.103 (1753) |
| 〔註2〕 <i>De groote schouburgh der Nederlantsche konstschilders en schilderessen (3 delen) (1976)</i> -Arnold Houbraken. 1753年に刊行された第2版を1976年にファクシミリ版で復刻したものをさらに全文テキスト化したPDFファイル。
http://www.dbnl.org/tekst/houb005groo01_01/ (2018年12月14日 閲覧) | 〔註5〕 Arnold Houbraken. <i>De groote schouburgh der Nederlantsche konstschilders en schilderessen</i> . 2nd Ed. Vol.1, p.158 (1753) |
| 〔註3〕 Arnold Houbraken. <i>De groote schouburgh der Nederlantsche konstschilders en schilderessen</i> . 2nd Ed. Vol.1, p.57 (1753) | 〔註6〕 Arnold Houbraken. <i>De groote schouburgh der Nederlantsche konstschilders en schilderessen</i> . 2nd Ed. Vol.1, p.249 (1753) |
| 〔註4〕 Arnold Houbraken. <i>De groote schouburgh der Nederlantsche konstschilders en</i> | 〔註7〕 Arnold Houbraken. <i>De groote schouburgh der Nederlantsche konstschilders en schilderessen</i> . 2nd Ed. Vol.1, p.359 (1753) |
| | 〔註8〕 Arnold Houbraken. <i>De groote schouburgh der Nederlantsche konstschilders en schilderessen</i> . 2nd Ed. Vol.2, p.146 (1753) |

- [註9] Arnold Houbraken. *De groote schouburgh der Nederlantsche konstschilders en schilderessen*. 2nd Ed. Vol.3, p.207 (1753)
- [註10] ベルスの韻文はレンブラント・ファン・レインについて述べたものであるが、以前に下記の論考のなかで紹介した。
千速敏男. レンブラントの《夜警》はピクチャレスクか: サミュエル・ファン・ホーフストラートの “schilderachtich van gedachten” をめぐって. 成城大学大学院文学研究科. 美術美術史論集, no.19, p.119 (2011)
- [註11] たとえば左記の文献を参照されたい。
Claire Pace, “Disegno e colore”, *The Dictionary of Art*, London, 1996, Vol.9, pp.6-9.
Moshe Barasch, *Theories of Art I: From Plato to Winckelmann*, Routledge, 2000 (1st ed., 1985). とくに, “Zuccari: The Theory of disegno” (p.294ff) と “Poussinists and Rubesists” (p.365ff) を参照されたい。
- [註12] ハウブラーケンの『大劇場』における「素描的 (tekenachtig)」の用例の意義については、下記で考究した。
千速敏男. アーノルト・ハウブラーケンの『ネーデルラントの画家たちの大劇場』における「素描的 (tekenachtig)」. 近世美術研究会編. イメージ制作の場と環境: 西洋近世・近代美術史における図像学と美術理論. 中央公論美術出版. p.191-207 (2018)
- [註13] Arnold Houbraken. *De groote schouburgh der Nederlantsche konstschilders en schilderessen*. 2nd Ed. Vol.1, p.364 (1753)
- [註14] Arnold Houbraken. *De groote schouburgh der Nederlantsche konstschilders en schilderessen*. 2nd Ed. Vol.2, p.75 (1753)
- [註15] Arnold Houbraken. *De groote schouburgh der Nederlantsche konstschilders en schilderessen*. 2nd Ed. Vol.2, p.77 (1753)
- [註16] Arnold Houbraken. *De groote schouburgh der Nederlantsche konstschilders en schilderessen*. 2nd Ed. Vol.2, p.280 (1753)
- [註17] Arnold Houbraken. *De groote schouburgh der Nederlantsche konstschilders en schilderessen*. 2nd Ed. Vol.3, p.48 (1753)
- [註18] 千速敏男. アーノルト・ハウブラーケンの『大劇場』における schilderachtig. 成安造形大学紀要. No.8, p.46-51 (2017) を参照。
- [註19] 自治体のウェブサイトは「Portale di Ronciglione」<http://www.comune.ronciglione.vt.it> (2018年12月14日閲覧)
- [註20] 千速敏男. アーノルト・ハウブラーケンの『ネーデルラントの画家たちの大劇場』における「素描的 (tekenachtig)」. 近世美術研究会編. イメージ制作の場と環境: 西洋近世・近代美術史における図像学と美術理論. 中央公論美術出版. p.202-203 (2018) を参照。

「発達障害」・極私論 2
—世に棲む発達障害者像—

Notes on Developmental Disorders Part 2

山川 裕樹

Hiroki YAMAKAWA

「発達障害」・極私論 2 一世に棲む発達障害者像

Notes on Developmental Disorders Part 2

山川 裕樹

Hiroki YAMAKAWA

准教授（共通教育センター：心理臨床学・学生相談）

There may be many people in our society who might be diagnosed with developmental disorders but who can somehow live with the people surrounding them. Based on this concept, I will discuss developmental disorders not as a singular phenomenon, but as the continuum of our daily life. In Part 2, the following three themes are taken up: (1) “Otaku” hobby and developmental disorders. (2) Females with developmental disorders. (3) Developmental disorders and gender identity.

はじめに～発達障害の周辺像から

昨年の拙稿（山川、2018）では、発達障害の特性と折り合いをつけながらこの世の中で生きる人が多くいるのではないかとの考えに基づき、発達障害についてまず診断基準を概観し、滝川（2017）による認識の発達と関係の発達之二軸におけるばらつきとして理解する視点を参考に、ばらつきの意味についてそして成長可能性について指摘した。本稿ではもう少し各論的に、というよりも「見逃されやすい発達障害」について、つまりは「世に棲む発達障害者像」について考えてみたい。見逃されやすいというのはその特性が目立たなくて済むと云うことだし、それはつまり「世に棲む」姿であろう。そうした周辺像の中から、発達障害的要素を持った人たちがこの世の中で定位していくありようを考えてみたいというのが筆者の意図である。

以下では、いわゆる「オタク」趣味と発達障害について、そして女性の発達障害について、そして性アイデンティティと発達障害という三点を取り上げて考えたい。なおこのいずれも臨床実感には基づいているが、統計的・実証的調査に基づくものではない。筆者の限られた経験からの感触をまとめたものであるから、少数例を取り上げて多数派だと思い込んでいる可能性はある。「洞窟のイドラ」である。しかし臨床実践上、その視点を有していることがながしかの益になるのではないかとの思いも筆者にはあるので、現時点での見解をまとめておくことにする。なお、以下のいずれも、「すべてにおいてそうというわけではない」との留保は付けておきたい。

筆者の立場について改めて確認しておく。本稿で取り上げるのは、ASD（自閉症スペクトラム障害）や ADHD（注意欠如・多動性障害）の「診断」に基づくわけではなく、ASD や ADHD の「特性」のある人たちについて考えている。ASD や ADHD の診断基準の一つには、「社会的、職業的」などにおいて「臨床的に意味のある障害を引き起こして」いる（APA, 2013/2014）というものがあり、そのことは社会的な場面で差し

障りがない場合は診断がつかないことを意味している（そして医療や心理面接の場を訪れるような人はなにがしか差し障りが存在している）。つまり、差し障りがないから診断はつかないが、幼少期からの傾向としてASDやADHDの特性がある人もいるということだ。以上の考えを背景に、本稿で発達障害者の像を考えると、「既診断者」ではなく「そうした特性を有して生きている人」が措定されている。「障害であるか」ではなく、「そうした（生まれもつての）特性があるか」が本稿での着眼点である。

1. いわゆる「オタク」趣味と発達障害特性

前稿（山川、2018）3.の最後において、今なら発達障害として認識するだろう10年前の学生の例に言及した。その中のあるケースを事例検討会にて出したことがある。その時に見立てを問われ、筆者はややためらいながらも「オタクパーソナリティというのが一番自分にはピッタリくるんですけど……」と答えていた。オタク趣味（アニメやマンガ、ゲームなど）を持つ学生によくいるタイプだが、なにかのパーソナリティ障害とまでは云えないし、神経症的な葛藤ともちょっと違う。無論精神病圏でもない。ただ、世の中での独特の生きづらさを抱えつつも、オタク趣味をもつ友人たちと世界を共有することでこの世とのつながりをそれなりにもっておられる学生さんを指して、筆者は「オタクパーソナリティ」と表現した。

今現在の、広がった筆者の発達障害観からすれば、まごうことなく彼（彼女）を発達障害圏だと位置づける。生れもつた独特の生きづらさ＝生きるごちなさがあり、限られた趣味においてその特性を発揮し、そうした趣味でのつながりを持って生きる一群の人たち。趣味を同じくする人たちとの間では流暢にコミュニケーションを取るものの、ややペダンティックな、独特の言葉遣いをするため「外の立場」からすると意味が取りにくい彼らの特徴を考えると、コミュニケーションやイメージーションの世界は確かに大多数の人から外れたところがあり、社会性も開けているとは云いがたい。こうした特徴はWingの3つ組（Wing & Gould, 1979）を充分満たしうるだろう。

くり返しになるが、ASDは「社会的、職業的、または他の重要な領域における現在の機能に臨床的に意味のある障害を引き起こしている」ことが診断基準であるのだから、オタク趣味をもつ人々をASDとイコールで結びつけられるわけではない。オタク趣味をもちながらも「臨床的に意味のある障害を引き起こして」いない人はたくさんいる。ただし、いわゆる「オタク趣味」をもつ人々の特徴を考えれば、Wingの3つ組はかなりの近接性を持って存在していると想定しうる。このことを逆に捉えるならば、Wingの3つ組の特徴をもつ人が、この世でそれなりに生きるために獲得された趣味が「オタク趣味」だ、との考え方もできるだろう。つまり、オタク趣味を発達障害に由来するというのではなく、その逆に、発達障害傾向のある人がこの世とつながる可能性としてオタク趣味があるということだ。

『鉄子の旅』というマンガがある。これは、日本国内での全鉄道駅での下車を成し遂げたという鉄道ライターの見谷浩彦氏と、鉄道とは基本縁がない漫画家菊池直恵氏が鉄道の旅をした記録が収められたルポ漫画である（横見・菊池、2002-2006; なお漫画家を代えてその後もこのシリーズは続いた）。この横見氏は、マンガで描かれている限りかなり個性的な人物で、自らの鉄道愛を惜しみなく旅中で披瀝し、それが受け入れられないと機嫌を損ねるといったシーンが幾度となく登場している。興味あることについては蕩々と語り、相手の調子にはかまわず自分の興味関心で動く。想定と違うことが生じると怒り出すようなシーンもいくつかあった。

「鉄オタ（鉄道オタク）」と称される鉄道好きの人たちがいる。写真を撮る「撮り鉄」、電車に乗るのが好きな「乗り鉄」、あるいは時刻表を読むのが好きだったり車両の違いに関心を持ったり、中には加速音だけで車両を特定できる人もいると云う。小さいときから鉄道が好きでそのまま高じた人も多いだろう。そのままの趣味で大きくなり、同じような鉄道を趣味とする仲間と出会う。それは鉄道趣味だけに限った話ではない。バスや飛行機などの乗り物、アニメやゲーム、マンガなどのサブカルチャー系、ヴィジュアル系バンドなど少しマイナーな音楽、世代を3つほど遡ればおそらく小説や詩歌だろうか、こうした「ちょっと変わった趣味」を生きがいとし、それを通して人との交流を得るような人というのは古くから存在している。

そうした彼ら彼女らが「発達障害」であると云っているわけではない。しかし、発達障害的な特性をもつ人たちの中には、そういう「独特の趣味」で息をつける人も少なくない。同世代に大勢いる（定型発達の）人たちには馴染めないが、自らの興味関心を同じくする人と出会い、そこで意気投合し交流する例は古くから存在している。興味関心が局限された彼らにとって伸び伸びとできる趣味と、その趣味を媒介とした交流がある。そしてその中で、「自助グループ」的に“この世での生き方”を教わっていく例もあるのだろう。例えば「撮り鉄」の場合に、鉄道写真を撮る中で知り合った人たちから写真の撮り方を学ぶだけでなく、写真を撮るときのマナーなども教わったり、そこから発展して人付き合いについても教わったり、などという例である。趣味の話で盛り上がりたいのは分かるがもう少し人の話を聴くことも覚えようよ、オレも昔そうだったから分かるけれども、それだと相手も引いちゃうだろう、など（ネット全盛の現代においてはそれが難しくなっているかもしれないが）。趣味を同じくし、関心を共有できる人たちからだから腑に落ちる話もある（自助グループとはそういうものだ）。オタク趣味には、彼らの興味関心を守りつつ、それを通した人間関係を経験させる、成長促進の意味＝社会的機能も十分に含まれている。

筆者は大学院の頃、思春期におけるゲームがもつ意味について取り上げて考察したことがある（山川、1999）。そこでは Winnicott の移行対象 transitional object (Winnicott, 1971) を取り上げ、Tustin の自閉対象 autistic object (Tustin, 1992) と対比させて論じた。その論点の核は、移行対象や自閉対象と考えたとき、その対象そのものの性質に着目されることが多いが、そうではないのではないかと、同じ対象であっても自閉的に

用いられることもあれば移行的に用いられていることもあり、心理療法の観点からすれば、自閉対象として用いられているなにがしかのモノ object が、関係を通して移行的に用いられるようになる（=コトとしての移行性）という視点を導入した方がいいのではないか、というものであった。

確かに自閉対象には鉄道や車など固いもの、強固な守りを感じさせられるものも多く、移行対象にはぬいぐるみや毛布など、安心感を与えてくれるものが多い。そうしたモノが持つ性質による違いは確かにあるだろうし、それを無視していいわけではない。しかし例えば移行対象と見なされやすいぬいぐるみでも自閉的に用いられる例はあるし、自閉対象でも関係を通して移行的な使用が可能になる例もあることを考えると、それをあまりモノの性質に固定して考えるのはよくないのではないか、むしろその用法に着目し、そのモノを移行的に用いているのか自閉的に用いているのか、そちらの観点で捉えていく方がいいのではないか、と考えたのである。そのことを、中学生がゲームについて語った内容から検討を試みたのが拙稿（山川,1999）であった。

発達障害とオタク趣味を関連させることで筆者が主張したいのは、これと同じことである。いわゆるオタク趣味は、その開始時点では彼らの何かを守り、自身を助けてくれるモノとなる。しかしそれは第三者と共有可能な媒介項として用いることも可能である。その趣味関心の共有はなかなか難しいかもしれないが、それらを経て彼らは他者と共有しうる世界に開かれることが可能となり、そのコミュニティ経験を通して、彼ら独自の（=ASD的な）認識は依然あってもしかし他の人とのつながりも含めて生きる可能性がでてくるのではないか。

オタク趣味は当初は心理的障壁として存在するかもしれない。それによって心の安らぎがもたらされる。次にその世界を広げようとしたらば、そこで彼らは趣味を同じゅうする他者と出会う。その他者は彼らを単純に脅かす他者ではなく、彼らと共に生きる他者である。そこで共有された世界を生きることで、自閉対象が移行対象の機能を担う。彼ら彼女らがつつこだわりからそれへの興味関心はそれなりに限局されたものであり、伝わりにくいものであることも少なくない（そしてその伝わりにくさがその当人のアイデンティティにもなっていたりもする）。共通した趣味を持つ人同士でも、やはりそのこだわりのポイントが異なるので、そんな単純につながりが得られるわけではない（例えばカップリングの順番）。しかしその「伝わりにくさ」も大切なことなのだろう。母子一体の世界から離れ、この世で生きていくためには共通理解としての言葉が必要となる。独自の呼び名である「なーなー」がネコを指すと保護者に理解され、しかし保護者から「それはニャーニャーよ」と訂正される、そのなかで我々は共同体における言語を獲得する。自らの趣味を独自のものとして理解され、しかしそこで伝わらないことがあることも知り、そのなかで他者に通じる言語の世界へと参入していく。そのプロセスを通して、当初は自閉的な意味を担っていた趣味が、他者と共に生きる世界へとつなげてくれることがあるのではないだろうか。

しかし彼らは生まれ落ちたときから「伝わりにくさ」を抱えた人たちである。伝わ

りにくい難局を前にして、ふたたび彼らだけの独自の世界に戻ってしまう可能性も充分にある。そもそも他者と共に生きる世界が喜ばしいものであるという保障は何もなく、それは定型発達帝国主義的な見方であるかもしれない。しかし、我々は他者と共に生きその意思を確認するための言語をもって生きているという以上、他者と共に生きる世界はやはり重要である。閉じた水系はやがて干上がるしかないが、出入りのある開かれた水系は新たなものが生まれる可能性がある。その「新たな可能性」こそが彼らの恐怖になるのだが、しかし生きる喜びとはその新たな可能性にあることも事実である。

その時にキーになるのは、「伝わりにくさ」であろう。自分の趣味を尊重し脅かさない他者の存在認識という第一段階があり、しかしどこかで「ズレ」が生じてくる。つながりを持ちたいが思い通りにならない他者というアンビバレンツが大切である。それこそが他者の他者性であり、その他者性があるから私たちはつながりのよこびが生まれる。同時に他者が単純な脅威ではなくなる。伝えたいのに伝わらないもどかしさが他者の他者性を知り、その他者性をもとに、「伝わった」という安心感が生まれる。こうした一連のプロセスが、他者と共有可能な世界へと彼らが開かれていく一歩になるのではないだろうか。

2. 女性の発達障害について

発達障害を広く筆者が捉えるようになって以降、女性の発達障害もことのほか多いのではないかという感触を得てきた。ASDは男性が多いとされ、ADHDも男性のほうが多いとされている。例えばやや古いデータとなるがDSM-IV-TR (APA, 2000/2002)によると、ASDの男性はASD女性の「少なくとも5倍」であり、ADHDの男女比は「2:1から9:1」(ADHD)とされている。しかし、発達障害を広く捉えた際一社会における生きづらさを生来的に抱えた人たちと理解した際一、その「生きづらさ」に関しては男女問わず広く存在しているだろうというのが筆者の臨床実感である。もちろんそれは、筆者の臨床場面の偏りによる可能性はある(美術大学は女子学生比率が比較的高い)。しかしそれを考慮しても、そうした特性自体の性差はそこまで顕著ではないだろうというのが筆者の実感である。

この臨床実感と、先の「少なくとも5倍」という違いはどのように理解しうるか。それは一つに、「特性」と「診断」の違いにある。何度も述べてきたように、「特性」と「障害」診断は異なる。そのような特性はあっても「その症状は、社会的、職業的、または他の重要な領域における現在の機能に臨床的に意味のある障害を引き起こして」(APA, 2013/2014) いない場合は「障害」とは診断されない。となると、そうした「特性」はあっても女性においては「障害」化しにくいという可能性も考えられる。「障害」になりにくいのがゆえ、元々の特性はありつつもそれがそこまで(男性の場合ほど)目立たなくなっているとの仮説も成り立つ。

本章では、目立たないが存在している女性の ASD 特性について少し光を当てるためにも、何故 ASD 女性がそこまで少なく見積もられてしまうのか、何故目立ちにくくなるのかについていくつかの仮説を挙げておきたい。あくまでも仮説に過ぎず、ここに挙げた要因以外にもあるだろう。しかしこうした仮説を想定しておくことは、目立ちにくいとされる女性の発達障害に気付くきっかけになると思われる。勿論、これは男性の発達障害者への支援にもつながってくることである。何故女性は「障害」とされにくいのか、何故「特性」どまりとなるのか、そのことを考えることは、男性の発達障害を「障害」化から防ぐ、つまり「特性」レベルにしておくことのヒントもあると思われるからである。

さて、まず考えられるものの一つに、単純に、今現状の世の中において、「社会的、職業的」場面に出るのは男性のほうが多いことから来ているだろう（念のため附すが筆者はその実態をよしとしているわけではない）。女性の場合は、今まで社会的、職業的場面に出ることがそう多くなかった。無論子育てなどその場面での「社会的」場面はあるが、「職業的」場面となると、正規雇用の男女比は2:1である現状（総務省統計局、2018）を考えると依然少ないと云わざるを得ない。単純に、「職業的」場面にさらされる状況が少ないという現状から、男性の診断が多くなると云う事情もあると想定される。このことはつまり、今後女性の社会進出が進み、社会的、職業的場面に出る女性が当たり前ものとなってくると、「発達障害」と診断される女性の増加が見込まれることも意味しよう。

もう一つ別の要因として、女性のほうが発達過程においてそうした「特性」を修正さ（せら）れる機会が多いこともあるように思われる。生まれ持った性差によるのか社会的要因なのか、未就学の子どもたちにおいて一人遊びをする子どもの割合は男子のほうが多い。女子は周囲から社会化（＝「一緒に遊ぼう」）の働きかけがあり、社会化への圧力が強いと考えられる。ASD 特性を持つ女子の場合、そうした社会化の圧力を苦痛とするものも少なくないが（「小さいときは男の子とよく遊んでいた」という回避方略を時に聴く）、単純に経験する“場数”の多さが苦手な対人関係を発達させていく（させていかざるをえない）こともあるのではないだろうか。男子は一人で遊んでいてもそれが比較的許容されている（＝社会性を育む機会が減る）が、女子の場合は幼い頃より社会的関係を求められることが多く（苦手としていても）社会性を育まざるを得ない。そのため、成人期において「社会性の質的な差異」（Wing）が表になりにくいのではないだろうか。そうした彼女たちをよくよく見ると、「パターンとして」対人関係を身につけた人も少なくないようだ（ぎこちない会話、にこやかだがちょっとずれた応答、猫をかぶって状況を回避するなど）。なお筆者は、「天然ボケ」と扱われる人の中にこうした特性をもっている人は多いのではないかと考えている。そう扱われるためにはそれはそれで一つのスキルが必要だが。

また、好まれる対象が比較的やわらかいものであることも影響していようか。女性の場合男性のように堅いものに惹かれることは少なく、ぬいぐるみやアニメキャラな

どを彼女たちは好む。純粹にソリッドなものではなく、素材としてやわらかい。そのことが他者との共有可能性を(比較的)開きやすいとも考えられる。あるいは、興味関心が純粹な「モノ」に行くよりも「ヒト(関係)」に行くことが多いのもあるかもしれない。先項のオタク論議を引きずるが、男性のオタクはロボットや機械などのモノにいくことが多いが、女性のオタクはモノよりもヒト同士の関係を重視する傾向がある。モノとのかかわりは人を自閉的に見せやすいが、ヒトに対する関心は人を社会的に見せやすい。前章の用語を用いれば、対象が自閉的ではなく移行的に見られやすい(なりやすい)とも云えようか。しかし、そこで関心を向けられているヒトはどこか戯画的な、solidなものでもあることもあり、その柔軟性の欠如が発達障害特性を浮かび上がらせることもある。このように、彼女らに好まれる対象の特質が、発達障害特性を分かりにくくしていることもあるのではないか。

なお、それと少々離れるが、発達障害傾向にある女性において、恋愛関係に対人困難の活路を見出す人もながしきいるようである。恋人とのつながりはそもそも二者関係なので、「社会的、職業的」場面とは異なる。もちろん、あらゆる場面での発達の難しさから性発達についても独特の道りを通ることもあるし(次章で検討)、定型発達の人の恋人関係とは異質ではあることもあるが、対人関係のぎこちなさや独特のコミュニケーションが恋愛関係という二者関係では大きな障害とならないこともある。それどころか、発達障害的な特性がその人のかけがえのない「魅力」となり、ある種の不器用さが「可愛い」と認識されてしまうことも少なからずあるようだ。

思春期の恋人関係の有無は対人関係スキルを見る一つの指標となり、学生相談面接において恋人の存在が語られた場合は、ある程度の社会的スキルのある人かを見立てていたこともあった。しかし、どうもそうではない例が散見されることを鑑みるに、思春期での三者関係への参入に躓いたときに恋愛の二者関係に入り込み、そこでの安定を求める一群の人たちがいるのではないかとの仮説を立ててみることにした。「恋愛関係が築ける」のではなく(誇張して言えば)「恋愛(という二者)関係しか築けない」のである。云うならば、恋人を「自閉対象」とするケースである。無論恋愛関係は彼女らが対人関係を経験する大きな機会になるので、それを通して他者との共有世界に徐々に開かれていく(=移行的になる)場合もある。片時も離れることなく共におり、少しでも離れるとパニックに陥る状態から、次第に相手にも相手の意志があることを知り、つながりを有しておりながらも他にも開かれた関係も体験できる状態へと変化し、よりゆとりある柔軟な人間関係へと開かれていく機会として恋愛関係が活用されることもある(もっともこれは発達障害特性とは無関係かもしれないが……)。

最後は少し議論が逸れてしまったが、いくつかの要因により女性のほうが発達障害的特性が目立ちにくくなる傾向はあるだろう。男性ほど「明らかなズレ」になりやすく、そのため「障害」というほど顕著にはならなくなる。しかし、その陰には彼女らなりの「適応の工夫」が存在しているはずで、「特性」はありながらも「障害」として問題化しない(されない・しえない)現状が隠されているのだろう。

なお、こうした臨床感覚をある程度裏打ちしている調査研究として、砂川（2015）の質的研究がある。砂川（2015）は成人になって診断のついた ASD 女性に面接調査を行い、彼女らの語りから ASD 女性を見えにくくする要因として【「大人しさ」のベール】、【就労状況のベール】、【家庭のベール】、【精神症状のベール】という四つを挙げている。つまり、受動的で目立たないため問題が顕著化せず、職場に適応できず短期間で職を変えてもそれが社会的にあまり問題にならず、社会的状況はなんとか適応できた人が家庭状況（子育てや近所づきあいなど）で破綻した場合それは社会的に顕在化しにくく、そしてそれがいざ顕在化したとしても鬱などの精神症状が前景化することで陰にある ASD 特性が見逃されやすい、という四つの「ベール」（砂川、2015）である。これは実際に何らかの差し障りがあり ASD と診断された人を対象とした研究であるので、何らかの困りごとを抱えて相談室を訪れながらも、大きな精神症状がないため精神科受診とまでには到っていない筆者の臨床場面とは若干対象が異なり、そうしたことが、砂川（2015）は見逃される「ベール」に着目しているが、筆者はある種の可能性に着目している（＝顕在化させない要因）と云う違いに影響しているかもしれない。筆者に欠落しているのは、「【家庭のベール】」で描かれた家庭を持った際の苦悩であるが、これは筆者が主に大学生を対象としているからだろう。いずれにせよ、診断が確定した人たちを対象に行った質的調査からなされたこの結果抽出は、我々の臨床現場にも極めて大きな示唆を与えてくれるものである。

しかし、発達障害特性のある女性を「気付かれにくい」と考えるのか、「なんとかギリギリの適応は保ってきた」と考えるのかは難しいところがある。男性のほうが「問題（障害）になりやすい」のか女性のほうが「見逃されやすい」のか、男性のほうが「適応の機会を与えられずに来た」のか女性のほうが「なんとか適応してきた」のか。無論そのギリギリの適応も楽な道ではなかっただろう。その苦しみへの想像力は必要である。しかしそのためにも、彼女らが社会生活を営んでいく上での苦しみが、生来持った特性によるものであるとの発想力をもたなければならず、男女比にとらわれることなくその個人がもつ発達障害特性に気付く視点は非常に重要であると考えられる。

3. 発達障害と性アイデンティティについて

ここで扱うのは、発達障害的傾向を持つ人と彼らの性アイデンティティについて、である。そしてそれとの関連で、性的マイノリティ（いわゆる LGBT）との関係についても少し視野に入りたい。予め断っておくが、筆者は LGBT の人が発達障害に当てはまると云っているのではない。発達障害的背景とは無関係の人もたくさんいる。ただしかし、性的マイノリティを自認する人の中に、そこに発達障害的背景が影響していると思われる人がいくらか存在しており、また性的マイノリティではなくとも発達障害傾向をもつ人における性アイデンティティ確立にまつわる難しさがあることから、

この両者を絡めながら以下では考えていきたいと思う。

まず、何をもって「性の定型発達」とするのかというなかなか難しい問題がある。何がノーマルで何がアブノーマルか。以前は同性愛が精神障害のカテゴリーに入れられていたが、関係各位の運動もあってDSMの診断基準から外されたという歴史的経緯もある(Kutchins & Kirk, 1997)。何が正常かとの問いはただでさえ難しいのに、性に関しては殊更困難である。DSMの「性的サディズム障害」にしても、「同意していない者に対してこれらの(引用者註:サディスティックな)性的衝動を実行に移したことがある」(APA, 2000/2002)とあるから、同意する相手がいる場合は障害ではない。何ををもって正常な性発達とみなすかは国により時代により異なる。

そしてこの難題を前提とした上で、発達障害をもつ人の在り方を視野に入れると更に難しい問題が生じてくる。発達障害の人はそもそも発達にながしかの偏りがあり、いわゆる「定型発達」の人のように全体が均等に発達していくわけではない。集団的規範にそっくりそのまま合致していける人たちではない。なので、思春期において、周囲の人たちがうつつを抜かす「恋愛」という価値基準にも、ながしかの「馴染めなさ」を感じても不思議ではない。そもそも抱えている非定型発達という特質に、性アイデンティティ=性自認のテーマが絡んでくる場合は十分に想定される。

例えば、まず「周囲の同世代の人たちへの馴染めなさ」が小さい頃から漠然と感じられている。そして思春期に入りその側面が強くなり、「周囲の同世代の人たち(がもつ性的関心)への馴染めなさ」も混在し出す。その「馴染めなさ」の感覚を抱えたまま生きてきた個人が、あるときに「性的マイノリティ」という一つの規範が与えられたとき、今までの苦勞に名前がついたように感じる。私は今まで生きづらいついてきたが、それは性的マイノリティだったからなのだ、と。このような形でアイデンティファイしていく人もどうやらいそうなのである。

当然ながら、すべての性的マイノリティの人たちがそのような道筋をたどると云っているのではなく、発達障害がベースにあると云うつもりもない。単純な両者の重複もあるだろう。ただ、この「幼少期からの違和感→名前がつくことによる納得」のプロセス自体は、例えば青年期に医療機関を訪れて発達障害との診断がされたときに起るプロセスと大して変わらないものだ(プロセスが同じだからと云って同一視しているわけではない)。

発達障害的特性をもつ個人は、周囲との馴染みにくさを抱えて幼少期から育ちがちである。定型発達のスタイルにどうにも違和感を感じ、そちらに同一化できない。自分のありようが定まらず、世の中に定位できない。つまりアイデンティティが定まりにくい傾向をもつ。そうしたとき、何か外から明確な基準が与えられて、それが本人にとってながしかフィットするものであれば、そちらに過剰に適応してしまうことも時々ある。内側からの自己規定でなく外側から自己規定するのである。先章までの用語をもち出せば自閉対象的アイデンティティとでも云えるだろうか。それは性アイデンティティに限らず、一昔前では新興宗教の熱烈な信奉者となっていたかもしれない

いし、学問や詩歌への熱狂などもあったかもしれない。今まで感じていた違和感が一瞬で崩壊し、今までの苦しみはここから来てたんだ、という発見に近い高揚感がそこにはあろう。

性的マイノリティの人たちの立ち居振る舞いが、どこか戯画化されたものであることがある。例えば「オネエ言葉」というものがある。筆者は性的マイノリティの男性すべてが「オネエ言葉」で喋っているとは思っていないが、ああしたコード化された話し方はわかりやすく一つの基準を示してくれる「型」となる。それがアイデンティティの定まりにくい個人にとって、かりそめの枠組みとして機能し、本人の内的な成長を支えてくれることもあるように思う。ああいうテンプレートの話し方は、対人距離を測定するという（定型発達の人が当たり前になしているが非定型発達の人にとっては困難な）難題から個人を解放してくれる。そうしたところからも、性的マイノリティ的の在り方が、性アイデンティティが定まりにくい発達障害の人にとって馴染みやすい在り方である可能性も出てくるだろう。

しかし、このようにアイデンティティを外から規定する在り方は単に発達障害をもつ個人に限ったものではない。我々が自己のアイデンティティを見出すのはそんな簡単な作業ではない。容易に迷宮に入り込む。その、「簡単に見つからない」過程の中で、「比較的近い何か」に同一化し、その中で自己を形成していくことは多い。「師」と呼ばれる存在は、そのような同一化形成を助けてくれるものでもある。しかし次第に個人が成長していくにしたがって、師との違いのほうが見えてきて、より「自分らしい」在り方を見出していくのもである。いずれにせよ我々が単純に個において「自分らしさ」を見出しているのではなく、何かに同一化しそれへの違和感から自らを見出していくあり方もあるのだから、その過程において、例えば性的マイノリティの在り方を一つの「型」としてその個人の性アイデンティティの探求に用いることもあるだろう。

ただしかし、「性」において難しいのは、時にはある種の不可逆性を孕むことである。少し前の新聞記事に、性別を変更したが元に戻したいとの要望をもつ人がいることを伝えるものがあつた（朝日新聞、2017）。この新聞記事では職業が見付からないから戻したいという流れで書かれているが、そうした理由でなくとも「違和感があつて変更したが、実はその違和感自体別のものから由来している」というケースも充分ありえるのではないか。そもそもわれわれの性アイデンティティは、男か女かでシンプルに二分するものなのだろうか。生物学的には確かに性は基本二つに分かれているとしても、心理的にはもっと多様なものが含まれているという見方は例えば Jung のアニマ・アニムス元型などにもある。まず尊重すべきは心理的な性の多様性であつて、そちらを出発点としておく方がいいのではないだろうか。

ただこの「多様性」とやらが厄介者で、そうした曖昧さに耐えられるにはある程度の器が必要である。そもそもどのような名前がつくかは社会的な決まり事に過ぎず、本来の生を生きる生命体としての個人からすればただの「呼び名」に過ぎない。概念

が先にあるのではなく生きる個人が先に存在している。生きる個人が何かを抱えており、その様態はどうであるのかを考えるときの作業仮説が概念である。けして個人を規定するものではない。但し「呼び名」は事態の認識を助けるための符牒になる。この両面いずれにも目を配る必要があろう。

やや性アイデンティティから離れたが、発達障害をもつ個人における性アイデンティティの定まらにくさについては少し注意を向けておきたいと思う。発達障害をもつ人のアンバランスさは性発達においても同様であり、スムーズに進まないところがある。その不均等さがあるなかでLGBTやあるいは性倒錯と呼ばれる性的マイノリティの世界に近付いていく人もいる。それが発達障害に「起因する」とは云えまいが、発達障害者における性発達の難しさについて意識を向けておくことは必要であると思われる。

おわりに

生きにくさを抱えた一群の人たちがいる。それが先天的なものであろうとなかろうと、今この時に生きにくいことはなによりも確かである。それは、時を分かたず一定の割合で存在していよう。その時代で彼ら彼女らがホッとする場所は、深夜ラジオであり、宇宙戦艦ヤマトであり、中島みゆきであり、David Bowieであり、機動戦士ガンダムであり、風と木の詩であり、キャプテン翼であり、谷山浩子であり、新世紀エヴァンゲリオンであり、Dir en greyであり、2ちゃんねるであり、初音ミクであり、Sound Horizonであり、pixivである。人と人との間で生きづらさを感じるひとかたまりの人たちがいる以上、そしてそれらの人たちが「そこでなら息をできる」と感じる場所がある以上、そうした聖域（サンクチュアリ）は彼らの生命の質を保証する上でかけがえのない場所となっているはずである。それは大多数の世界からは理解されなないかもしれない。しかし、心理臨床家である筆者としては、その喜びをありありと感じることはできないとしても、それを愉悦と感じるあなたのその世界を、少しでも分かちもてたら、と思う。だって我々は、みな共に生きる人なのだから。共に生きる人なのであれば、どうして彼らを区別する必要があるのか、彼らを「発達障害」として区別せねばならない「私たち」とは何なのか。「ちょっと変わった人」が常に「発達障害」として扱われる社会とは、果たしてどんな組織体なのだろうか。この問いは、常に潜ませておきたい。

幾度となく繰り返しているが、誰一人として同じ人はいない。好奇心旺盛な子ども、静かな遊びよりにぎやかな遊びを好む子ども、校庭の片隅で黙々と木の葉をすりつぶして遊ぶ子ども、日がな一日アリの行進を眺めて安らぎを感じる子ども、なんてことない石を握りしめてその感触に笑みを浮かべる子ども。そうした彼らを、ADHDなりASDなりの語彙でしか語れないというのだとしたら、ひょっとしたらそれは、相当貧しい社会なのではないのだろうか。

人の生まれもつての能力・育ちかたに「定型」があり、それから外れたものを「非定型」と名付け、それらは「障害」であるから「支援」が必要で、その「育ち」の「ハンディキャップ」を「支援」する。そうした取り組みを否定するわけではないし、そうした支援が世の中で求められていることは充分分かってはいるのだけれども、そうでないと一人一人の違いを語れないのだとすれば、それは、我々の社会では多様性の抑圧された生き方しか許容されていないことの陰画に過ぎない。

無論、この世で認識されるためにはなにがしかの符牒は必要なのだから、その言葉のもと権利を主張するという意味合いがあるのはよく分かる。しかし時折、その言葉で規定される姿に自らがなろうとしている人を見ると、なんだか順番が違っているのでは、という気もちが湧いてくる。私はASDである、ADHDである、などなど。自分自身の個性性を捨象し、時に「ASDだからこう振る舞わねばならない」かのように振る舞う彼らの姿を見るに、複雑な思いを拭いきれない。確かに我々は社会の中で生きる生き物であり、人に求められる姿であるよう自らを変えていくところがある。しかし、もう少しその人がその人らしく在る在り方から考えていくような道はないのだろうか。

調べれば大体のことは情報を得ることができ、標準化されたマニュアルがあり、国内のどこに出かけても同じようなショッピングモールがある今の世の中である。確かにそれらは便利だし私も普段利用している。しかし、例えば定型発達をショッピングモールに喩えたとすれば、それ以外の個人商店も同じくらい活き活きと併存しているのが社会の豊かさではないのだろうか。ちょっと変わった店だけれどもなんだか面白い。作られた異質さではなく、歪みながらもその歪みこそが如何ともしがたい魅力であるような、そんな商店を尊ぶ世の中であれば、いわゆる発達障害とされる人も生きやすくなるのではないだろうか。「発達障害者の就労支援」としてその相談体制や職業訓練などに予算をつぎ込むよりも、社会自体がそのような多様性に満ちている方がよほど発達障害をもつ人にとって生きやすくなるのではないだろうか。もう手遅れなのかもしれないけれども。

最近、思春期に読んだあるマンガのセリフが頻回に脳裏をよぎる。ゆうきまさみ(1998)による『機動警察パトレイバー』というマンガである。レイバーと呼ばれる産業ロボットが活躍する近未来、そのロボット犯罪の取り締まりにあたる警察の一部隊がこの物語の主演である。その部隊を担うのは型にはまらない異端児揃い、はぐれもの、外れものの集まりである。それを率いるのがこれもどこか型破りな後藤隊長。そんな彼が部下に向けて発する一言がある。発達障害であろうとなかろうと、なにがしかの生きづらさを抱えて生きる彼ら彼女らと接する際に、筆者はこの一言が思い浮かぶ。本稿はこのことばで締めくくりたいと思う。

「みんなで幸せになろうよ。」

文献

- American Psychiatric Association (2000). *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders, Fourth Edition, Text Revision (DSM-IV-TR)*. American Psychiatric Publishing. 高橋三郎・大野裕・染矢俊幸 (訳) (2002). DSM-IV-TR 精神疾患の診断・統計マニュアル. 医学書院.
- American Psychiatric Association (2013). *Desk Reference to the Diagnostic Criteria from DSM-5*. American Psychiatric Publishing. 高橋三郎・大野裕 (監訳) (2014). DSM-5 精神疾患の分類と診断の手引き. 医学書院.
- 朝日新聞 (2017). 性別変更後「元に戻したい」同一性障害、こんな悩みも. 2017年10月30日朝刊. (URL) <http://www.asahi.com/articles/ASKBY5GNNKBYUTIL013.html>
- Kutchins, H. & Kirk, A.S. (1997). Making us crazy. The Free Press. 高木俊介・塚本千秋 (監訳) (2002). 精神疾患は作られる. 日本評論社.
- 総務省統計局 (2018). 労働力調査. <https://www.stat.go.jp/data/roudou/sokuhou/nen/dt/pdf/index1.pdf>
- 砂川芽吹 (2015). 自閉症スペクトラム障害の女性は診断に至るまでにどのように生きてきたのか. 発達心理学研究, 26(2), pp.87-97.
- 滝川一廣 (2017). 子どものための精神医学. 医学書院.
- Tustin, F. (1992). *Autistic states in children, revised edition*. Routledge.
- 山川裕樹 (1999). 思春期の錯覚の領域をめぐる一試論. 京都大学大学院教育学研究科修士論文.
- 山川裕樹 (2018). 「発達障害」・極私論1. 成安造形大学紀要, 9, pp.33-44.
- 横見浩彦・菊池直恵 (2002-2006). 鉄子の旅, 1-6. 小学館.
- ゆうきまさみ (1988). 機動警察パトレイバー, 1. 小学館.
- Wing, L., & Gould, J. (1979). Severe impairments of social interaction and associated abnormalities in children: Epidemiology and classification. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 9, 11-29.
- Winnicott, D.W. (1971). *Playing and reality*. Tavistock Publications.

医療連携プロジェクト授業事例報告

Medical collaboration project class case report

大草 真弓

Mayumi OKUSA

石川 亮

Ryo ISHIKAWA

医療連携プロジェクト授業事例報告

Medical collaboration project class case report

大草 真弓

Mayumi OKUSA

石川 亮

Ryo ISHIKAWA

教授（情報デザイン領域：グラフィックデザイン、インタフェースデザイン）

准教授（地域実践領域：現代アート）

At the medical site, there is an overwhelming difference in the amount of knowledge of the provider of the service and the patient, and a communication gap tends to be born. Many challenges remain to support solution by information design and communication design. In this paper, we report three cases of medical collaboration classes with inhalation therapy as the theme. Based on these cases, we would like to design an effective medical collaboration curriculum for students studying design.

1. はじめに

医療現場にはサービスを提供する医療者側とサービスを受ける患者側の知識量に圧倒的な差があり、コミュニケーションギャップが生まれやすい。そこには、情報デザインやコミュニケーションデザインによって解決をサポートすべき課題が多く残っている。

成安造形大学では滋賀吸入療法連携フォーラム^{【註1】}からの依頼で、吸入療法啓発ポスターのデザイン（2013）、喘息やCOPDの潜在患者を発見するための「肺の力ゲーム」のデザイン（2014）、「肺の力ゲーム」を全国展開するためのゲームセットと運営マニュアル類のデザイン、アプリの提案（2015）などを、プロジェクト授業という形で行ってきた。これらの成果物のいくつかは既に薬局や健康イベントで実際に使用され、いずれも効果があるとの評価を受けている（大草、石川：2018）。

2016～2018年度は、少しずつアプローチを変えながら芸術大学における医療連携プロジェクトの活動プロセスのモデル化を検討するとともに、これまでよりもう一步治療の現場に踏み込んだコミュニケーションツールのデザイン提案にチャレンジすることにした。本稿では芸術系大学における医療連携授業の3タイプの事例を報告する。

2. 事例紹介 1— 2016年度：プロデュース演習6

2.1. 対象者

履修者は総合領域3年生16名。2年次までに必修科目としてマーケティング、商品開

発、サービスデザインなどの基礎を学んでいる。成安造形大学の総合領域の特徴として、各自の興味に応じてグラフィックデザインや映像制作などのデザイン系授業を選択履修している学生もいるが、数人はファインアートやイラストレーションを中心に履修しており、デザインにはあまり興味がない学生も含まれている。

2. 2. 授業概要・目的

2016年度のシラバスより引用する。「デザインが対象とする領域は、モノからコト（モノを含めたサービス全体のデザイン、ユーザーエクスペリエンスのデザイン）へと広がってきています。地域や企業と連携したプロジェクトの中で、ワークショップを通じてサービスやユーザー体験に関わる具体的な問題点を発見し、プロトタイプで解決案を提案します。また、その過程で、アイデアの発散・収束技法やプロトタイプの制作・評価技法などについて演習します。」

2. 3. 到達目標（2016年度シラバスより引用）

- ① 問題を発見し、それを解決するためのアイデア展開ができる。
- ② 展開したアイデアをコンセプトに基づいてまとめることができる。
- ③ プロトタイプを制作し、有用性を評価しながら、デザイン提案できる。

2. 4. 授業進行と中間成果物

2. 4. 1. 事前準備

教員がクリニック・薬局・自宅での模擬受診ビデオを事前に準備した [図1]。



図1

2. 4. 2. チームビルディング

先に述べたように、成安造形大学の総合領域の特徴は個々の学生が学んでいる内容

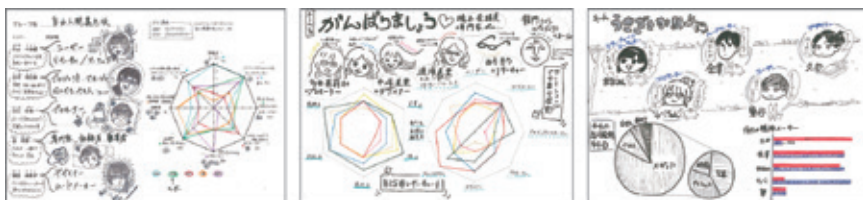


図2

にかなりの差異があり、同じクラスの学生同士もお互いにどんな授業を受けて来たのかをあまり知らないことも多い。初回の授業では、学生の特徴を把握しグループでの作業を円滑に行うために、各自がこれまで学んできた分野や得意ジャンル、グループワークの際に希望する役割などを皆で共有するワークショップを実施した [図2]。

2. 4. 3. 導入：病院・薬局での残念な思い出エッセイ

医療に関わる課題意識を共有するために、病院や薬局で体験した残念な思い出を各自がイラストエッセイとして描いて全員に発表した [図3]。



図3

2. 4. 4. 診察体験：ビデオからCJMを制作

模擬受診のビデオを各グループに配布し、iPadで観察しながらカスタマージャーマップを制作した [図4]。



図4

2. 4. 5. 吸入療法体験

模擬吸入薬を使って数人が吸入体験を行い、吸入の難しさを体感した [図5: 左]。

2. 4. 6. 仮設ペルソナ制作

診察時のコミュニケーションに課題を抱えていると考えられる患者を想像して、各自が仮設ペルソナを制作した [図5: 右]。



図5

2. 4. 7. ミニワークショップのデザインとリハーサル

医師・薬剤師らと共に行うワークショップの導入用のミニワークを各グループが企画し、リハーサルを行った [図6]。各チームとも呼吸や肺に関わるミニワークを提案できていたが、最も吸入療法ワークショップの導入にふさわしいと思われるワークを投票で選択した。



図6

2. 4. 8. ワークショップ

医師3名と薬剤師3名に参加を依頼し、学生グループにそれぞれ1名ずつが加わって3時間で4種類のワークショップを実施した [図7]。

- A) 学生企画：導入ミニワークショップ「ドキドキ♡吸引力レース」
- B) 課題発見ワークショップ「患者さんの悲しみを探る」 [図8：左・中央]
- C) アイデア展開ワークショップ [図9]
- D) ブラッシュアップワークショップ [図8：右]



図7



図8



図9

2.4.9. グループワークでデザイン提案

4回の授業でデザイン案を固め、各グループでプロトタイプ制作を行った。

2. 5. 最終成果物

デザイン提案するプロトタイプとコンセプト解説ボードを、学びのプロセスを紹介する3枚のボードと共に進級制作展で展示・発表した〔図10〕。来場者に伝えることを意識したうえで自分たちが何を学んできたのかを、しっかりと振り返ってまとめることのできる機会ではなかった。実習・演習授業は「作ること」に集中し始めるとそれ自体を楽しんでしまい、合評でも結果としての作品の仕上がり状態に焦点を当てがちである。しかし、自分たちの学びをメタ視点で振り返ることは学びを確実に強化する。成安造形大学では2017年度から進級制作展が開催されなくなったので、何らかの形で外部発表できる機会を作れないかと考えている。



図10

2. 6. 授業のまとめと課題

大学生の多くは若くて健康であり、病院に行く機会自体がもともと少ないため、病院やクリニックでのディスコミュニケーションの現場に立ち会うこともあまりない。そのため、患者の立場に共感することが難しい（この年の受講者で頻繁に医療機関に通っている学生は3名ほどであった）。特に初診に立ち会ってコミュニケーションの現場を観察できる機会は全くない。そうした理由からか、医療連携プロジェクト自体を自分ごととして取り組みにくいと感じている学生が散見された。また、少し踏み込んだ提案をしようとすると圧倒的に知識が不足しており、その分野を深掘りすることの自分にとっての価値を見出しにくいともいえる。必修科目の授業課題として医療をテーマにすること自体、少々難しさがあつた。

次年度は履修対象者を「医療に興味をもっている学生」に絞り、どうしたら学生が患者の立場に立ちやすくなるのかを検討していくこととした。

3. 事例紹介2—2017年度：プロジェクト演習E：医療を考えるワークショップ

3. 1. 対象者

2017年度は専攻とは関係なく希望者のみが自由に履修できるプロジェクト科目を授業対象とした。プロジェクト履修者の募集時は「2年生以上が望ましいが、1年生から参加可能」とした。履修者14名の内訳は、総合領域：3年生3名・2年生2名、美術領域：3年生2名、メディアデザイン領域：4年生3名・3年生3名・2年生1名であった。

この年の履修者は3・4年生が中心で、専門課程の中でデザインプロセスの基礎を学んできた学生が多かったため、「HCD プロセスを社会との接点で実際に体験して学ぶ」ことを学習目標の中心において授業を展開し、ペルソナ・シナリオ法やカスタマージャーニーマップをスムーズに体験させることができた。選択科目で全学年全コースが対象のプロジェクト授業で、医療にある程度興味のある学生のみが履修したことも、課題に集中できる下地となった。

3. 2. 授業概要・目的

2017年度のシラバスより引用する。「医療現場でのデザインについて、医師や薬剤師と一緒に考えていきます。クリニック・薬局で模擬受診して吸入療法指導を体験し、ワークショップを通じて課題を発見し、デザインによる解決策を模索・提案します。」

3. 3. 到達目標（2017年度シラバスより引用）

- ① 状況を観察して具体的な問題点を発見する力
- ② 利用者の問題行動の背景にある原因を考え、潜在的なニーズを探る力
- ③ 問題点を解決するデザインを考察・提案する力

3. 4. 授業進行と中間成果物

3. 4. 1. 導入：病院・薬局での残念な思い出エッセイ

プロジェクトメンバーの自己紹介も兼ねて、前年度と同様に、イラストとエッセイで病院や薬局での課題意識を共有した。[図3と同様]

3. 4. 2. 仮設ペルソナ制作

前年度に医師・薬剤師と共に実施した「患者さんの悲しみを探る課題発見ワークショップ」の結果をベースに、病院・クリニック・薬局でコミュニケーション上の課題を抱えている患者の仮設ペルソナを制作した [図11：左]。14名の履修者が制作した仮設ペルソナは年齢的にも子供から老人まで幅広く、帰国子女や在日ブラジル人の履修者がいたため外国人も含まれているといった多様性があった。前年度のワークをベースにしていたこともペルソナが考えやすかったといえる。ここでペルソナをもっと絞り込むべきかどうか悩ましいところではあったが、この後の模擬診療で各自に患

者を演じてもらうために、「自分がその行動を想像できる範囲で、最もコミュニケーションに問題があると思われる患者ペルソナ」として多様なままで捉えていくことにした（ある意味ペルソナとは呼べないのではあるが）。



図11

3. 4. 3. 吸入薬体験

全員が模擬吸入薬を使用し、吸入体験と相互観察を実施した [図11: 右]。しかし、吸入薬自体の種類があまりにも多く使用方法がそれぞれに異なること、自宅の環境とは異なる環境での吸入体験になってしまうことで、吸入そのものに関わる本質的な課題の発見はどうしても積み残しになってしまう部分がある。

3. 4. 4. 模擬受診・医師を交えた質疑応答

事前に作成した「自分がその行動を想像できる範囲で、最もコミュニケーションに問題があると思われる患者ペルソナ」になりきって、模擬診療の体験・観察を行った [図12: 左]。設定した患者ペルソナとして演劇的に受診・観察することで、1回の模擬診療でタイプの異なる複数患者視点での観察を行うことが可能で、授業後のアンケートからも共感度と集中度の高いワークとなったことがうかがえた（大草, 石川: 2017）。



図12

また、前年度の事前調査を元に制作したCJMから思考・感情の内容を一旦削除してカスタマージャーニー記録シートを作成し、模擬診療の状況を他の観察者と比較しやすい形で記録していった [図12: 右]。

6人ずつ2回セットの模擬診療の後、自分自身の疑問、ペルソナとしての疑問について、医師と対話してCJMの記述を補っていった [図13: 左]。

カスタマージャーニー記録シートには、自分で作成した仮設ペルソナ、医師や薬剤師の助言を受けて作成したペルソナ、自分自身の3つのタイプの思考や感情を、ペンの色を変えることで重層的に記録することができる [図13: 中央・右]。



図13

3. 4. 5. タッチポイント上の課題リストアップ

14枚のカスタマージャーニー記録シートをプロセス／シーン毎に重ねて記述を見ていくことで、課題を発見していくワークを行った。そこに現れる課題は患者によって時に真逆の要求であることがわかる [図14: 左]。このあたりを深掘りすればコミュニケーションツールにも多様性が必要とされることが理解しやすい。しかし、一番の気づきは、医師と患者のタイプのマッチングが必要であることと、患者タイプだけでなく医師のタイプによっても提案すべきコミュニケーションツールが異なるということであった。医師と患者とツールの間のマッチングに関しては、今回は対応できなかったが、今後検討すべき課題である。

3. 4. 6. デザイン仮説

発見した課題をペルソナマップに重ねて、課題解決のためのアイデアブレインストーミングを行い、その中から各自がブラッシュアップするアイデアを選択した [図14: 右]。

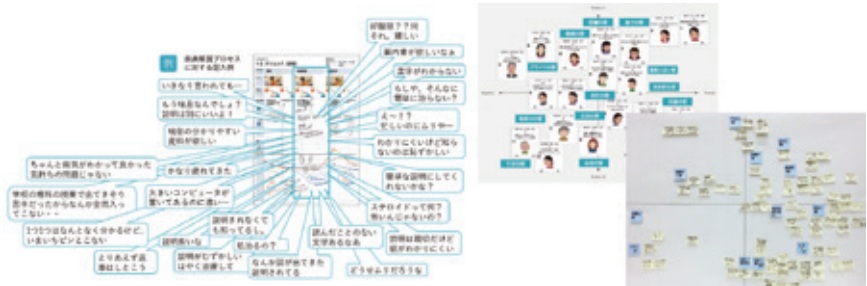


図14

3. 4. 7. デザイン検討ワークショップ

呼吸器内科の熟練専門医3名の協力を得て、デザイン案のプロトタイプを見ながら改善方法を探るデザイン検討ワークショップを行った [図15]。



図15

3. 4. 8. デザイン案のブラッシュアップ

ワークショップでの結果を受けて各自がブラッシュアップを行った。

3. 5. 最終成果物

最終成果物として14点のデザイン提案を行った（共同制作者：1組、2点提出者：2名、未提出者1名） [図16-1] [図16-2]。図に示すように、様々なタイミングで改善タッチポイントを発見して提案を行っている。とはいえ、クリニックでの一般的な課題に注目した提案が8 / 14点と多く、今回対象にしたかった喘息・COPDの吸入療法そのものに関わるコミュニケーション課題にチャレンジした案は6 / 14点であった。



図16-1

3. 6. 授業のまとめと課題

この年のように、デザインプロセスの中でのユーザー調査の必要性や、ペルソナ／シナリオ法について既にある程度学んでいる学生が多い場合、ユーザーの立場に立って模擬受診を受けたりそれを観察したりすることは、難しいながらも十分に可能であることがわかった。(大草, 石川: 2017)

しかし、受付～予備検査～診察～検査～診断～原因と治療法（吸入器の使い方も含む）の説明～支払といった比較的長い一連のカスタマージャーニーを体験するため、各々の学生が発見したコミュニケーション課題が分散し、その後各自が別々の課題を解決するためのデザイン案作成に向かうため、深く調査する、広くアイデア展開を行うといったプロセスを他の学生と共有することが難しくなってしまった。学年や専門コースの異なる学生が集っていたにもかかわらず、グループワークでお互いに学び合うことがあまりできなかったのは残念であった。

この点に関しては、次のような授業改善方法を考察した。

- ・ 模擬診療を受ける前の段階でグループを作り、各自が制作したペルソナについて語り合い、絞り込むプロセスを入れる。
- ・ 医療関係者との事前の打ち合わせである程度絞り込んだ課題と目的を設定し、医療関係者からターゲットの人物像をインタビューしてペルソナを制作し、その視点に立って模擬診療を受ける。
- ・ 各自が発見したテーマを発表した時点で、取り組みたいテーマを改めて選んで

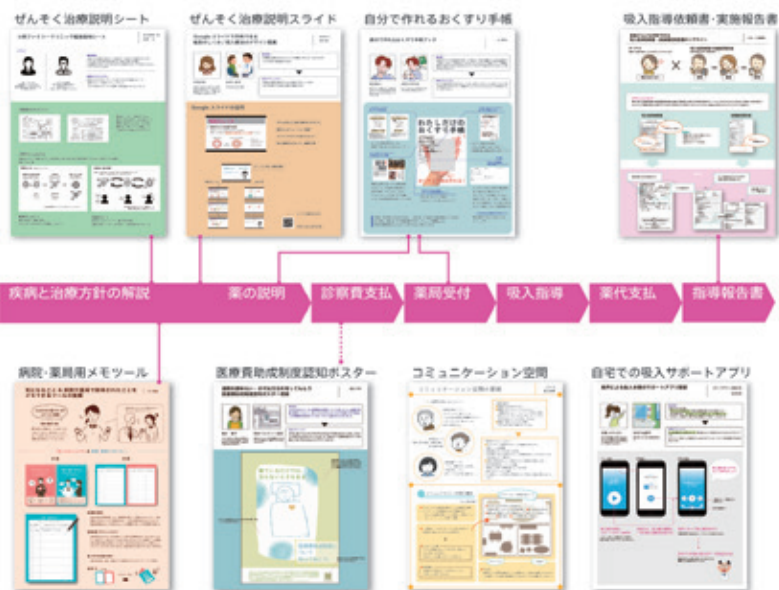


図16-2

チームを組み、アイデアのブレインストーミングをチームで行う。

- ・各自が選んだテーマを医療関係者にプレゼンテーションし、既存の改善策の有無や医療関係者や患者にとってのニーズの大きさなどについて話し合いの機会を設ける。

4. 事例紹介 3— 2018年度：プロジェクト演習 E：医療を考える

4. 1. 対象者

前年度に続いて2018年度も対象授業は選択科目のプロジェクト演習とした。プロジェクト履修者の募集時は「2年生以上が望ましいが、1年生から参加可能」とした。履修者は7名で内訳は、総合領域：3年生1名、イラストレーション領域：4年生1名、2年生3名、空間デザイン領域：2年生2名でデザインプロセスへの馴染みが薄かった。このため、授業展開を途中で急遽変更する必要があった。

4. 2. 授業概要・目的

2018年度のシラバスより引用する。「医療現場でのデザインについて、医師・薬剤師・患者と一緒に考えていきます。模擬受診とワークショップで医療現場でのコミュニケーションを体験し、課題を発見してデザインによる解決策を模索・提案します。」

4. 3. 到達目標 (2018年度シラバスより引用)

- ① 状況を観察して具体的な問題点を発見する力
- ② 利用者の問題行動の背景にある原因を考え、潜在的なニーズを探る力
- ③ 問題点を解決するデザインを考察・提案する力

4. 4. 授業進行と中間成果物

4. 4. 1. 事前準備

模擬診療を依頼するおぐまファミリークリニックの小熊医師らと事前に打ち合わせを行い、テーマを「初診で喘息と診断し吸入薬を処方したにも関わらず、なぜか2回目の診察に来てくれない患者さんに、きちんと2回目の診察に来てもらうにはどうしたら良いか」ということに絞り込んだ。模擬受診時にも質疑応答時にもアイデア発散時にも繰り返しテーマを伝えて、履修者全員で一つの目的に向かってデザインを進める環境を整えた。

4. 4. 2. 導入：病院・薬局での残念な思い出エッセイ

2016・2017年度と同様 [図3と同様]。

4. 4. 3. 仮設ペルソナ制作

前年までと同様に仮設ペルソナを制作する時間をとったが、ペルソナ・シナリオ法のフレームワークを用いるアプローチは1名を除いて初めての体験だったようで、学生たちに戸惑いが見られた [図11: 左と同様]。

4. 4. 4. 模擬受診・医師を交えた質疑応答

2017年度と同様 [図12: 左と同様]。ペルソナ制作でも見られた戸惑いがここでも見受けられた。デザインを進める上で人間の行動観察から入るという経験が少なかったのだと思われる。しかし、質疑応答にはとても熱心に参加しており、医療場のコミュニケーションに対して何らかの役立つものを提案したいとの熱意はしっかりと感じられた。

4. 4. 5. アイデアスケッチとアイデアの位置づけ

以上のような事情から、CJMの制作をベースにした課題発見プロセス経ることはハードルが高いと判断して省略することにした。そして、自分たちが直感的に発見した課題に対するダイレクトなアイデアスケッチからスタートし、その後、課題となっている事象とその理由を探索しながら整理することで、デザインの考え方や手法を学んでもらう形に変更した [図17]。左が初回のアイデアスケッチで、右が2度目のラフ案である。

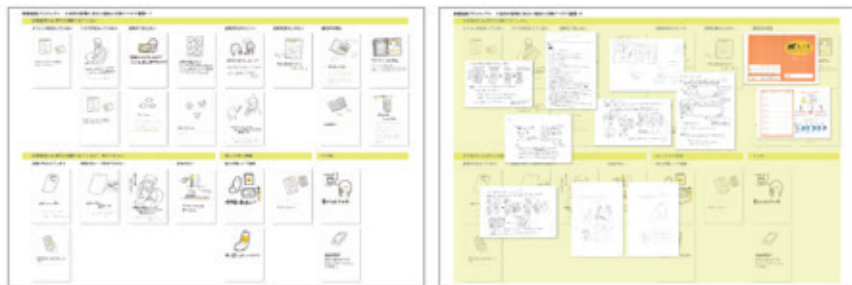


図17

4. 4. 6. デザイン検討ワークショップ-1

2回目のラフスケッチを終えた段階で、若手医師を交えてのデザイン検討を行った。「治療上の課題を共有し直す」、「アイデアの使い道と一緒に考える」、「プロトタイプの問題点を発見し、解決方法と一緒に考える」といったことをコラボレーションできたことで、学生のモチベーションも上がってきた。また、クリニックや病院に最先端の機器を備えたベテラン専門医との会話だけでは見えにくい医療現場のリアリティを感じることができ、大変参考になった [図18: 左・中央]。



図18

4. 4. 7. プロトタイプ制作

7名中6名が紙メディアでの提案、1名が映像メディアでの提案をすることになった。

4. 4. 8. デザイン検討ワークショップ-2

簡単なプロトタイプができたところで、ベテランの専門医3名を交えて再度デザイン検討を行った [図18: 右]。

4. 4. 9. デザイン案のブラッシュアップ

グラフィックデザインのフィニッシュワーク経験者が少なかったため、2018年度の学びに関しては、印刷原稿の制作方法についてかなりの時間をかけて指導することにした。

ラジオドラマを提案した住環境デザインコースの学生のシナリオは、短くカットして映像作品として制作することになった。映像制作の経験がなかったため、映像・放送コースの学生4名と演劇部の学生1名のサポートを得て、実写に取り組んだ。他の学生も医師や教員から専門的な知識を学んでブラッシュアップに取り組んだ。

4. 5. 最終成果物

2018年度の成果物は7点となった [図19]。

4. 6. 授業のまとめと課題

2017年度とは全く異なり、ほとんどデザイン思考に馴染みのない学生が履修してくれたことで、医療連携プロジェクトにおける効果的なフレームワークの模索から教員が一旦離れ、最もシンプルな形でユーザーとして感じたことを素直にアウトプットさせることに徹することができた。その結果、提案の幅がマンガからコント動画まで大きく広がったともいえる。

テーマを「初診で喘息と診断し吸入薬を処方したにも関わらず、なぜか2回目の診察に来てくれない患者さんに、きちんと2回目の診察に来てもらうにはどうしたら良いか」に絞り込んだことも、医師とのワークショップ時に他の学生の発表内容を最後まで興味深く見る態度につながっていたと考える。



図19

5. まとめ・今後の展開について

プロジェクト授業は、履修する学生がそれまでに習得したスキルや体験した授業内容を事前に把握できないというリスクを抱えるが、一方で必修授業とは異なり、医療分野に興味のない学生が参加してくることが少ないというメリットもある。3年間に渡ってタイプの異なる履修者に対する授業が実施できたことで、今後は、連携先との事前打ち合わせの際に履修者タイプによるアウトプットの違いとその幅をある程度示すことができるという感触を得ることができた。

今後はこれらの事例を踏まえて、デザインを学ぶ学生たちにとっての効果的な医療連携カリキュラムを設計したいと考えている。

謝 辞

本稿は平成28-30年度科学研究費補助金・基盤研究(C)(課題番号:16K00725)の助成を受けている「デザイン教育が医療と連携するための手法研究」の経過資料である。模擬診療ではおぐまファミリークリニックの小熊哲也医師にご協力いただいた。ワークショップでは、小熊哲也医師とともに、滋賀医科大学呼吸器内科 中野恭幸博士、山口将史博士、横江真弥博士にご参加いただいた。記してここに感謝いたします。

[註1] 滋賀吸入療法連携フォーラム：滋賀県で吸入療法を広めよう！という医療関係者の集まり

参考文献

大草, 石川:「肺のカゲーム」実施マニュアル制作と「吸入療法啓発のためにデザインには何が出来るか」に関する研究(平成27年度特別研究助成成果報告);成安造形大学紀要第9号(2018).

大草, 石川:複数の仮設ペルソナと演劇的手法を用いた診療観察と記述方法の考察;ヒューマンインタフェースシンポジウム論文集, 5B4-2, 117-120(2017).
長田, 森田:初年次教育のための産学連携プロジェクトの活動モデルの提案;ヒューマンインタフェース学会論文誌, 16(1-4), 261-276(2014).

京都芸術センター
素謡の会「うたいろあはせ」への参加報告

A Report on Participation in Su-Utai-no-Kai
(Kyoto Art Center's Noh Music Program) "Uta Iroawase"

谷本 研

Ken TANIMOTO

京都芸術センター

素謡の会「うたいろあはせ」への参加報告

A Report on Participation in Su-Utai-no-Kai
(Kyoto Art Center's Noh Music Program) "Uta Iroawase"

谷本 研
Ken TANIMOTO

助教（共通教育センター：現代アート・マンガ）

On May 13, 2018, I participated in the design of Su-Utai-no-Kai (Kyoto Art Center's Noh music program) "Uta Iroawase". This is a project to rediscover the charm of Noh, one of the Japanese traditional arts. Mr. Manabu Miki and I presented the results of our color analysis of Noh costumes as a large-scale installation. That was part of the development of color research that began in 2006.

1. はじめに

2018年5月13日、京都芸術センターにおいて、日本の代表的な伝統芸能のひとつである能楽の魅力を再発見するための企画として、素謡の会「うたいろあはせ」が開催された。素謡（すうたい）とは、能楽の中でも舞や囃子をともなわず、正座した演者が謡のみで表現する上演形式である。このシンプルな形式と他の要素をあわせることで、これまでにない角度からアプローチしようというのが本企画の主旨である。全3回のシリーズとして、能楽と現代演劇、異なる流派の見比べなど、意欲的なテーマ設定が並ぶ中、その第1回目として開かれたのが、能装束の色彩をデジタル技術を用いて分析するという企画「能楽に秘められた色の世界」である。能楽師である田茂井廣道氏による企画のもと、ゲストとして色彩研究者の三木学氏が招かれ、私はデザイン面で参加した。

なお、このレポートでは、能装束の色彩についての考察よりも、この企画の中でおこなった大規模なインスタレーションの展開に主眼をおいて記述する。

2. 今回の試み

今回おこなった試みの具体的な内容は次のとおりである。

田茂井氏を通じて、専門業者から30着ほどの能装束の写真画像を提供してもらい、三木氏が自ら開発に携わった「Feelimage Analyzer」^{【註1】}を使用して色彩分析した。このソフトウェアは、デジタル画像内のピクセルをHSV^{【註2】}やL*a*b*^{【註3】}、RGB^{【註4】}など、色を表す値に基づいて、円筒や円錐、球、立方体など、様々な色立体モデルにおける分布として視覚化できるシステムである。今回の分析には、色相・明

度・彩度という色の三属性〔註5〕を、それぞれ円周・高さ・半径の座標に準えた円筒状のモデルとして、マンセル表色系〔註6〕を採用した。そして、能装束の各画像から特徴的な色を代表色として抽出し、そのマンセル値〔註7〕に基づいて色立体におけるポイントとしてプロットした。三木氏はそこから読み取ることができる能装束の色の特徴を言語化するとともに、その分布をバーチャルではなく現実の空間で表現しようと考えた。

なお、三木氏は分析の中で次のような点に言及している。例えば、能装束においては「紅入（いろいろ）」、「紅無（いろなし）」とって紅（赤）系の色の有無が大きな区分けとなっているのであるが、中でも鮮やかな紅が若い女性の装束に用いられるのに対して、年を重ねたり既婚の女性の装束に茶色が用いられりすることから、彩度と若さの関連性を指摘する。また、他方で彩度の高低や色相の違いによって、高貴／卑賤、非日常／日常などの意味性を読み取ることもできるとする。三木氏の考察は、さらに古代日本における色彩観の影響や、生理学上の視点にまでおよぶが、ここでは詳細を割愛する。

2.1 制作のプロセスについて

三木氏の分析と並行して、私たちは京都芸術センターの講堂という広い空間に、巨大なマンセル表色系を再現することにチャレンジした。ただし、予算や技術上の制約から本当の立体にすることは難しいため、色の三属性のうち明度を圧縮した色相・彩度図を表すことにした。

現場スタッフの協力のもと、古い小学校をリノベーションした京都芸術センター特



図1 京都芸術センター講堂における色空間インスタレーション全景（撮影：筆者）

有の木の床面に、白いリノテープ（舞台用のビニルテープ）を貼りめぐらせた直径7mの平面座標が用意された [図1]。そこへ、こちらで制作した厚紙製のパネルを、それぞれの代表色の位置に設置していく。パネルの片面には能装束の写真、反対の面には代表色と、その写真の全てのピクセルをプロットした色相・彩度図をレイアウトしている。また、縦長に立てたパネルの長辺を細く折り込む形で側面とし、そこに各装束の名称を記載した [図2]。

色相・彩度図の円は、右回りに赤・黄赤・黄・黄緑・緑・青緑・青・青紫・紫・赤紫という順に円環になっており、中心部から外周にいくほど鮮やかになる。中央には既成のマンセル色立体模型を設置し [図3]、パネルはそこから放射状に広がる形で、写真が外周側に見えるように配した。そして、鑑賞者がパネルとパネルの間を縫って、座標の中を自由に歩けるようにした。移動することによりパネルの見える面が次々と変異し、その時々によって得られる情報が変わるようにした [図4]。

なお、デザイン上の小さな工夫として、各パネルを床と平行に寝かせるのではなく、垂直に立つように設置した点がある。元来、衣装というものが直立する身体に着用させるものである性質を意識し、空間を移動する鑑賞者とパネルに印刷された能装束が

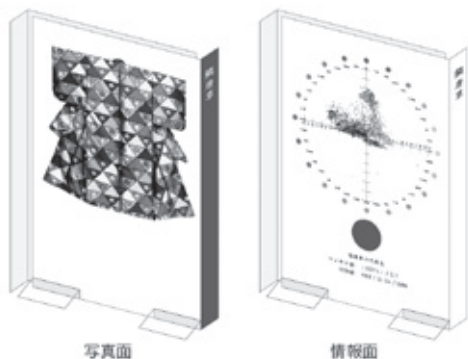


図2 パネルの構造



図3 中央にマンセル色立体模型を設置（撮影：筆者）



図4 鑑賞者は色空間の中を自由に移動することができる（撮影：筆者）

対峙する位置関係を強調したいと考えたのである。

2.2 効果について

今回、表現できたのが立体ではなく平面座標であったとはいえ、ソフトウェア上の仮想でしかなかった色空間を、鑑賞者が身体性を通して体験できる実際の空間に落とし込むことができたことは意義深い。例えば、鑑賞者がある色のパネルの前に立った時に、別の色のパネルとの距離（色差）を身体感覚として認識することができるのである。通常、絵の具のパレットやアプリケーションのカラーパネル、あるいは頭の中にしかない色空間が、体感に置き換わって広がる経験は、これまで色にまつわる多様な企画をしてきた私たちにとっても新鮮な感覚であった。

2.3 制作過程における問題点

次に、今回の制作過程において顕在化した問題点とその対処内容を記しておく。

パネル制作のために当初提供された写真は、能装束を撮影したもものから周囲に写り込んだ背景を切り抜いたものだった。しかし、印刷するには解像度が低すぎたため、切り抜き加工前の元画像を再度送ってもらったところ、背景とともに写った装束は、写真によって色温度^{〔註8〕}が大きく異なっていることが判明した。撮影時の環境から切り離されることにより、写真だけではその対象物の色の正確さが判断できないことに改めて気付かされた。

そこで、背景を含めた写真を用いてディスプレイ上における目視で色温度を調整し、改めて切り抜き加工をおこなった。こうして、できるだけ正確性の高い画像をもとにパネルが制作できるよう努力した。

ちなみにこの問題は、数年前にツイッターなどで取り沙汰された^①人によって違った色に見えるドレスの画像、の話題にも通じる。件の画像は、どこかの店内と思わしき空間に吊り下げられたドレスの写真で、ボーダーの柄が白と金に見える人と、青と黒に見える人がいるというので論争となった。画像の大部分をドレスが占めていることで、逆光なのか順光なのかなど、光源の環境が読み取れず、脳内で無意識になされる補正が見る人によって異なることから起こった現象であるというのが一応の結論のようである。

このような話は、衣装に限った案件ではない。どんな対象物であろうと、複数の画像から色の比較や分析をおこなう場合、避けて通れないハードルとして常に注意する必要がある。ソフトウェア開発に対する勝手な希望であるが、例えば、撮影時に統一したカラーチャートを写しこんでおくことで、画像解析時に自動的に補正するような機能（いわゆるカラープロファイルのような役割）を「Feelimage Analyzer」自体に組み込むことはできないだろうか。

3. 今後の展開の可能性

今回の企画は能装束の色彩を考察するのが大きな目的であったが、身体性をともなう色空間のインスタレーションという発想は、様々な場面において効果を発揮すると実感した。

例えば、図工・美術教育の一環として、学校のグラウンドに白線で大きな座標軸を描き、そこへ児童・生徒が各自さまざまな色のパネルを持って、その色の値に準じたポイントへ移動するというような特別授業をおこなうのはどうだろう。各自数枚ずつ持たされたパネルをめくるごとに、色相も彩度も異なるポイントを見つけて、そこへ素早く移動しなければならない。ある色のポイントから別の色のポイントを結ぶラインは、2色とその中間色から成るグラデーションを辿る道筋である。また、平面座標に圧縮された明度については、背伸びしたり、中腰になったり、座ったり、寝転んだりというふうに、各々の体の屈ませ具合で補うというアイデアも考えられる。このような体験によって、子どもたちは色の三属性を身体感覚で捉えることができるようになる。もちろん、対象を子どもに限定する必要はない。大学生や一般の多くの参加者を募り、色彩感覚を養うワークショップとして開催することも可能であろう。色彩という普遍的なテーマを大勢で共有するダイナミックな展開例として、今後も追求していきたい。

[註1] Feelimage Analyzer

「Feelimage Analyzer」はビバコンピュータ株式会社の登録商標である。「Feelimage Analyzer」の色名解析技術は、大阪府立大学の馬野元秀研究室の協力を得て開発した独自技術である。「Feelimage Analyzer」の色立体解析技術は、多摩美術大学の港千尋研究室の協力を得て開発した独自技術である。「Feelimage」テクノロジーを実現する各プログラムの著作権は、ビバコンピュータ株式会社に帰属する。

[註2] HSV

色相 (Hue)・彩度 (Saturation)・明度 (Value, Brightness) の3要素を基準に表示。HSB とも呼ぶ。上下が明度軸で上にいくほど明るく、明度軸の中心から外側へいくほど彩度が高い。HSV の表示方法として円筒、球、円錐の3種類がある。

[註3] L*a*b*

明るさを表す L* と、色差を表す a*・b* という値で表記する方法。a* 値が+に

なるほど赤みが増し、- になるほど緑みが増す。b* 値が+ になるほど黄みが増し、- になるほど青みが増す。

[註4] RGB

赤 (Red)・緑 (Green)・青 (Blue) の光の三原色。それぞれの数値を幅・高さ・奥行きに置き換えると立方体のモデルとして捉えることが可能。

[註5] 色の三属性

【色相】円周にあたる色相は、赤 (R)、黄赤 (YR)、黄 (Y)、黄緑 (GY)、緑 (G)、青緑 (BG)、青 (B)、青紫 (PB)、紫 (P)、赤紫 (RP) の合計10色相に分類される。さらに各色相の中心を5として10分割するため、本来は合計100色相ということになる。ただし、今回の分析ではその10を4分割にしているため、R や YR などの前に2.5、5、7.5、10といった数値が付く。よって、ここで分類されるのは合計40色相である。

【明度】高さにあたる明度は、最も暗い反射率0%を底面、最も明るい反射率100%を上面として10分割される。中心

軸は無彩色であり、白、段階的な灰色、黒が位置する。そして、一定以上の色味を帯びると、中心から円周に近づくことになり、有彩色になる。なお、無彩色の場合は、明度数値の前に「N (Neutral)」をつけて表記することになる。

【彩度】半径にあたる彩度は、中心軸から放射状に離れるほど鮮やかになり、0~14程度の目盛りで表される。ただし、必ずしも14が最高値ということではない。最高彩度は色相によって異なり、それぞれの明度も同じではない。また、顔料などの発達により、物体色においても彩度が14以上の色が存在する。そしてデジタルカラーの登場により、さらに高彩度の色が生み出され、今後も拡張していく余地を残しているといえる。

〔註6〕 マンセル表色系

マンセル表色系（マンセル・カラー・システム、マンセル色立体とも）とは、色を色相・明度・彩度の三属性を用いて体系的に分類、表記する方法である。この表色系を提唱したアルバート・H・マンセル（1858—1918）は、アメリカの画家で美術教師でもあった。それまで色の名前というのは曖昧で誤解を招きやすいことから、合理的に表現したいと考えたマンセルは、1898年に研究を開始し、1905年に著書『色彩の表記 (A Color Notation)』として発表した。

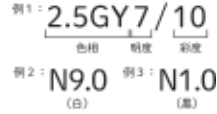
なお、マンセル色立体の座標軸は円筒状モデルと捉えてよいが、そこに分布する色の分布は歪な形となる。これは同じく

円筒状モデルで表記できるHSVが光源色を表現するのに対して、マンセル表色系が物体色を表現し、人間の知覚を重視した表色系だからである。

〔註7〕 マンセル値

マンセル値は以下のように表記される。

表1 マンセル値の表記方法



〔註8〕 色温度

照明用光源の色合いを示す尺度のひとつ。単位はケルビン。値が上昇するにつれて赤から黄、白、青の色味を帯びる。色温度の低い光源ほど暖かく、高くなるほど冷たい印象を与えるといわれる。

参考文献

三木学・文『素謡の会「うたいるあはせ」第1回「能楽に秘められた色の世界」』リーフレット、2018年
港千尋・三木学・編著『フランスの色景写真と色彩を巡る旅』青幻舎、2014年
アルバート・H・マンセル・著『色彩の表記』日高杏子訳、みすず書房、2009年

生成する音楽
—ポップ・ミュージックの哲学の覚え書き2—

Music, generating Memorandum for the Philosophy of
Pop Music Part 2

山本 和人

Kazuto YAMAMOTO

生成する音楽 —ポップ・ミュージックの哲学の覚え書き2—

Music, generating Memorandum for the Philosophy of Pop Music Part 2

山本 和人
Kazuto YAMAMOTO

教授（総合領域：哲学・宗教学）

This is a sequel to “A Memorandum for the Philosophy of Pop Music” (Journal of Seian University No. 8). *Reading O Chôro, Reminiscence dos Chorões Antigos* (by Alexandre Gonçalves Pinto, Rio de Janeiro, 1936) suggests the situation just before the birth of pop music and how it changed thereafter. Now, pop music has been transformed, or has degenerated, and a new paradigm for music is needed. Making reference to Christopher Small’s *Musicking: The Meaning of Performing and Listening* (Middletown, U.S., 1998), the essence of music does not take place in the tunes themselves, but in our experience of ‘musicking’, where music is newly generated each time a tune is played. On the other hand, the matrix from which all the music is generated is assumed.

『成安造形大学紀要』8号（2017年刊）に「ポップ・ミュージックの覚え書き」を執筆した。その冒頭にも書いたように、成安造形大学での講義「哲学B」に基づいたものである。同講義は隔年で開講されており、本年（2018年後期）にも開講された。この2年間で考えたことを書き留めておきたい。

因に、この哲学Bは毎時間テーマを掲げて講義している。本年度は次のようなものだった。

- §1. メディアとポップ・ミュージック
- §2. 音楽は誰のものか？
- §3. イメージとしてのジャズ
- §4. ボーカロイドのインパクト
- §5. クラシックってヘンじゃね？
- §6. 音楽の仕組
- §7. 時間と音楽
- §8. ポップ・ミュージック前夜
- §9. 音楽で食えるか
- §10. 音楽の始原
- §11. 音楽するということ、音楽のありか
- §12. ポップ・ミュージックの将来

テーマだけ見るとあまり哲学と関係ないように思われるかもしれないし、多分に学生受けを意識したタイトルもあるので、これだけではどういった内容か想像するのは無理だろう。毎時間「講義ノート」を成安情報サービスに掲載していて、それを紀要に転載することも考えないではなかったが、全部合わせると64,000字近くになるのであまり現実的ではない。この「覚え書き」も講義全般について書くつもりではなく、あくまでこの2年間、そして講義を終えて考えたことを綴るつもりである。

その前に前稿「ポップ・ミュージックの覚え書き」の基本的な論点を列挙しておきたい。幾らか考えの変わったところはあるが、基本的には本稿の前提条件となっている。

- (1) ポップ・ミュージックは録音メディアの登場と共に出現した。先行した西洋では20世紀初等に起源を求めることができるが、世界的には普及したメディアによって時間差がある。レコードやカセットやCDなど。
- (2) ポップ・ミュージックと共に成立した音楽産業（その筆頭はレコード会社である）は、商品としての音楽メディアの売り上げで利益を得ていたが、CDによるデジタル化の普及やネットの浸透によってそのようなビジネスモデルは破綻を来す。そこから音楽産業は、メディアという商品を売るのではなく、著作権に基づいたソフトウェアとしての音楽の使用権を売るという方向に転換する。
- (3) ポップ・ミュージック以前の、つまり19世紀以前の音楽の変遷を概観すると共に、音楽の起源を考える。それは言語の発生と繋がりががあると想像できるだろう。所謂「アート」と括られる諸分野の中でも、音楽は原初的であり素朴であるとも云えるのだ。そこからあらゆる時代・あらゆる地域に共通する音楽のマトリックス（母胎）のようなものを示唆したのだが、これは中途半端に終わっている。

以上の論点は基本的には現在でも変わっていないが、何冊かの本を読み、現実の音楽の状況が変わってくることで、新たなアイデアを得た。それを以下に書き留めていきたい。

A.G. ピント『ショーロはこうして誕生した——忘れられたリオのショローンたち』
(貝塚正美訳、彩流社、2015)

原著は1936年、ブラジルでの刊行。ショーロ *chôro* とはブラジルの弦楽インストゥルメンタル音楽であり、ショローン *chorão* とはショーロ演奏家を指す。大きく見れば、キューバのダンサ・アバネーラ（ハヴァネラ）やアルゼンチンのタンゴ、コロンビアから南米北部に分布するエストゥディアンティーナ等と共通する。これら中南米の

弦楽アンサンブルは、ギター（ブラジルでは7弦ギターになることが多い）やマンドリン（ブラジルではバンドリン）、ウクレレ様の小型弦楽器（ブラジルではカヴァキーニョ、他地域ではトレスやクアトロ、チャランゴも含みうる）等で演奏され、ヴァイオリンを含むこともあり、メロディ楽器として管楽器（フルートやクラリネット、アコーディオンやバンドネオンが加わることもある）がリードをとることもあったが、現在のショーロでは弦楽器だけで構成されることが主流である。これもまたエストウディアンティーナ等と共通するのだが、ブラジルでは伝統的にはアマチュアのミュージシャンによって演奏されてきた。ショーロの有名な作曲家ジャコー・ド・バンドリンは薬局や保険のセールスマンとして働いていたことで有名である。もちろんプロのミュージシャンもいたし、現在でも多数のプロのミュージシャンによって演奏されている。

ショーロの説明が長くなってしまった。上記の著作に戻ろう。この本はまったくアカデミックな研究書ではない。著者アレシャンドレ・ゴンサルヴェス・ピントは推定1870年生まれ、1940年に亡くなる。郵便配達夫を勤める傍ら、ショーロのギタリストだった。晩年の回想録として出版された書物はブラジルでも忘れ去られており、21世紀になって「発見」された。2015年にはブラジルでもピントの作品を復元したCDと共に復刻出版されている。その内容だが、現代のブラジル人でも読むのに苦労すると云われるほど、綴りや文法の間違いが多く、また当時でしか判らないような人名や地名も頻出する。基本的には身近なミュージシャンの思い出（大抵は非常に短い）が中心で、その間に少し長い自らの思い出や下手な詩が挟まる。シキーニャ・ゴンザーガやエルネスト・ナザレー、ピシンギーニャのような有名なミュージシャンも出てくるのだが、決して詳しく書かれることはなく、自分の友人のことが多く、しかもまったく楽器は下手糞だったなどという評がついている。

私はショーロが好きなのでこの本を読み始めたのだが、読み出してすぐ頭を抱えた。まったく読者を意識しない年寄りの繰り言にしか思えなかったからだ。だが、我慢して暫く読み進めると俄然面白くなってきた。これは19世紀末から20世紀初頭、帝政から共和制に移行するブラジルの混乱期、まだポップ・ミュージックの存在していない時代のミュージシャンの暮らしを活写する。ショーロがアマチュアの音楽だと云われてきたことは既に述べたが、何となく愛好家のサークルが趣味として演奏しているイメージを抱いていた。だが、ピントの暮らしぶりはそんな想像とは懸け離れていた。当時のリオ・デ・ジャネイロでは裕福な家が度々パーティを開いていたようだが、ピントたちはそういった催しになだれ込み、演奏も行うのだが、パーティで出される料理が主な目的なのである。食事がひどいと暴れることさえあった。その頃のミュージシャンは無頼の徒であったし、郵便配達も真面目に勤めていたとは思えない。

ミュージシャンがパーティや結婚式で演奏して糊口を凌ぐのは、前近代の文化では珍しいことではない。映画「プラス・オン・ファイア」（ラルフ・マレシャレック監督脚本、2002、邦題「炎のジブシープラス——地図にない村から」）でも見られるように、東欧のロマのバンドでは最近までそうだった（映画で世界的に有名になったバンドがファンファーレ・チオカ

リアである)し、同じような事情はアジアでもアフリカで見られる。だが、ポップ・ミュージックが生まれる以前の都市部でのミュージシャンの生態については、私は無知だったと云わざるをえない。おそらく欧米のミュージシャンについても同様の記録はあるだろうが、欧米は最も早くポップ・ミュージックが生まれた地域である。ブルースにしるアイリッシュ・トラッドにしる、その記録は圧倒的にポップ・ミュージック以降が多い。ピントの書は欧米よりポップ・ミュージックの成立が遅れたブラジルでこそ残せた記録と云えるのではないだろうか。

ピントの本を読んだ結果から、私はむしろポップ・ミュージック以降の状況が異様に思えてきた。確かにミュージシャンたちが無茶をやるのはそれ以降も続くのだが、音楽のあり方が決定的に違っている。ポップ・ミュージックが音楽をレコードという「商品」として扱ったことは既述したが、ここでは「プロ」のミュージシャンの存在が自明とされている。ポップス以前はそもそもプロとアマチュアの区別も存在しなかったのだ。少なくとも、民衆音楽の場では、そしてその伝統を引き継いでいる音楽は現在も存在するにしても。「音楽家」という職業が存在しなかった訳ではない。有名な西アフリカのグリオもそうだし、日本もそうだが、しばしば被差別民として社会の中に位置づけられている。同時に、娯楽が少ない中で音楽は、上手下手はあっても誰もが接しうるものだったのではないか。18世紀以前のヨーロッパの音楽家は作曲や演奏よりも、何より王侯貴族に楽器を教えることが重要だったというし、実際に楽器演奏が巧みだったと知られる国王は何人もいる。平安貴族にとっても楽器は嗜みの一つだった。現在の沖縄でも、都市部では違っているだろうが、子供の頃から自然に三線に触れる者も多いと聞く。

翻って、現代の社会はどうか。ポップ・ミュージックは流行によって世代間の音楽的嗜好を分断し、子供の頃から自然に覚えるということはありません、その代わりに機能しているのが音楽教室だ。音楽を演奏する側とリスナー（という言葉が象徴的だが）は分断されている。ミュージシャンを目指す者はいても、それは却って両者の間に壁があることを示すものだろう。リスナーは聴いているだけではない、例えばカラオケなどがあるのではないかという反論はできるし、ミュージシャンとリスナーの壁はそれほど強固ではなく、絶えず擾乱に晒されているというのも事実だろう。後に見るように、目下の状況では壁は決定的に揺らいできているように思われるけれど、前近代の社会とは違って、私達の社会ではミュージシャンは一般とは違う「専門家」なのだ。

先に云っておきたいが、私はポップス以前の状況を理想化したい訳ではない。ポップ・ミュージックが音楽を決定的に変え、今またそれが崩壊しようとしているのだとしても、それ以前の前近代的あり方に復帰するのが健全だとは思わない。私達はポップ・ミュージックと共に進化したテクノロジーを有しているのだから。ただ、ピントの本は、音楽の商業化の内実をより具体的に理解させてくれたことを指摘しておきたい。

前稿ではソフトウェアの著作物化から、逆に既存の著作物もソフトウェアのように「使用権」を販売すると捉えること、更に音楽を著作物と見做すことを随分指弾したように思う。最近はずっかり定着した「定額聴き放題」のサブスクリプション・サービスにも否定的だった。相変わらず私は本にしても音楽にしても「物」に拘っているし、サブスクリプション・サービスはいまだに利用していないが、見方は少し変わった。

こうしたことに敵意を抱いたのは、以前なら購入すれば個人の所有とされる創作物の所有権を、奪われるのではないかという感覚があったのだろう。私にはコレクターの傾向があり、本にせよ CD にせよ、手許に置かねば気が済まない質である。しかし、書籍に比べても流通の仕組が貧弱な音楽は、ネットでの流通は不可避であり、ダウンロード・サービスは使わざるをえない。最近サブスクリプション・サービスにもそんなに否定的ではなくなってきた。少なくとも、今までよりも公平に著作権料をミュージシャンに還元できるのなら。しかし、創作物をソフトウェアと同列視するのはやはり強い抵抗がある。ソフトを「著作物」と見做すことはやはりおかしいが、それでも「使用権」はまだ容認できる。ソフトは私達が何かをなすためのツールなのだから。(ゲーム・ソフトはまた少し違うだろうが)では、音楽もツールか？ 私達は何かをなすために音楽を使用したり、利用しているのだろうか。

ネットでは著作権委任団体、日本では特に JASRAC が非難されている。私は JASRAC の行為が正しいとは思わないが、著作権料徴収を目的とする団体だと考えるならば、ある程度理解できる部分もある。元来はマスメディアから徴収していた JASRAC は、近年ではカラオケや音楽を流す店舗、そして音楽教室にまで徴収しようとしていることは、ニュースなどでも報じられている。JASRAC は一応、明確な線引きをしていて、音楽が何らかの形で営業活動つまり利益を上げる経済活動に繋がっていれば徴収する方針のようだ。これを妥当と捉える向きもある。しかし、幾つか反論は可能だろう。

実は、著作権料徴収を目的とする管理団体である JASRAC とは違い、ミュージシャン自身、そしてレコード会社も必ずしも著作権を取り立てることを第一の課題としていない。もちろん、ネットなどへの違法アップロードは反対するが、それでも入手困難なアルバムの YouTube などへのアップロードは多く見逃されている。何より、まったく無料で音楽を聴くことができなければそれは多くの人に聴かれることはなく、有名になることも売れることもないのだ。だから、そんなに有名でないミュージシャンは自らの曲を YouTube や SoundCloud にアップロードしているし、その著作財産権をレコード会社が有していたとしても、ある程度は容認している。また、レコード業界が vevo のように YouTube の広告収入の一部を著作権料として受け取るような契約もしているし、JASRAC が音楽「使用」の無制限な徴収にまで進まないのはこの辺の事情があるのだろう。

それでも、現在はまだビジネスモデルが変動の真っ最中である。CD が売れず、一

部でレコードやカセットの人气が復活し、ダウンロード販売も減りつつある。サブスクリプション・サービスは台頭しつつあるが、まだその先は見えない。vevoは最終的に独自のサービスを目指していると云われているが、その概要はまだ現れていない。そして、最近では急速に小説やマンガまでがネット化され、その取り扱いが難しい。先行していた分だけ音楽の方がまだ安定的にも見えるだろうが、現在の状態でそのまま決着するとはとても思えないのである。

本稿は「ポップ・ミュージックの哲学」を標榜しているので、新しいビジネスモデルを提示したいとは思わない。むしろ、音楽著作権やネットでの流通を単に経済問題や権利問題と考えるのではなく、もう少し原則的な視点をもち込みたい。例えば、JASRACが目下音楽教室での曲の使用に対して著作権料を要求する係争が生じているが、音楽教室で教える曲が原曲と同じアレンジであることは滅多にないし、それで云うのならカラオケの曲も原曲のままではない。原曲のアレンジを変えたのなら「編曲権」の侵害と見做すことは可能だし、「同一性保持」を謳う著作人格権の侵害と考えることも可能である。事実、原曲を大幅に変えた演奏が著作権違反として権利者に訴えられた例はある。音楽は単なるテキストよりも複雑で、作詞作曲者に与えられる著作権以外にも「編曲権」「演奏家権」「原盤権」「出版権」などの多様な著作隣接権が付随するのだが、それらが厳密に運営されているとは云い難い。何より自作曲をミュージシャンはライブで異なったアレンジで演奏するのは普通だし、1曲の中でさえ同じメロディをどんどん崩し変奏させていくのが音楽、特にポップ・ミュージックの特質である。メロディだけを著作物とする異様さも前稿で指摘した。ジャンルによってはメロディなどオマケに過ぎない扱いを受ける。つまり、現在の著作権は音楽の実情に全く適合できていないのであり、そこをなあなあで済ませているのが現在の状況だ。

もちろん、単純に厳格な運用を求めているのではないことを理解してもらいたい。原曲を完全に變形することを禁じるなら個人が歌うことは不可能になるし、あいまいな変化を許容していくと営業活動に留まらない個人の鼻歌までもが著作権料の徴収対象になりかねない。また、音楽の著作権制度を直ちに廃止せよと主張しているのではない。危うくなっただけはいても、現状はどうか機能しているものを一挙に廃止することは、混乱しか生まない。ただ、著作権法も不断に改訂されているし、それに対し私達は声を上げることができる。その際、「音楽とは何か」を問うていくことは重要だろう。

また、本の話に戻る。

クリストファー・スモール『ミュージッキング——音楽は“行為”である』（野澤豊一／西島千尋訳、水声社、2011）

クリストファー・ネヴィル・チャールズ・スモールはニュージーランド生まれの音楽教育学者で、1927年に生まれ2011年に亡くなっている。原書（原題 *Musicking: The Meaning of Performing and Listening*）は1998年に刊行され、著者の最後の単著となっている。特徴的なのはそのタイトルだ。Musicking という言葉はスモールが初めて使った言葉ではないが、スモールによって一躍有名になった。これは「music」という言葉を名詞ではなく動詞と捉える主張である。これだけでは判りにくいだろう。私達は「音楽」という言葉を聞くと具体的な「作品＝名詞」を思い浮かべるだろう。しかし、スモールは「音楽する＝動詞」つまり演奏をし、それを聴くことこそが音楽の本体だと主張しているのだ。

実を云えば、スモールの本全体の論旨に私はあまり肯定的ではない。詳しくは触れないが、ざっと概観しておこう。彼は音大で学び、音楽教育を専門とする研究者の道を進んだが、自分でもピアノを弾くし、コンサートにもよく通ったようだ。だが、彼はクラシックのコンサートに堅苦しさを感じていた。『ミュージッキング』の主要部分は現代のコンサートを都市文化人類学的視点、あるいはエスノメソドロジー的方法論で記述することである。クラシックに関わる者でなければ判らない指摘も多数あり、これに関しては大いに参考になった。ただ、彼が理論的根拠としているのは主に文化人類学であり、グレゴリー・ベイトソンとクリフォード・ギアツに大きな影響を受けているように思われる。

先述したように、彼は音楽を作品や、まして物質化された楽譜や録音メディアとは思っていない。コンサートなら、それに関わるすべての人々の行動の総体を音楽と考えている。彼によれば、演奏者や聴衆だけでなく、コンサートを支える裏方たち、チケットをもぎる受付係も、コンサート後にホールを掃除する清掃夫もすべて「音楽している」ということになる。最終的には、音楽とは、関わったすべての人のコミュニケーションの総和であり、それらによって築かれる「儀礼」ということになっていく。

あまりにも文化人類学的な結論だし、クラシックのコンサートに偏り過ぎた見方ではないだろうか。録音技術の導入によってミュージシャンとリスナーは空間的に分断されただけでなく、時間的にも分断された。むしろ、共通の場が持てないことがポップ・ミュージックのミュージシャンとリスナーの分離をもたらしたと考えることができる。そうした中で、スマホとヘッドフォンで一人で音楽を楽しむ者を、「コミュニケーション」や「儀礼」で叙述することに意味はあるのだろうか。スモール自身はそれを肯定するだろう。だが、その解釈はクラシックのコンサートを至上のモデルとするミュージッキングの、希薄化され戯画化された残骸でしかない。

スモールの議論を批判してきたが、決して彼を貶めようとしているのではない。それどころか、音楽が「動詞」であることには、かなりショックを受けた。そうなのだ。音楽は「動態」でなければならない。それはスマホで音楽を聴いていても同じだ。私なら「音楽は経験だ」と主張する。スモールがこの語を避けたのは、「経験」が個人の内にとどまるもので、経験の共有は不可能と考えたからだろう。それは彼の「意

味」の解釈から理解できる。だが、私は「経験」の共有が不可能だとは思わない。これを説明すると本筋から逸れてしまうのでこれ以上は書かないが、私は自分以外の「他者」を理解することは困難とする観念論的・主客二元論的思考枠組は誤っていると考える。経験は共有される。

「音楽は音の連なりではない。その音によって喚起される経験だ」と考えてみよう。注意しておきたいが、これも「眼で見たものは感覚与件に過ぎず、その美しさを感じるのとは私達の精神である」というような観念論的・主客二元論の意味合いで述べているのではない。よりスモールが示唆した方向に近い。端的には「音楽で重要なのは音ではない、そこに居合わせた私達だ」と言い換えればいだろうか。もちろん、プロのミュージシャンは驚くほど音の細部にまで気づかっている、こういう言葉に気分を害する可能性もあるだろう。それでも、そのようなことを行うのは音に居合わせる人々の経験を最大限にまで高めたいからではないだろうか。それはライブの興奮を明らかにするし、たとえ一人でヘッドフォンで聴いているにしても、そこで生まれる経験こそが音楽なのだ。前稿でも指摘したが、音楽を聴く場では作詞作曲者より演奏する者の方が圧倒的に存在感を持つ。誰が創作したかより音を発生させることの方が重要なのである。

更にもう一歩進んでみよう。録音メディアに馴らされた私達は音楽の同一性を疑わない。アナログのレコードにしる、デジタル化された音源にしる、音を発生させるデータは同一なのだから。しかし、音楽の「本体」を音から経験に移すと話は変わってくる。同じ曲を繰り返し流しても気分は変わってくる。ミュージシャンが同じ曲を演奏しても、全く同じ曲にはならない。(録音メディアの登場以来、全く同じ演奏が出来ることが「巧い」の条件になるような傾向はあるが)ならば、音源がいかに同一であろうとも、音が発生する場で常に新しい音楽が「生成」されると考えるのはどうだろうか。あまりに原則主義的で常識外れに聞こえるかもしれない。だが、レコード登場以前から伝承されたトラディショナル・ソングというような民衆歌では、同じメロディに違った歌詞が載せられたり、そもそも別のタイトルを付けられたり、メロディも微妙に異なっていたりすることが珍しくない。録音技術どころか楽譜化されることもなく、単に耳で覚えた音楽が伝承される中で常に新しい曲が生まれてきたと考えることは、そんなに奇異だろうか？

先にも述べたが、私は現在の音楽の著作権をすぐにでも廃止すべきだとは思わない。しかし、音楽をこのように考えるならば、音楽の「著作権」とはかなり奇妙なものであるのは確かだろう。著作権の概念や規定も常に変化し、改訂され続けている。その際、以上のような観点を保持することは大きな意味をもつだろう。いや、音楽がその都度その都度「生成」されるのならば、著作権は完全に否定されるべきだと考える者も出てくるだろうし、他方この考え方では音楽は「物」ではなくなるかもしれないが偶発的な「出来事」となってしまう、音楽と云う文化の発展を妨げるのではないかと疑問をもつ人も出てくるだろう。

だからこそ、あらゆる音楽という「出来事」は共通の基盤、前稿で云うところの「マトリックス」を持っていると考えた方が良いのではないだろうか。実際、世界中のあらゆる音楽にはそれぞれの音階（スケール）があり、リズムがある。ハーモニーは厳密には西洋音楽に固有だが、異なるメロディの掛け合いは広く見られるし、ユニゾンも一種のハーモニーとして捉えることができる。その上で各文化に特有の音楽のルールがあり。ミュージシャンの個性があり、曲の「同一性」があり、更にその上に音楽という出来事が生成されるのだ。音楽のマトリックスと個々の演奏は、ソシユールのラングとパロールに類比できるかもしれない。もっとも、ソシユールは両者の関係を説明できず、ラングにばかり専心したが、音楽のマトリックスからの音楽の生成を説明するのはもっと可能なのではないか。ひとつには音楽の構成要素が言語に比べるとかなり少ないという理由もある。音楽が1回限りのものであること、とそれを支える関係性の存在は、上記の著作権の問題でもより有効な視界を与えないか。

なお、音楽と言語を類比したのは単なる思いつきではない。音楽の起源を想像すれば、それはやはり発声による歌になるだろう。つまり、言語の発生と音楽は関わりがある。もちろん、言語の発生を確実に証明することはできないし、音楽についてはなおのこと難しい。それは言語よりも重要と考える研究者が少ないからだが、音楽が言語に先んじて生まれると考える人々もいる。

スティーヴン・ミズン『歌うネアンデルタール——音楽と言語から見るヒトの進化』（熊谷淳子訳、早川書房、2006）

ジョーゼフ・ジョルダニア『人間はなぜ歌うのか？——人類の進化における「うた」の起源』（森田稔訳、アルク出版、2017）

これ以外にも日本人では岡ノ谷一夫の諸著作がある。

岡ノ谷一夫『「つながり」の進化生物学——はじまりは、歌だった』（朝日出版社、2013）

など。また、音楽家からの考察もある。

伊藤乾『なぜ猫は鏡を見ないか？——音楽と心の進化誌』（NHKブックス1201、NHK出版、2013）

浦久俊彦『138億年の音楽史』（講談社現代新書2381、講談社、2016）

ここまで来るとポップ・ミュージックの哲学とはかけ離れてしまうので個々には立ち入らないが、当然のことだが音楽や言語の始まりという議論にはどうしても科学的論証で迫っていけないところがあるので、どれも説得性には欠ける部分がある。だが、

ここでは音楽の普遍性を確認できれば良い。むしろ、言語やあらゆる芸術表現の中で唯一音楽が異文化間のコミュニケーションを成り立たせるものだろう。(もっとも、音楽より生理的欲求のアピールの方がより普遍的だろうが) 音楽は異文化間でも極めて容易に伝播する。これは録音メディアの役割が大きいし、ポップ・ミュージックが持ちえたポテンシャルと云ってもいいだろう。18世紀からドイツ語圏で始まった「クラシック」にヨーロッパの他の言語圏の作曲家が現れるようになるのは100年近くかかるのだから。

そして、ポップ・ミュージックは今、明らかに変容しようとしている。以上では主に著作権や音楽データの流通の問題に関して述べたが、それ以外にプロとアマチュアの垣根が低くなってきたことが挙げられるだろう。所謂小説やマンガの「バンド物」のストーリーは、大手レコード会社から発売される「メジャーデビュー」を目的とすることが多いが、現在はレコード会社からのリリースだけが自らの曲を発表する手段ではない。YouTube や SoundCloud などのネット上のサイトで発表すればよい。しかも、コンピュータで一人で作曲から演奏まで完成させることが可能になっている。ネット上では自国だけでなく他国の音楽を検索することも容易だ。日本の音楽業界は他国のリスナーを獲得することを長年の悲願としてきたが、おそらく現在は史上最も多く、他国で日本の音楽が聴かれている。

もっとも、この主張は、インターネット黎明期に囁かれたのと同じ理想主義がある。誰もが発表できる場があれば無数の作品が発表され、却って自分が聴きたい音楽が判らなくなる虞がある。そのためにネット上の各種音楽サービスには「リコメンド(お勧め)」を表示する機能があるが、聴取数の統計に従うのであれば少数への集中を招きやすいと考えられる。実際に聴かれるのは少数だけという、この事態はある程度は不可避だろう。誰もが新しい音楽を常に追い求めているのではないのだから。ただ、ポップ・ミュージックは、特にその初期に於いて「国民的歌手」を登場させた。これは、メディア産業は同じレコードをたくさん売れば売ほど、利益率が上がるという資本の論理に基づいていた部分も大きい。絶対に売れるという確実な方法がないからこそ、多くのミュージシャンをデビューさせて、99人を捨てて1人を売る、そういうことが行われてきた。現象的には似ているかもしれないが、現在の事態の方がまだマシだと云えるのではないか。

また歌う側・演奏する側ばかりの話になってしまっているが、聴く側の個人主義かも進行しているし、1970年代のウォークマンの発売から進行したヘッドフォンでのリスニングがどれほどの事態を生んだかは、振り返ると刮目してしまうものがある。その一方で、夏フェスやライブのような生演奏の欲求も高まりつつあると云われるが、ウォークマン以前の世代には否定的に見做された個人的リスニングが音楽に自由をもたらした要素も勘案されるべきだろう。

正直なところ、ポップ・ミュージックがどこに向かうかは「予言」できないし、で

きる訳もない。ポップ・ミュージックが崩壊して、前近代のプロもアマチュアもない世界に戻るとも思わない。幾らでも悲観的に考えることもできる。しかし、もっと自由に多様な音楽を「経験」できる可能性も確かに存在するのである。

[了]

映像作品「水流 IX」の制作報告

The Making of the Video “The Stream IX”

櫻井 宏哉

Hiroya SAKURAI

映像作品「水流 IX」の制作報告

The Making of the Video "The Stream IX"

櫻井 宏哉
Hiroya SAKURAI

教授（情報デザイン領域：映像）

In the man-made waterways of rice paddies, the water in nature must follow artificial rules. In that way, nature is made abstract, giving rise to a new form of beauty distinct from the natural state. The theme of this work is the liveliness of the water as it follows the man-made course.

This work is a ballet using the sound and the movement of the algae and water. With the waterway as the theater, I filmed the choreography of the algae that flows in the water.

In episode IX of The Stream, I focus on the bubbles of oxygen that are generated in the waterway. The bubbles of oxygen are generated by algae, phytoplankton and plants through photosynthesis. Photosynthesis is the process by which plants use sunlight, water and carbon dioxide to create their food, grow and release oxygen. Algae must grow under normal conditions in order to photosynthesize. The stream produced by drawing water up through a pump prevents aggravation of the quality of the underground water and keeps both the quality of the water and the water temperature uniform. Flowing water is a necessary element for the growth of algae in a waterway. The stream supports the growth of algae and generates oxygen.

1. 「水流 IX」について

水田という人工の中で水という自然が人工の規則に従う。そこでは自然が抽象化され、自然のままとは異なる美しさが現れる。この作品は、水の躍動を伝える藻の動きと音響によるバレエである。水路を劇場として、水流により振り付けられた藻の動きを撮影している。テーマは水田という人工に沿う水の躍動感である。

今回「The Stream」シリーズの9作品目では、私は水路内に発生する酸素の気泡に注目した。酸素の水泡は藻類、植物プランクトン、植物類によって生み出される。水泡発生の原因は光合成である。光合成とは植物が日光と水と二酸化炭素を使い、自らの食物をつくり、成長し、酸素を放出するプロセスである。藻が光合成するためには、藻が正常に育つ必要がある。地下からポンプの汲み上げによって生み出される水流は、水質の悪化を防ぎ、水質と水温を均一に保つ。水が流れることは藻が水路内で生育するのに必要な要素である。水流は藻の生育を支え、酸素を生み出している。[図1]



図1 「水流 IX」素材：映像 再生時間：5分31秒 制作年：2018年
所蔵：櫻井宏哉蔵（撮影：櫻井 宏哉）

2. 撮影

2.1 撮影場所と期間

宇治市巨椋池（おぐらいけ）干拓田の灌漑用水路を撮影している。撮影にあたり水路を管理している巨椋池土地改良区に届出を行った。期間は5月2日から9月15日。今回は撮影場所は昨年までの5箇所から、2箇所に絞り込んだ。いずれも地下水を水源とする用水路である。地下水は河川の水と比較して透明度が高い。この作品では奥行きを伴う構図によりテーマ表現を行っており、透明度の高さは重要である。[図2] [図3]



図2 撮影場所：宇治市巨椋池干拓田（撮影：櫻井 宏哉）



図3 撮影場所：宇治市巨椋池干拓田と撮影機材（撮影：櫻井 宏哉）

2.2 撮影機材

ビデオカメラ：GoPro HERO4 Black/CHDX-401-JP 1台

録画データ：Quicktime 3840×2160pix 29.97p、Sony FDR-AX100 1台

録画データ：MPEG4 3840×2160pix 29.97p

接写レンズ：INON 水中ワイドクローズアップレンズ UCL-G165 SD 1台

スライダー：リーバック LIBEC ALLEX ALX S8 1台

マイク：水中マイク（ハイドロフォン）Aquarian Audio Products 社 H2a-XLR
Hydrophone 1台
IC レコーダー：ZOOM H4n リニア PCM レコーダー 1台

スライダーは写真のような水路を跨ぎ、固定できるように2本の横木に取り付けた。横木には4つのアジャスターを取り付け、水平を保つための調整を可能にしている。またスライダーの方向は下向きに設置した。これは水中にカメラを配置するため、通常とは逆にカメラを取り付けるためである。[図4] [図5] [図6]



図4 組み立て前の撮影機材
(撮影：櫻井 宏哉)



図5 移動撮影機材のスライダーと操作する作者
(撮影：櫻井 宏哉)



図6 移動撮影装置はスライダーと木材の支持体、水平に設営するためのアジャスターと水準器で構成 (撮影：櫻井 宏哉)

2.3 撮影手法

以下の撮影と録音手法でテーマを表現した。

2.3.1 4K 撮影の導入

水路の壁面に密生する酸素の泡の存在感を伝えるため 4K 撮影を活用した。従来の HD 撮影素材のサイズは横1920×縦1080pix。4K 撮影素材のサイズは3840×2160pix のサイズ。4K で撮影した大きなサイズの素材をそれより小さい HD サイズの編集プロジェクトに読み込み編集する。したがって HD サイズの画面には大きなサイズの

素材は全体が表示されず部分だけ表示される。写真表現でトリミングという用語に相当することが可能となる。具体的には全面積の1/4が表示される。編集時にその1/4のサイズを用いることもあれば、縮小し全体を表示することも出来る。またその縮小の過程をズームアウト的に表現したり、パンやティルトといった移動表現が出来る。

泡は6月の上旬に藻が繁茂し、覆い尽くされる前の時期に撮影。繁茂前の藻やその他植物から発生する酸素の泡が、水路の壁面に密生する。泡の床や壁面を引きのカットで密生の様子を撮影し、かつ接写で泡を大きく写す。様々な画面サイズで撮影する理由は編集の際、トリミングのサイズの選択肢を増やすためである。

2.3.2 スライダーを用いた移動撮影

藻のモニュメントの量感や配置を三次元的に演出するためスライダーを用いた移動撮影を行なった。スライダーとは、カメラを載せた台がレールを移動する機材。6月下旬に撮影。水路壁面に密生する藻だが、そこから剥離して水路内を流れるものもある。それらの一部は水路内に植生する植物の幹などに被さる。複数の藻が被さっていくと柱のような円柱形の造形物になる。カメラを造形物の正面、側面などに沿って移動させ撮影する。これによって柱を取り囲む空間を移動する視点で柱そのものと量感や配置位置が3次的に示すことができる。カメラは水路の幅中央、高さも水深のほぼ中央に配置され、水流の進行方向にレンズを向けて撮影されており、移動撮影のためスライダーを使用した。スライダーとは、カメラを載せた台がレールを移動するという装置である。

この方法に加え今回新たに行なった方法としてカメラの位置を水面に接する位置から水路の底面に近い位置まで、複数のカメラポジションで撮影したことが挙げられる。スライダーの雲台にカメラにアングルを可変できる雲台をさらに取り付けた。カメラは20cmほどの一脚の先に取り付けられているが、この一脚の角度を変化させ、水面から川底まで移動させ、任意の位置で固定させた。同様に水流と垂直方向にレンズを向け、水路の壁面上の藻を移動撮影した。[図7] [図8] [図9] [図10] [図11] [図12] [図13] [図14]



図7 スライダーの雲台に取り付けた一脚のハイポジションの固定位置 (撮影：櫻井 宏哉)



図8 スライダーの雲台に取り付けた一脚のローポジションの固定位置 (撮影：櫻井 宏哉)



図9 スライダーの雲台に取り付けた一脚の俯瞰撮影の固定位置（撮影：櫻井 宏哉）



図10 スライダーの雲台に取り付けた一脚の側面撮影の固定位置（撮影：櫻井 宏哉）

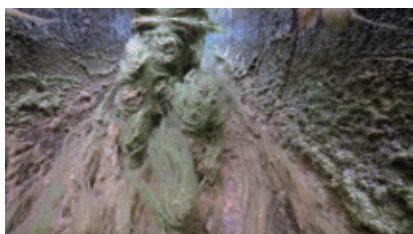


図11 スライダーの雲台に取り付けた一脚のハイポジションの固定位置からの映像（撮影：櫻井 宏哉）

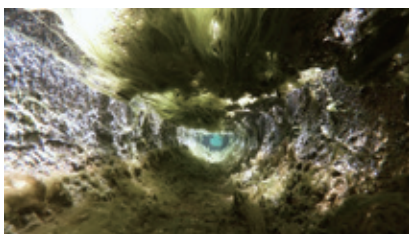


図12 スライダーの雲台に取り付けた一脚のローポジションの固定位置からの映像（撮影：櫻井 宏哉）



図13 スライダーの雲台に取り付けた一脚の俯瞰撮影の固定位置からの映像（撮影：櫻井 宏哉）



図14 スライダーの雲台に取り付けた一脚の側面撮影の固定位置からの映像（撮影：櫻井 宏哉）

2.3.3 Log 撮影

Log 撮影とは白飛び、黒つぶれのない幅広いダイナミックレンジを可能にする撮影時の記録方法である。GoPro HERO4 Black には Log 撮影記録を可能にするカラー設定「フラット」を選択して撮影した。

2.3.4 録音

3つの方法で録音を行なった。

1つ目は Aquarian Audio Products 社の水中マイク（ハイドロフォン）H2a-XLR Hydrophone を使用。映像との同時録音は行っていない。水田と水路をつなぐ水口のパイプ内にマイクを入れることに生じる音を収録した。貝殻を耳にあてると聞こえてくるような、持続音である。これはパイプの外の音響が、パイプの共鳴しやすい周波数が強調されて特定の高さの音が持続するように聞こえる。

2つ目はガラス製のコップや瓶を撮影現場に配置した。これにより複数の水田の環境音による共鳴音を採取した。この収録された音を編集時にオーディオエフェクトのイコライザー通しさらに限定された周波数、音質に加工した。音質は出来るだけ人の声に近づけ、音楽的な印象を強調した。

3つ目は外部マイクを接続せず、録音機 ZOOM H4n の内臓マイクで水田の周辺の蛙の鳴き声や風の音を収録した。[図15] [図16]



図15 水中用マイク、IC レコーダー、瓶
(撮影：櫻井 宏哉)



図16 水田の水口から集音する水中用マイク
(撮影：櫻井 宏哉)

3. 編集

編集アプリケーションは Adobe Premiere CC を使用。

3.1 4K 撮影素材とトリミング

「4K 撮影の導入」で述べたように、。4K 撮影素材を HD サイズの編集プロジェクトに読み込み編集し、泡の接写をさらに拡大し、泡1つ1つの質感、量感を描写した。

[図17] [図18]



図17 4K撮影素材によるトリミングの例 1/オリジナルの全画面（撮影：櫻井 宏哉）

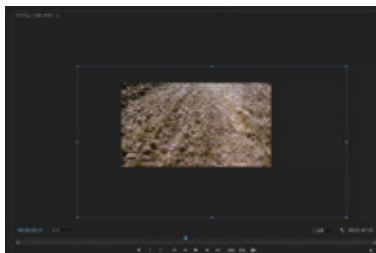


図18 4K撮影素材によるトリミングの例 2/オリジナルからの拡大部分画面（撮影：櫻井 宏哉）

3.2 Log撮影素材とカラーグレーディング

以下、項目を活用した。[図19]

3.2.1 ホワイトバランスの設定

水流シリーズでは、色彩の調整は毎回、Premiereで色相の調整フィルターで行なってきた。主にホワイトバランスの補正や輝度、コントラストの微調整であった。今回本格的にLog撮影を行なった理由は、GoPro HERO4のホワイトバランスは手動で色温度を設定できないため、時々大きくホワイトバランスが合わない時があった。したがって編集時にホワイトバランスを調整を可能にする機能が必要だったことが挙げられる。GoPro HERO4のホワイトバランスの設定を「Native」に設定。Nativeオプションでは、撮影後の編集段階でよりホワイトバランス調整が可能になる。

3.2.2 色彩の選択

その他、藻のもともとの固有色として黄色が強く、作品の全体のトーンを緑にした場合、色合わせが困難だった。カラーグレーディングによって黄色を抑えられることもある。

3.2.3 白飛びの防止と中間明度・色相の豊かな描写

撮影の多くは6月と7月の晴天で行なっている。藻が白い場合、白飛びを抑えられる。また従来おおよっぱなグラデーションでしか描写できなかった中間明度の諧調と色相の豊かな描写ができる。



図19 Premiere Pro CCによるカラーグレーディング作業（撮影：櫻井 宏哉）

3.3 音響の演出

今回も同時録音の音響を Adobe Premiere CC のイコライザーで周波数の強調、省略を行った。

3.4 シークエンスの構成

5分31秒のうちタイトルやエンドクレジットを除く作品の再生時間は4分49秒である。この全体を3つのシークエンス（章）で構成する。

以下はその詳細である。時間表記について秒以下の単位フレームは四捨五入で秒換算した。

全編 5分31秒

タイトル : 11秒

第1章 安定・増殖 : 1分57秒 [図20]

1) 1節 夜の水路 : 32秒 [図21]

2) 2節 日光と酸素の水泡と増殖する藻 : 1分25秒

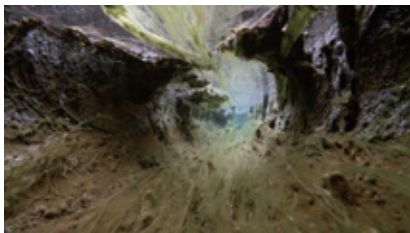


図20 シークエンスの構成 安定・増殖：夜の水路（撮影：櫻井 宏哉）



図21 シークエンスの構成 安定・増殖：日光と酸素の水泡と増殖する藻（撮影：櫻井 宏哉）

第2章 変容・移動

- 1) 1節 藻のモニュメント
- 2) 2節 モニュメントの移動

: 1分20秒

: 20秒 [図22]

: 1分 [図23]



図22 シークエンスの構成 変容・移動：藻のモニュメント（撮影：櫻井 宏哉）



図23 シークエンスの構成 変容・移動：モニュメントの移動（撮影：櫻井 宏哉）

第3章 安定・浄化

- 1) 1節 気泡の宇宙
- 2) 2節 成長する藻

: 1分32秒

: 37秒 [図24]

: 55秒 [図25]

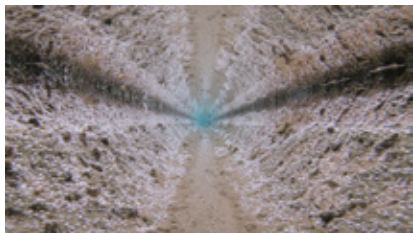


図24 シークエンスの構成 安定・浄化：気泡の宇宙（撮影：櫻井 宏哉）



図25 シークエンスの構成 安定・浄化：成長する藻（撮影：櫻井 宏哉）

エンドクレジット

: 31秒

第8回『ぴかっ to アート展』 展示計画を実施して
— 障害者作品展の諸課題 —

Installation Design Work for “The 8th Pikatto Art Exhibition”:
Issues to Discuss Surrounding the Exhibitions for Disabled Artists

島先 京一

Kyoichi SHIMASAKI

第8回『ぴかつ to アート展』展示計画を実施して

—障害者作品展の諸課題—

Installation Design Work for “The 8th Pikatto Art Exhibition”: Issues to Discuss Surrounding the Exhibitions for Disabled Artists

島先 京一

Kyoichi SHIMASAKI

准教授（共通教育センター：障害学・芸術学）

I had the good luck to take charge of the installation design work for an exhibition for disabled artists, titled “The 8th Pikatto Art Exhibition”, held at an event space in a shopping mall called Aeon Mall Kusatsu. In this challenging installation design work, I found several issues that needed to be discussed both from the point of social welfare activity for disabled people and from the point of the possibilities of a new form of art exhibition. In some ways, these two different points of view seem to show certain conflicts during installation, but I think that by resolving these conflicts we can come to face a new phase in the relationship between art and society.

はじめに

2018年11月30日から12月9日まで、第8回「ぴかつ to アート展」が、イオンモール草津店（滋賀県草津市新浜町300）2階イオンホールを会場に開催された。報告者は、昨年に引き続き、展示計画立案ならびに実施管理者として、本展覧会に協力する機会を得た。本論文では、展示計画と実施の概要ならびにいくつかの作品の展示経過について報告し、障害者を出品者とする芸術作品展の今後の可能性と課題についていくつかの提案を試みる。

「ぴかつ to アート展」についてその詳細は、前回の私たちの報告に委ねるが^(註1)、重要な点について確認しておきたい。

第一に確認しておきたいのは、この展覧会が公募展であるということである。作品を公募する展覧会であることの重要性は、展覧会の開催主体が作品の作者ではないということ、したがって展示される作品の選抜は、作者ではない人びとによって行われるという点に求められる。「ぴかつ to アート展」の開催主体は、滋賀県ならびに「ぴかつ to アート展」実行委員会である。実行委員会は、展覧会事務局を務めた公益社団法人滋賀県手をつなぐ育成会ならびに、関係する社会福祉法人、そして県の健康福祉部をはじめとするいくつかの部署からの出向委員によって構成されている。また協力団体として県教育委員会や県身体障害者福祉協会をはじめとする社会福祉関連のいくつかの公的な組織が名を連ね、また後援団体として新聞各社、放送各社ならびに財

団法人糸賀一雄記念財団の名が挙がっている。以上、開催に関係する組織の名称から「ぴかつ to アート展」は、特定の個人や集団による恣意的な運営は行われにくい、公的な性格の強い展覧会であるということが出来る。いい換えるならば、特定の芸術的な主義主張に基づく作品の展示を目的とした展覧会ではないということでもある。

ただしここで、障害者による作品展について考察する時に、作者という概念について通常の芸術論とは異なる視座が必要になる可能性について指摘しておきたい。というのも、出展者の中に少なからぬ知的障害者が含まれており、彼女／彼らの中には、独力で作者としての意志決定を行うことが困難であり、何らかの形で支援者（以下、サポーターと記す）や意志決定代行者（以下、アドヴォケイトと記す）の協力を必要とする人たちがいるからである。特に重度の知的障害者の場合、当事者の意志を聞き取り、判断することに相当の困難が伴うこともあり得る。障害者の芸術作品展における作者の問題については、のちに考察する機会をもつことにしたい。

「ぴかつ to アート展」は公募展であるが、その開催主体となる組織には特定の社会的役割が窺える。すなわち、主催組織ならびに協力組織の大半が、障害者福祉を中心的な目的とした社会福祉団体である。この点は、通常の美術展とは異なる、「ぴかつ to アート展」の特色である。したがって展覧会運営にかかわる重要事項の決定や様ざまな実務の大半は、日常的に障害者福祉にかかわっている社会福祉の専門家が行うのであるが、当然のことであるが彼女／彼らの大半が美術や美術展開催の専門家ではない。入選作品ならびに入賞作品の選抜には、前回の報告でもふれたようにアーティストをはじめとする美術関係者の協力を要請するが、それ以外の様ざまな業務は、美術関係者ではない、いわば、非専門家が遂行するのである。主催者の多くが美術関係者ではないという点も、「ぴかつ to アート展」の大きな特色であり、また本報告で考察する障害者による作品展の将来的な可能性や意義に関する重要なポイントとなるのである。

以下、第8回の「ぴかつ to アート展」の展示計画の立案と実施から見えてきたいくつかの課題について、第7回および、それ以前の「ぴかつ to アート展」の経過や成果と比較しながら、考察していきたい。

1. 第8回展覧展示計画概要

前回の報告でもふれたように、報告者は第7回の「ぴかつ to アート展」から展示計画およびその実施に関わってきた。「ぴかつ to アート展」に報告者が関わるようになった直接の契機には、第1回から作品選考に関わってきた、現代美術作家、今井祝雄氏の仲介があった。成安造形大学名誉教授でもある氏の業績や名声については、あえて本報告で触れる必要もないと思われるが、氏が障害者の芸術活動に対して長年にわたって積極的な支援を行ってきたことは強調しておきたい。第7回「ぴかつ to アート展」事務局から今井氏への依頼は、展覧会監視要員として成安造形大学の学生の派

遣が期待できないかということについてであり、氏から報告者への連絡もそのことの可否を問うものであった。

「ぴかつ to アート展」に対して、一研究者ならびに一愛好家として関心を払ってきた報告者は、過去のこのユニークな展覧会の展示の実際については、不満を感じていた。例えば例年多く出品される、陶芸やその原型としての粘土造形をはじめとした立体造形作品であるが、多くの場合、一作品ごとの展示台上の展示面積が等分に配当され、その配当区画の中心に作品が置かれるという展示方法が採用されていた。おそらくは作品ごとの専有面積に不公平が生じないようにという配慮に基づいた方法であったと推察されるが、しかしこの方法では、作品ごとの視覚的訴求性については、明らかに不平等と思われるアンバランスが生じていた。占有面積の大きな作品の周囲には空間的な余裕が少ないゆえに作品の観照に制限が加わるが、比較的小さな作品の周囲には視覚的な遮蔽物が少なく、余裕のある観照空間が形成されていたのである。絵画を中心とした壁面の展示計画には、そのような明確な不具合は認められなかったが、しかしこちらにも何か工夫のしようがあるのではないかと感じていた。

成安造形大学で障害者福祉と芸術活動の架橋を探る研究や学生指導に従事していた報告者は、「ぴかつ to アート展」の監視員業務を学生に依頼したいという展覧会事務局の依頼への協力を快諾し、さらに展示計画そのものにも協力したい旨を伝えた。もちろんこの協力の申し出の動機を中心は、報告者の研究上の関心にあったが、学生たちに作品展示の現場を体験させ、展覧会という社会的活動の意義について考えももらいたいという教育的な配慮もあった。報告者の申し出は、展覧会事務局から好感をもって受理されたものと理解している。

まず、第8回の「ぴかつ to アート展」の展示計画について述べる前に、前回、第7回の「ぴかつ to アート展」において報告者が行った展示計画ならびに実施の業務について、報告者なりの改善点を中心に報告する。主に報告者が担当したのは、入賞作品以外の配置計画である。大賞をはじめ、毎年、8点から9点が選ばれる入賞作品については、展覧会の最終日に行われる表彰式のこともあり、展覧会場内の専用の区画が最初から設定されていたため、大まかな展示計画についてはほぼ確定的な案があり、展示の現場では細部の調整を行うのみであった。

第6回以前の「ぴかつ to アート展」においては、入賞作品は作品応募の受付順に従って、ほぼ機械的に配置が決定されていた。この方法はおそらくは、入賞作品以外の展示に展示実務者の作為的な意図が入りこむことを排除するために採用されたものと思われる。この方法は、壁面だけではなく、立体作品の展示に際しても採用されていたようで、先に指摘した立体作品の視覚訴求性における不平等の原因も、ここにあったと思われる。

一見するとこの展示配列の機械的な決定は公平性を確保しているかのように思えるが、実際の作品の展示にあっては、ある種の偏りを招来していた。というのも、知的障害者が作者である作品の多くは、作者が所属している福祉施設ごとに出品されてお

り、その結果、同一の施設で制作活動を行っている複数の作者の作品が連続して展示されることが多かったからである。特に壁に展示されることの多い平面作品の場合、額装をはじめとする作品の最終的な展示形式は、一般の観照者の印象に大きな影響を及ぼす。そして「びかつ to アート展」の出品作品の最終的な展示形式は、作者よりも、施設に所属する作者のサポーターやアドヴォケイトによって決定される事例が大半を占めていたのである。その結果、非常に洗練された展示形式が採用された作品が連続的に展示された後に、素朴で簡潔な形式で整えられた作品が続いて展示されるということが少なくなかった。もちろん、このような事態について、早急に適切である、あるいは不適切であるといった価値判断を下すことはできない。しかし、公平な展示を志向した結果、少なくとも展示形式の仕上げについては偏りのある展示空間が出現したきらいがあった。

報告者はこの偏りを解消するために、以下のような展示配置決定を行った。まず最終的な目標を、対比の効果を活用することにより、展示作品同士が互いに存在感と魅力を高めあうような展示計画の実現に置いた。報告者は事前の準備として、入賞作品の下見ならびに出品者から提供された画像データの確認を行った。そして作品の大きさ、色合い、写実性の程度の違い、額装の性質等から、大まかに入賞作品の分類を行った。そして、展示可能な壁面の総延長や各壁面の会場内での配置等を加味し、まずは大きさや額装等から他の作品よりも目立ついくつかの作品の配置を決定した。

大きな作品の配置を決定したのちに、他の作品の配置を検討したが、しかし最終的な判断は、搬入および展示作業当日まで持ち越す必要があった。というのも、出品者から提出されていた画像データは、スマートフォンを含む一般的なデジタル・カメラによって作成されたものであり、作品個々の存在感や質感の判断のための情報は不十分であった。そして展示前の上見の作品の下見も、諸般の事情から時間をかけることはできなかったからである。作品の搬入ならびに展示のために報告者に与えられた時間は、ほぼ、半日、そして報告者が協力を期待できる人員にも限りがあった。

報告者が搬入ならびに展示作業の際に最も重視したのは、特定の作品だけが際立ってしまうことを避け、色合いの地味な作品や小品もその魅力が十分に発揮されるような作品配置の方法であった。そしてその際に、目につきやすい作品同士をあえて隣接させることで他を圧倒するような存在感の相殺を試みたり、全く性格の異なる作品同士を隣接させることでそれぞれを引き立て合わせるというような、全く逆の方向の方法を組み合わせた。

第7回の「びかつ to アート展」の搬入展示作業は、非常にあわただしい時間配分の中で、手探りの中で進められたが、報告者の目論見が成功した部分と、予想すらできなかった不本意な成果が招来された部分があった。

出品作品の中に3点、明らかに存在感の傑出した作品があったが、それらについては、それぞれの魅力を減ずることなく、他の作品との対比の効果の中で印象の平準化を図ることができた。1点はある種の組作品なのであるが、複数の想像上の不思議な

生き物を描いた小さな画面が非常に存在感のある額装の中に収められたものであった。この作品については、あえて幅の短い壁面に、別の巨大な魚をユーモラスに描いた作品と対称的に展示することによって、その傑出した存在感を減ずることに成功した。また別の2点はそれぞれ自立できる大きな立体作品なのであるが、それぞれを会場入り口近くの床面に、仏教寺院の山門の仁王像のように配置し設置することで、入場者を迎え入れるような象徴性をもたせた。

展示作業の中でも、壁面の展示は物理的に労力と時間が必要である。当日展示作業に当たったのは、報告者と成安造形大学有志学生2名、展覧会事務局から3名、ならびに県や協力福祉施設からの派遣要員が数名であった。各施設からの派遣要員には作業可能な時間について制約があったため、報告者は作品の配置と作品間の間隔を決定し、壁面の前の床に作品を置いて、実際の壁面への飾りつけは要員の皆さんに任せることにした。報告者は厳密に作品間の寸法を測り作品を配置していったのであるが、その寸法が厳密に計測されたものであり、展示上の大きな意味があることを十分に要員の皆さんに伝えることができなかったため、作品相互の間隔は等距離性が保たれることなく、展示作業が進められてしまった。結果として壁面上の平面作品の配置は、その左右の間隔の調整の面からは、通常の作品展では許されないであろうようなばらつきが生じてしまった。第7回展の来場者アンケートの中にも、この展示の不備に関する鋭い指摘があり、報告者にとってもっとも大きな反省点となった。

第8回の「ぴかつ to アート展」の展示作業に当たっては、第7回の方法を継承しつつ、展示スケジュールを中心に若干の変更を加えた。具体的には展示作業の日程を二日間確保し、一日目を壁面上の作品配置計画の策定に充て、二日目に実際の作品の展示作業を行うこととした。

一日目の展示計画決定の作業に当たったのは、事務局から3名、報告者の呼びかけに応じてくれた成安造形大学有志の学生3名と報告者であった。私たちは昨年の方法とほぼ同じ方法論に従って、壁面の作品配置を検討したが、今回の入選作品には極端に存在感の際立った作品はなく、作品の大きさや色調、そして額装の在り方について分類していった結果、ほとんど偏りのない、均等な展示空間を実現できる見通しが立った。私たちは、壁面ごとの作品の間隔を算出し、作品の展示位置を指示する垂直線を壁面に鉛筆で書き込み、初日の作業を終えた。

二日目の作業に当たったのは、報告者と事務局から4名、成安造形大学の学生、1名、そして関係する社会福祉施設から派遣された協力要員数名であった。今回は昨年の反省を踏まえて、協力要員の皆さんには、前日に展示壁面上に記した展示用の補助線に寸分違わず作品を展示するように、少しばかり厳しめに要請した。各作品の展示位置は、ミリ単位まで計算したうえで指示がなされていたため、作品相互の水平間隔に関して今回は、ほぼ問題なく実行できたと思われる。しかし明らかに作品間の間隔に狂いが生じていた箇所が、何か所かあった。

展示作業を二日間に分けたのは、単に十分な検討時間と作業時間を確保するためだ

けではなかった。「ぴかつ to アート展」の準備に当たる人びとの間に、展覧会という社会的な営為に対する無視することのできない認識の違いがあった。そして、そのような認識の異なる人びとに同一の作業を依頼することに、少なからぬ困難が生じると予想されたからである。展覧会の目的を、展示作品のもっている美的な価値の社会的共有に置くのであれば、作品一つ一つの良さを最大限に引き出す検討と作業に、最も多くの労力と時間が充てられるべきである。しかし「ぴかつ to アート展」の関係者全員にこのような意識が十分に共有されていたわけではなかった。

第7回の「ぴかつ to アート展」の展示作業において生じた、壁面展示作品の間隔の不均衡という不備は、もちろん第一義には報告者の認識不足に基づく、不十分な指示が原因であった。しかし言い訳にしかならないのであるが、多くの展示協力要員の皆さんが、作品の展示効果よりも時間内の作業の完了に関心を払っていたことは、報告者の予想を裏切る事態であった。後にさらに考察を深めていきたいが、このことには、「ぴかつ to アート展」を福祉の観点から考えるか、それともあくまで芸術的な営為として捉えるのかという、根本的な意識の違いがあるように思われる。そしてこの点は、障害者の表現活動の発表にとって、重大な問題提起を孕んでいた。

立体作品の展示については、第7回も第8回も、報告者個人の判断で遂行した。過去、何回かの「ぴかつ to アート展」において立体作品は、作品ごとに独立した展示台が与えられていたが、報告者は展示台を複数接合させることで大きめの単独の展示スペースを形成し、そこに入選作品を集散的に並べる方法を採用した。これは、性格の異なる作品を隣接させることによって、賑やかな楽しさを演出するとともに、様々なタイプの障害者の作品を集散的に展示することによって、障害者が潜在的にもっている社会的な力のようなものを象徴的に表現したいという思惑があった。立体作品の展示は、作品そのものや作品を見る際の方向性も含めて、多様な問題を投げかけてくる。報告者は展覧会企画や作品展示を専門としてはいないのであるが、障害者による立体作品の展示は、作者とサポーターやアドヴォケイトの思いがさまざまであるだけに、一層、芸術的な挑戦心を掻き立てる仕事である。

第8回の「ぴかつ to アート展」の展示作業は、いくつかの課題を残しながらも、第7回の反省点を踏まえて終えることができた。第7回展の来場者アンケートに見られた展示の不備に対する指摘は、第8回展のアンケートの回答の中には見受けられなかった。

2. 額装、インスタレーション、そして作者の問題

第8回の「ぴかつ to アート展」の展示計画は、その存在感が他の作品を圧倒するような出品作がほとんどなかったため、第7回の展示よりも順調に進めることができた。しかし中には、展示方法について工夫や検討を必要とした作品もあり、それらの工夫や検討の中には障害者の芸術作品の発表をめぐる重要な課題を孕んだものもあった。



図1 オリジナルの世界

第8回の出品作から2点を取り上げ、さらに第7回の出品作1点についても合わせて考察し、障害者の作品展をめぐるいくつかの論点の提示を試みたい。

第8回展から取り上げる1点目は、藤田翔平作、「オリジナルの世界」(図1)である。作者の藤田翔平氏は、20代前半の軽度の精神障害者であり、報告者が面会した限りの判断ではあるが、日常的な社会生活やコミュニケーションには、殆ど困難を抱えていないように見受けられた。

作品は、作者の想像上の地図であり、A4大の画用紙にボールペン、水彩マーカー、そして色鉛筆を用いて、島の輪郭図や道路、そして島内の土地の利用状況が描き分けられ、地形の外部に縮尺目盛りと、そして作者自身の手彫りによる印章が押されている。ボールペンによる線描、そして色鉛筆とマーカーによる色彩表現、両者とも非常に丁寧になされており、作者の慎重な性格と、作品制作にかける意志が感じられる。特に手彫りの印章により作者名が朱で捺印されている点からは、作者の藤田氏にとって作品を制作することが、彼の生活の中で重要な意味をもっていることを窺わせる。今回彼は、3点の地図を1作の組作品として応募してきた。

ここでびかつ to アート展の入賞作品選抜のプロセスについて、紹介しておく。作品審査は、二段階に分けて行われるが、第一次審査は出品者から提出された写真資料と申込書を中心に、主には出品の可否が審査される。例年この段階で、作品は三分の一に絞られる。そして第一次審査を通過した出品者に対して、実際の作品の第二次審査会場への搬入が通知されるのであるが、その際に平面作品の出品者に対しては、作品を展示可能な状態にして搬入することが要請される。すなわち、壁面に展示できる状態としての、いわゆる額装がなされた状態での搬入が求められる。第二次審査では、主には実際の作品を確認したうえでの出品の可否ならびに、入賞作品の選定が行われる。そして報告者もこの段階で初めて、実物としての入賞作品や入選作品との対面を

果たすことになる。

藤田氏は第二次審査のために不思議な魅力にあふれた3枚の手書きの地図を、市販のコルクボード製のフォトフレームに、同梱されていたと思われる木製のヘッドの押しピンで固定した形で搬入した。氏の作品は残念ながら入賞は逃したが、入選作品の一つとして展示されることになった。報告者が藤田氏の作品の展示形式に対して疑問を感じたのは、平面作品全体の展示計画を検討する段階においてのことである。正直に告白すれば、氏が採用した市販のコルクボードと押しピンによる画面の固定という方法が、安直なその場しのぎの展示方法に映った。また、3枚の地図の配置構成も、果たしてベストの方法であったかどうか疑問に思われた。

ここで報告者がとった対応は、公募展の展示計画立案ならびに実施の責任者としては、行き過ぎたものであったかもしれない。報告者は作者である藤田氏およびサポーターの方の作品の額装に対する考え方を確認するために、直接、問い合わせたことにした。そして藤田氏のサポーターの内藤氏と電話による聞き取りを行い、さらには内藤氏の同席のもと、藤田氏と直接、面会することも可能になった。

面会の席上、藤田氏は作品の最終的な形式に関する、報告者の半ば不躰な質問に対し、神経質そうにかつ慎重に言葉を選びながら、市販のフォトフレームを用いた仕上げが自らの考えに基づくものであることを明言された。彼の意図は、一般の家庭内の一室で、スナップ写真を気楽に壁面に飾るような感覚で作品を展示したかったというのである。氏の作品と対面し、さらには他の作品との比較検討の中で写真データを確認しながら感じていた報告者の不安は、見事に氷解した。一見、安易な解決策に思われた市販のフレームの採用は、しかし作者の明確な作品制作上の意図に基づいていたのである。報告者はこの聞き取りによって、氏の作品を氏の思い通りに展示することに対して、迷いを払拭することができた。

公募展の展示担当者が個々の出品者と連絡をとり、作品に込めた思いを取材することは、作品の最高の状態での展示を目指す立場からは、決して責められるべきことで



図2 カレンダー

はないと思われる。しかし展示の公正性を期する立場からは、特定の作者と連絡を取ることに問題はあられるかもしれない。藤田氏の「オリジナルの世界」に関して報告者の行為は、結果として作者の意図を確認するにとどまったので、特に問題視する必要はないのかもしれないが、K. N氏の不思議な魅力をもった作品、「カレンダー」(図2)に対して報告者がとった行為には、問題を指摘できるかもしれない。

K. N氏の作品、「カレンダー」は、様々な意味で通常の美術作品の枠を逸脱しており、そしてその逸脱ぶりの中にも作品の不思議な魅力の根拠があると思われる。作者のK. N氏は、重度の知的発達遅滞とともに暮らす40代前半の男性である。K. N氏は、日常生活に最低限必要と思われる言語コミュニケーションの能力は獲得されているが、少し複雑な内容をめぐる意思疎通は簡単ではないように見受けられる。氏は、通所型の障害者施設で日中を過ごし、「カレンダー」はその施設のアート活動の取り組みの中で生み出された作品だという。

作品としての「カレンダー」について、素描的に紹介しよう。K. N氏の「カレンダー」の制作は、まず月めくり型のカレンダーの日付部分を、1日分ずつ、四角形に切り取ることから始められる。氏が切り取りの素材として好んで用いているのは、日付ごとに簡単なメモを書き込むことのできる、実用性の高い中古のカレンダーである。K. N氏はそれらから1日ごとに日付を切り取ったのちに別の紙に、基本的には日付の順番通りにそれらを貼り込んでいく。そしてここが氏の制作の不思議なところなのであるが、1週間ごとに一列に貼り込まれていく日付の中に、所々に順番を逸脱した日付が挿入されるのである。それらの通常順番を逸脱した日付の挿入箇所であるが、報告者の観察する限りにおいては、何らの法則性も確認することはできなかった。

制作中のK. N氏の手の動きは、ほとんど止まることはない。日付を切り取る作業や貼り込む作業の間も、躊躇や逡巡を見せる瞬間は全くないといってよい。したがって、切り取る作業も貼り込む作業も、それほど丁寧に行われるわけではない。そして注目すべきは、日付を貼り込む順番の決定もほぼ瞬時に行われており、手を止めて考え込むような時間は全くないことである。このことから氏の制作する日付の配列の部分的な不規則性には、二つの可能な理由を考えることができようである。一つは、切り取られた日付紙片の素早い作業手順に起因する偶発的なシャッフルの結果という理解であり、もう一つは、氏はその迅速な作業の中で、平均者には容易には理解できない特別な法則性に従って日付紙片を貼り込んでいるという理解である。どちらの理解がより妥当性をもつかについて、私たちは俄かには判断する術をもたない。前者の、たまたま起こった不規則性の侵入の結果であるという理解することの方が一般的であると思われるが、しかし氏の制作には知的障害者の芸術表現に時に窺うことのできるサヴァン症的な、即ち平均者の理解を超えたある種の天才的なひらめきの要素があるかもしれないことも即座には否定できないのである。K. N氏は一定の時間の作業を終えると、貼り終わった日付紙片と切り取っただけの紙片を、専用の段ボール製のケースにしまい込み、その日の制作作業を終えるようである。

立体作品として第二次審査に搬入された「カレンダー」には、しかしながら展示方法を指示する書類や画像データは全く添えられていなかった。いわば展示される作品としての体裁を整えないまま、素材の集合として報告者の目の前にあった。しかしこの作品も、第二次審査を通過しているのであり、第8回「ぴかつ to アート展」の立体作品の一つとして展示する責任が報告者にはあった。展示方法の検討に当たって途方に暮れた報告者は、こちらの作品についても、K. N氏のサポーターである長谷川氏と連絡を取り、長谷川氏とK. N氏との面会を通して、展示方法を決定することとした。

先にも述べたように、重度の知的障害とともに暮らすK. N氏ご本人に、作品の制作意図を確認することは、少なくとも初対面の段階では不可能である。したがって報告者が行ったのは、K. N氏の制作に立ち会いながら、長谷川氏から聞き取りを行うことであった。K. N氏の制作を最も身近で見ている長谷川氏によれば、カレンダーの日付を切り抜き、別の紙に新たに貼り付けるという独自の制作方法を見出してからのK. N氏は、一心不乱にこの作業に熱中するようになったということである。いわば「カレンダー」の制作は、K. N氏の現在のアイデンティティーの欠くことのできない重要な一部をなしており、長谷川氏はその成果を作品という形式で発表することの中に、一人の障害者の社会参加の可能性の一端を探ろうとしたのであろう。そして長谷川氏も「カレンダー」の展示方法については模索中であり、今回の出品に当たっては、報告者に展示方法の決定を一任したいとのことであった。

K. N氏のサポーターであり、作品の出品に当たってはアドヴォケイトでもある長谷川氏からの依頼を受けた報告者は、「カレンダー」の展示に当たって、二つの原則を考えた。

一つ目の原則は、作品を構成する各部分を、あまり整理せずに、見た目にはランダムに映るように配置することであった。これは、K. N氏の制作過程の観察から導き出した原則で、氏の作業工程に淀みがなく、一見した印象では即興性が強いと思われたこと、そして作業を終えた氏は、その日の作業成果について特に分類や整理をすることなく、無造作に専用のケースにしまっていたことの二つのポイントが根拠となっている。先にも触れたが、K. N氏の作品には、平均者には偶然としか理解できないような部分的な秩序の乱れがあったが、その乱れは氏にとっては意味のあるものかもしれない。そしてその検証不可能な潜在的な秩序の可能性について私たちは、平均者の表層的な理解の中での整理や分類といった秩序に当てはめるべきではないと考えたのである。

二つ目の原則は、K. N氏が切断した日付の断片を別の紙に貼り込む際に現れる多様な方法を、できる限り全て目に見えるものにするのであった。「カレンダー」を構成する多くの再構成された「カレンダー」は、切断されたカレンダーとは別のカレンダーの裏面に日付の断片が貼り込まれているが、中には全く別の紙、例えば色画用紙に貼り込まれたものもあり、そして中には、めくることのできる書物仕立ての紙片

に貼り込まれたものもあった。報告者はこれらの貼り込みのヴァリエーションがこの作品の重要な造形的魅力の一つであると考え、それらを意図的に提示することを試みた。成果については、展示の状態を示した図2から確認していただきたい。

以上のように、藤田氏の「オリジナルの世界」の場合と異なり、K. N氏の「カレンダー」の展示に当たっては、報告者の作品解釈をあえて主張した。ここで一つの重要な問題が生じてくる。作品、「カレンダー」の作者は誰なのかという問いである。「カレンダー」というタイトルを伴いながら、第8回「ぴかつ to アート展」に展示されたオブジェ（ここでは現代美術について語ろうとする文脈におけるオブジェではなく、その意味性については一時的に棚上げされる客体的対象物としてのオブジェという意味で用いる）を生み出した中心的な工程は、K. N氏の作業であり、その作業を支えているであろう思考や感性は第三者的に関わることしかできない平均者には不可知のものである。「カレンダー」を「ぴかつ to アート展」に応募すること、即ちK. N氏の作業が生み出したオブジェを芸術作品として社会的に外在化させる際の主な判断と手続きを取ったのは、サポーターである長谷川氏である。展示されるべき作品としての最終的な作業を行う幸福な機会に恵まれたのは、報告者である。「カレンダー」の作者は、K. N氏なのか、K. N氏とサポーターの長谷川氏を共同制作者として考えるべきなのか、あるいはこの二人に報告者も加えた3名を作者と考えるべきなのか。

報告者は現在の段階では、この問いに対する答えを明らかにしないでおきたい。というのも作者は誰かという問いは、多くの知的障害者の芸術作品に常について回る課題であり、特に今回のK. N氏の「カレンダー」をめぐる特別な問題ではないからである。日常的に制作活動に取り組んでいる知的障害者が自らを作者であると認識しているかどうかは、厳密には確認できないことが多い。自らを作者であると認識することの根拠の一つとして、作品を発表することに対する積極的な意志の存在を挙げることができるが、少なくともアーティストが作品を他者の目に触れないように秘匿していたことはよく知られている。例えば、その作品が世界的にもよく知られ、ローザンヌ市のアール・ブリュット・コレクションにも作品が収められている、ヘンリー・ダーガー Henry Darger 1892-1973 は、彼自身の膨大なテキストと挿絵からなるヴィヴィアンガールズの物語を、誰にも知られずに制作し、存命中に公開することはなかった。また不思議な日記を書き続けていることで知られている重度の自閉症のアーティスト、戸來貴矩も、自らの意志で彼の「につき」を他人に見せることはなかったという。ある意味で自閉的な、あるいは自己完結的な世界の中で作品を制作している作者にとって、作品を社会内存在として公開するということはあまり大きな意味をもたない可能性もある。

ところで平面作品にとっての額装を、作者個人の内部で自己完結的に存在していた作品というオブジェを、展覧会という機会を通して社会内存在へと昇華させていくための最終的な手続きであり、意志の表明であると考えるとき、作者の問題も含めて別の課題を招来することがある。例えば、第7回の「ぴかつ to アート展」に出品された

「いきもの、Ⅱ」は、作品自体の大きさもさることながら、その重厚な額装による存在感の大きさが、展示計画者としての報告者を悩ませたことは、前節でもふれたとおりである。そしてこの作品の場合、そのような重厚な額装を採用することを決めたのは、作者の最も身近にいるアドヴォケイトの方であった。

伝聞ではあるが、アドヴォケイトの方の思いは、作者の熱心な制作の成果を、何としても公募展である「びかつ to アート展」で入賞させることにあり、そのために重厚で手の込んだ額装を採用したという。想像上の生き物を大胆なタッチで描いた画面を、複数、組み合わせた作品「いきもの、Ⅱ」は、作品そのものに十分な造形的魅力が満ちており、その魅力ゆえに第7回の「びかつ to アート展」の入選作品に選ばれている。この作者は、同じ手法による作品で何回か応募しており、全ての回において入選を果たしている。ここであえて失礼を承知の上で述べるのであるが、より重厚で手の込んだ額装によって審査員の作品に対する印象を高めようとしたアドヴォケイトの方の思いは、残念なことではあるが、平面作品と額装の関係に関する一般人が陥りやすいある種の誤解に基づいていた可能性が高い。すなわち、優れた平面作品には、重厚で手の込んだ額装を施さなければならないという誤解である。そしてこの誤解は、作者の思いとの乖離ゆえに作品の意義や意味を曇らせてしまう危険性がある。

先にも述べたように、「びかつ to アート展」において第一次審査を通過した平面作品は、壁面展示が可能な状態、即ち額装が施された状態で第二次審査の会場に搬入される。そしてその際、作品のもっている魅力と額装がミスマッチを起こしているのではないかと思われる事例も、散見される。また多くの作品が、アクリル板等の透明な素材によって画面を覆う形で装丁を仕上げているが、そのような処理が実際の展示空間においては、作品の造形的な魅力を減退させている例も少なくない。殆どの平面作品は、画面の支持体としての布や紙の質感や、描画用素材や道具としての絵具や筆等によってもたらされる、アーティスト自身の制作の直接的な手の痕跡である筆触のようなものが、作品の造形的な魅力の欠くべからざる重要な一部をなしており、アクリル板のような透明な覆いは、そのような魅力を明らかに隠してしまうからである。

作者が知的障害者である場合、額装を初めとする作品の最終的な調整は、サポーターやアドヴォケイトが行うことが大半である。そして多くのサポーターやアドヴォケイトは、社会福祉の専門家や家族であり、芸術制作や作品展示の専門家ではない。すなわち彼女／彼らは、作品の魅力の発揮をすべてに優先させる原則について、必ずしも自覚的ではないと思われる。結果として、社会内存在として公表される、額装が施された最終的な姿としての作品が、美的な判断の対象として必ずしも適切な形式をとらないことが、少なくない。そしてこのことは、個々の作品について起こりえる事態であると同時に、展覧会そのものの成立においても起こりえる事であり、また実際に起こっていることと考えるべきである。

3. 障害者による作品展の社会的位相について

前回の報告でも述べたように、近年、障害者の様ざまな活動に対する社会的な注目は高まってきている。いうまでもないことであるが、私たちの関心の対象である障害者による芸術活動もその例外ではない。国内に限っても、日常的な取り組みとして障害当事者の芸術活動を行う福祉施設は増加しており、それらの施設による活動の成果としての作品を公表する機会も増えている。また美術館や画廊のような専門的な施設が障害者の作品展に注目し、会場を提供したり、時には展覧会そのものを企画することも少なくない。あるいは、障害者の制作した作品やそれらから意匠を取り入れた製品を販売する事業体も、注目を集めている。どのような形であれ、障害者の何らかの制作活動が彼女／彼らの社会参画を促進し、社会全体の中でいわれのない障害者差別が解消される方向に向かっていくことは歓迎すべきことである。

しかしここで、障害者による作品発表の機会としての展覧会について、現在、私たちはある種の過渡期にいないのではないかという懸念を指摘しておきたい。その懸念とは、障害者による作品展がどのような営為として位置づけられるかという、社会的な認識をめぐるものである。

展覧会という社会的営為について考察する際には、いくつかの座標軸を考えることができる。第一にどのような作品を展示する機会なのかという、開催趣旨の基幹ともいべき理念があり、多くの場合この理念は展覧会の表題から窺い知ることができる。次に展覧会の運営主体がどのような組織であり、その組織が当該の展覧会に対してどのような姿勢で臨んでいるのかという観点である。さらには、第一の観点としての開催趣旨と第二の観点としての運営主催の社会的性格の具体的な表れとしての、展覧会の会場の問題が挙げられる。そしてさらに細かい実際の観点として、実際に作品が展示される空間の用いられ方や作品展示の具体的な手法の問題が挙げられよう。これら、四つの観点は相互に関連し合っており、全ては第一の観点である開催趣旨の理念に集約されるものであるが、展覧会の社会的な位相について考えるにあたっては、第二の観点としての展覧会の運営主体を担う組織の社会的性格とその展覧会に臨む姿勢が最も重要であると考えられる。というのも、開催趣旨を決定し、そしてその趣旨に基づいて会場や展示の具体的な方法を決定するのは、運営主体の組織であるからである。

現在、報告者が懸念している障害者の作品展の過渡期とは、展覧会運営の主体が障害者福祉に重点を置く組織なのか、それとも新しい美的価値観の創造や発見、そしてその啓発活動に重点を置く組織なのかという違いに対して、多くの人がとがあまり注意を払っていない現状を意味している。いい換えれば、障害者による作品展は、社会福祉活動の一環なのか、芸術啓発活動の一環なのかという問題に対して、関係する多くの人がとが無自覚であるということである。

楽観的な線的史観に期待を寄せるのであれば、報告者の懸念は杞憂にとどまる。と

いうのも、障害者福祉を主要な活動とする組織による展覧会と、美術館をはじめとする美術関係の組織による展覧会は、やがてはどちらかの優位性が明らかになり、自然に淘汰されていくという見通しに立てば、事態の推移を見守ればよいことになる。しかし報告者の懸念は、そのような二者択一的な優位性の競合の中で、重要な何かが見落とされはしまいかということにある。障害者福祉の観点が優位に立ちすぎれば、障害者による作品展は障害者福祉活動の一環という枠から発展的に飛び出していくことが難しくなり、美的な価値観の啓発を優先する観点に傾けば、障害者による作品展は、そもそもの開催趣旨が無意味化される惧れがある。報告者の思いは、二者択一的な方向性の収斂ではなく、異なるベクトルのすり合わせの中で新たな方向性を探ることにある。さらにいえば、新たに見出されるかもしれないベクトルが、単に二つのベクトルの合成にとどまらず、全く予期しなかった新たな次元を招来することを期待したいのである。

第1節において、前回、第7回の「ぴかつ to アート展」の展示作業の際、平面作品の壁面への展示に当たって報告者が設定した作品相互の水平方向の間隔について、実際の作業を担当いただいた福祉施設からの協力要員の皆さんが十分な注意を払われなかった事態について報告した。協力要員の皆さんは、彼女／彼らの障害者福祉サービスの担い手としての関心に従って、時間内の円滑な作業の進行を最優先事項と考えていたと思われる。報告者は、時間内の作業の完遂よりも、でき得る範囲内での最上の壁面展示の実現を目指していたのであるが、その時の報告者の関心は美的な価値観を優先する方向に傾いていた。残念ながら「ぴかつ to アート展」の運営主体内部において、展覧会そのものの細部までも決定する確固たる方針が、十分には成熟していなかったことが、明らかになったといえよう。

また報告者が見学・調査したいいくつかの障害者による作品展においては、会場が作品を展示するための専門的な施設としての美術館でありながら、作品展示の環境設定や実際の展示において稚拙な処理が見られた事例もあった。例えば、展示室内に展示可能な壁面を増設するために、視覚的には決してベストとはいえない市販の有孔ボード製のパネルが搬入されていた事例などである。美術館のような専門的な施設を訪れる人びとは、そこには専門家による価値認定がなされた作品が展示されていることを期待していると考えられるが、しかし展示空間の一部において安直な展示手法がとられていることを目の当たりにしたそのような来訪者は、障害者による作品展に対してある種の落胆を感じてしまう可能性が高い。

いずれの事例も、展覧会の社会的位相に対する意識共有の徹底不足が招いた事態であると考えられる。恐らく俯瞰的に概観してみると、少なからぬ美術関係者が障害者による作品、中でも知的障害者による芸術作品の中に新たな美的価値を産出し得る可能性に注目し、その動きの中に障害者の社会参画の新たな可能性の局面を見出した障害者福祉関係者が連携を模索しているのが現状であろうと思われる。しかしながら、具体的な細部の詰めにおいては、大小様ざまな、そして時には不可視的な、軋轢が生

じているのであろう。報告者はこの現状がとてつもなく深刻な問題を招来するとまでは考えない。しかし、関係者間にそのような意識の不一致が見られる可能性については、指摘しておく必要を感じている。

現状において一つの取り得る方向性としては、福祉関係者も美術関係者も互いに遠慮することなく、それぞれの価値観や優先事項を明確に示しあいながら、優先権を競うことに主眼を置かず協調できるポイントを探ることにあるのではないか。残念ながら報告者には、具体的な方法論を提案するだけの力量と蓄積が乏しい。しかし、繰り返しになるが、異なるベクトルを率直におつけ合うことによって、予期し得なかった新たな可能性もたらされることもあり得る。障害者による作品展は、障害者の社会参画を促進する可能性はもちろんのことであるが、美術作品を中心とした芸術と社会の関係についても、未知の関係性を示唆してくれる可能性も期待できると思われるのである。

〔註1〕 鳥先京一 「知的障害者による芸術表現
の社会的受容に関する一報告—第7回

『びかつ to アート展』をめぐって—
成安造形大学紀要第9号 2018年3月

授業初回における学生の「教員選択行動」が
大学生の受講姿勢に与える影響
—複数教員の並列開講型講義の事例から—

Impact on motivation when university students are allowed to choose
their teachers for the semester during the first class
A case study from a class offered by three different teachers
in a parallel time slot

濱中 倫秀

Rinshu HAMANAKA

筒井 洋一

Yoichi TSUTSUI

塩山 雄基

Yuuki SHIOYAMA

授業初回における学生の「教員選択行動」が 大学生の受講姿勢に与える影響 —複数教員の並列開講型講義の事例から—

Impact on motivation when university students are allowed to choose their teachers for the semester during the first class
A case study from a class offered by three different teachers in a parallel time slot

濱中 倫秀

Rinshu HAMANAKA

筒井 洋一

Yoichi TSUTSUI

塩山 雄基

Yuuki SHIOYAMA

准教授（共通教育センター：キャリア支援）

講師（共通教育センター非常勤：キャリア科目担当）

講師（共通教育センター非常勤：キャリア科目担当）

This paper focuses on the current situation in which the majority of university students register for classes without properly reading the syllabus first, then attend class passively without understanding its importance. I examined the effect of “self-determination” regarding teacher selection on the students’ attitude toward class. The results of this research reveal that self-determination had a significant positive impact on student motivation.

本稿は、授業初回に行った学生による「教員選択行動」が、受講姿勢にどのような影響を与えるのかを検証した。あらかじめシラバスに記載された内容に基づいて、その重要性を確認し、履修する学生は多くなく、受講する動機が弱いために消極的な受講態度や欠席が目立つようになってくる。そこで、学生自身が授業の重要性を認識し、さらに内発的に学びたいという気持ちを形成するために、教員の授業を自分の意志で選択できるしくみを導入した。このことが、どのように学生の内発的動機づけに結び付いたのかについて、受講生全員へのアンケートと個別インタビューに基づいて検証した。結果として、授業選択における自己決定が学生の受講意欲に大いに影響したことがわかった。

はじめに

大学の講義は、講義型・演習型・実験型いずれであれ、学生は事前に教員が作成したシラバスを見て、どの授業を履修するかを決定することになっている。シラバスは、教員・学生間でのコントラクト（契約関係）を成立させるためにもその役割は大きい【註1】。しかし学生は「単位のとりやすさ」を最大の履修する際の選択要因としている

〔註2〕 ことから、何を学び、それが将来の何に繋がっていくのかも理解しないまま履修している学生が多く、結果的に学習意欲が消極的で、私語も多く教員が手を焼いている現実がある〔註3〕。

実際に筆者が担当する2年生の授業初回（2018年9月17日）に取ったアンケートでも、「シラバス記載の内容や科目目標から意欲が喚起された」と答える学生は2割程度にとどまっている。そこで筆者も、これまでは「出席回数」や「毎回の提出課題」さらには「レポート課題」という外発的動機によって講義への学生の学習意欲を維持しようと取り組んできた。しかしそれでも意欲が上がらずに受講態度が徐々に消極的になり、途中で脱落していく学生は一定数存在していた。振り返ってみれば授業の重要度が理解できていない状態で、内発的動機は形成されにくく、かつ自ら選択したわけではない課題を義務付けられることで自己効力感は低下し、欠席などの現象につながっていったのではないかと考えられる〔註4〕。

そこで学生が事前にシラバスを読んでいるか否かに関わらず、まず講義初回到教員が自ら「授業内容・計画」を説明し、その重要性や得られるものについて認識出来るようにする。その上でいずれの講義を取るのかを学生が選択するという「自己決定行動」のプロセスを導入すれば学生の受講姿勢が変わるのではないかという仮説を設定した。

具体的には、複数教員の並列型開講講義において、3名の教員の中で2名の教員の講義を学生が選択する行為が、内発的動機付け（受講意欲）とどのように関連するのかを明確にする。本稿ではまず人間にとって「選択する」ことの意味について論じ、実際の授業の運営方法について述べた上で、仮説を設定する。続いて学生の自己決定行動に関する結果を、オンラインでのアンケートと個別インタビューとで裏づけて、多くの場合仮説が実証されたことと結論づける。ただし、今後の課題も考察として最後に提示する。

1. 自己決定の重要性

まず、意思をもって生きるものにとっていかに「自分で決定することができる＝自己決定」が大きな意味があるのかについて論じたい。

例えば動物の場合、野生よりもはるかに衛生面や安全面で恵まれているにも関わらず、動物園で飼育されている動物の平均寿命は、野生の動物と比べて圧倒的に短い。人間の場合も、職業階層が高ければ高いほど、平均寿命が長いという調査結果があり、仕事に対する自己決定権の度合いと平均寿命には相関性がある、ということが証明されている〔註5〕

また、「人が自律的に生きているかどうかの鍵となるのは、自分自身の選択で行動していると心底感じられるかどうかである。それは、自分が自由だと感じる心理状態であり、いわば行為が行為者の掌中にある状態ともいえる」〔註6〕という点からも、

誰かにやらされている、または課題や目標の押し付けなどでコントロールされていると感じた際に人はモチベーションを下げ（アンダーマイニング効果）、たとえ単純なものでも選択権を与えられるとモチベーションが上がる（エンハンスング効果）とされている。

さらに「自己決定」は幸福感にも影響を与えることが分かっている。主観的幸福度が、世界で54位という日本においては、1970年以降「所得水準と幸福度が必ずしも相関していないことが実証されており、その中で人が「幸福感」を感じる要素として、自分自身の進路決定を自己決定した人は、健康・人間関係に次いで所得が、学歴よりも幸福感に影響を与えているという調査結果^{〔註7〕}がある。

自己決定によって進路を決定した者は、自らの判断で努力することで目的を達成する可能性が高くなり、また、成果に対しても責任と誇りを持ちやすくなることから、達成感や自尊心により幸福感が高まることにつながっていると考えられている。このように自分の意志で物事を決定できるということは、人間の意欲そして幸福感にプラスの効果を与えることができる。

2. 授業の運営手法と仮説の設定

2.1. 授業概要およびシラバス

今回対象となる講義（以下本講義）は、成安造形大学芸術学部「就業力育成演習 C」（前期・受講対象は3年生）である。選択科目であるが、3年生236名中履修者は111名である。3年生は、第1筆者の濱中が担当する2年生のグループワーク主体の選択科目「就業力育成演習 A」（前期）「就業力育成演習 B」（後期）の受講経験者が大半であり、好き・嫌いや得手不得手はあってもグループワークに全く参加できないという学生はほぼいない。

※ちなみに「就業力育成演習 C」のシラバス記載の授業概要は、以下である。

学内で実施されるオープンキャンパスを舞台に、自らの学びやスキルをどう表現するかを考えます。キャンパス全体のどこで、何を企画し、いかに見ってもらうかをグループディスカッションを通して企画します。結果検証をしっかりとすることにより、今後の就職活動の中で自分自身の果たした役割とその成果について自信を持って伝えられることを目指します。

なお本講義は、履修者数が多いため共通シラバスで3名の教員が講義を行う複数教員の並列開講型講義である。ただし、全く同内容の授業を3名が行うのではなく、教員毎に異なる授業内容を経て、最終的には5月そして7月に実施される本学のオープンキャンパス向けの企画提案を、入試課職員を対象に行った。（本授業実施前には入試課と内容と目的の共有を行い、プレゼン審査員の協力を依頼した）

3名それぞれの授業内容は、以下である。

濱中 / 授業責任者

オープンキャンパスに参加している高校生及びその保護者向けに、「気になる就職のこと」というセミナーを30分程度実施している。その内容について、プレゼンテーションの基礎知識を学びつつ、大学（本学）・来場した高校生・セミナーに参加する保護者の三方のニーズを在学生の目線で再検討し、改善企画の提案（プレゼンテーション）を実施する。

筒井 / 非常勤講師

オープンキャンパスに参加する芸大志望の高校生が、現在、何に取り組み、今後どのようにアートに関わっていくのかについて、Zoomを使って、大学生が高校生にオンラインインタビューする。それによって、大学生は自分の高校時代から現在までの自分のキャリアについて振り返ることができる。

塩山 / 非常勤講師

オープンキャンパスに参加している高校生向けに「ラジオセイアン OC ボイス」というラジオ番組を放送している。大学の雰囲気や学生の日常生活を理解してもらうことを狙いとする50分の番組中、10分間の1コーナーをラジオ制作の基礎を学びつつ、「本学へ進学したい」と高校生に思ってもらう内容を企画提案する。

2.2. 仮説の設定

本講義にて、初回（2018年4月10日）に3人の教員がシラバスでは伝えきれない授業の内容について、各自が詳しくプレゼンテーションをすることにした。学生にとっては、どの授業が自分にとって価値が生まれそうかを、検討するのに必要だと考えたからである。

その上でいずれの講義を取るのかを学生自身が自らの意志で選択（もちろん成績評価には一切関係がない）するという「自己決定行動」のプロセスを導入すれば、学生の受講意欲や姿勢に好影響が出る、という仮説を設定した。

2.3. 学生による自己決定プロセス

初回の講義では、学生はランダムに3教室に分けた。教員3名がそれぞれ自分の授業の進め方について、20分間のプレゼンテーションを3回ずつ行った後、学生は其中で最大2名（第2回～8回と第9回～15回までの前後半に分け、8回と9回の間でクラス替えを実施）の教員の授業をオンラインアンケートにて選択（自己決定）できるようにした。

アンケートの中で、「自己決定」に関する質問項目は下記の通りである。

- ・塩山（濱中・筒井）の授業に対する期待感は、10点満点でいくらですか
- ・第1希望の授業はどの授業ですか
- ・第2希望の授業はどの授業ですか

全てのプレゼンテーション終了後、学生はどの授業を受講したいか第2希望までを自己決定し、各自のスマートフォンから、事前に教員側で準備した Google フォームにて入力した。

3. アンケート結果（初回・最終回）およびインタビュー調査の分析

3.1. 講義初回のアンケート結果

アンケートの結果は、下記の通りである。

学生による教員選択結果

教員名		2限目クラス	3限目クラス	合計
塩山	第1希望者数	24	24	48
	第2希望者数	29	9	38
	期待度平均値	8.10	8.18	8.14
濱中	第1希望者数	33	12	45
	第2希望者数	18	20	38
	期待度平均値	7.88	8.26	8.07
筒井	第1希望者数	10	3	13
	第2希望者数	20	10	30
	期待度平均値	7.37	7.49	7.43

期待度は各教員に対し10点満点で回答

図1

教員3名で希望者数若干のばらつきはあるものの、学生全員が第1希望の授業を前半または後半で必ず受講できるようにした。興味深い点として、授業への期待度（10点満点）が平均で7.88という点である。自己決定がある授業という点が学生の授業への期待度にも早い段階でプラスの影響が出る一因になったと考える。

3.2. 講義の最終回アンケート結果

最終講義（2018年7月24日）で Google フォームでのアンケートを再度行った。

アンケートの中で、「自己決定」に関する質問項目は下記の通りである。

- ・3名中2名の教員の授業を選択したことはその後の学びの意欲につながりましたか。
- ・同一科目で内容が異なる二人の授業を受けたことは、あなたの中に何をもたらしましたか。

学びの意欲につながったかについての回答結果のグラフ

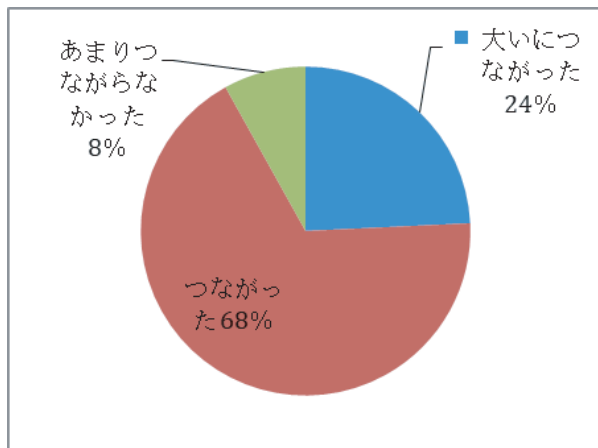


図2

結果分析 / 自己決定は受講意欲の向上につながったと92%が回答した。

理由としては、

- ・ 違う視点からプレゼンや企画を学べたのでためになった。
- ・ 1科目の中で前後半2回のゴールがあり、達成感が2度味わえた。
- ・ 前半、後半があることで切り替えが出来、最後までだらけずに取り組めた。

といった意見がアンケート中の自由記述に見られた。

一方で、1割程度の学生はあまりつながらなかったと回答しており、その理由としては、

- ・ 2名の授業の進度にギャップがあり、苦しんだ。
- ・ 受けたいものが後半受けられず、意欲が低下につながった。

といった意見が同じくアンケート中の自由記述にみられた。

3.3. 学生に対するインタビュー

さらに結果の裏付けを深めるために、実際に受講した学生の中から、最終の授業改善アンケートの回答属性別に3名を選出し、インタビューを行った。

教員を選択（自己決定）したことが学びの意欲に「大変つながった」と回答した学生Aは、いつもグループワークで中心的な役割を果たし、前向きで活動的な学生である。「(三名の教員が) 授業内容をしっかり説明してくださり、それをしっかりと聞いた上で選択するので、よし、やるぞ、と自然と積極的になれました。一方的に課題を与えられるよりも、自分自身で決定したことがいい意味でプレッシャーになり途中で投げ出さずに取り組めたと思います。」と話してくれた。

教員を選択（自己決定）したことが学びの意欲に「つながった」と回答した学生B

は、積極的でどんなメンバーと組んでも成果を出そうとする学生である。「初回に先生がしっかりと授業内容を説明してくれたので僕は深く理解して選択出来ました。3人とも独自の内容かつ異色で、どれも興味深かった。前半の学びを後半で実践できるという部分もすごくいいと思います。ただ、7回という回数の中で企画検討から発表の準備までを終わらせ、さらに後半にさらにもう1回というのがハードでした。」と話した。

教員を選択（自己決定）したことが学びの意欲に「あまりつながらなかった」と回答した学生Cは、ややシャイな印象があり自分から積極的に発言することは多くないが、実直で真面目な人柄である。「3人の中で1人（の教員だけ）を選ばない、という行動に違和感があったのと、自分の場合は先生や内容によって大きく意欲が変動しないので、本当にどの授業でも良かった。そのため選択することは自分にとってはあまり影響がないと回答しました。」と話していた。以上3名のインタビュー結果の意義については、次節で論じる。

3.4. 自己決定と受講意欲との相関

アンケート結果から、学生が自分自身で選択（自己決定）するというプロセスを入れることにより、学生全員が第1希望の授業を前半または後半で必ず受講できるようにしたことによって、若干の例外はあるものの92%が受講意欲の向上につながったと回答した。授業最終週で再度アンケート調査をした結果、受講意欲の向上につながったと92%が回答した。

これらのアンケートによって、多くの学生にとっては、自己決定と受講意欲とはかなり関連があることがわかった。自己決定について対応の異なる学生3名にインタビュー結果からは、自己決定に意味を感じない少数の学生にとっては、それは大きな影響を与えないが、自己決定したことに意味を感じる多くの学生にとっては、学習意欲の意欲を向上することにつながったことがわかる。

このようにアンケートとインタビュー結果からいえるのは、多くの学生が教員選択行動に対する自己決定に大きな意味を感じており、その結果、学習意欲が向上したことである。教員側があらかじめ学生のクラス配属を決めているのとは異なり、自己決定させることによって、学生により多くの判断の余地を委ねたいという教員側の意図をよく理解していることがいえる。このように学生は、自己決定の領域を広げることによって、学習意欲が高まるのである。なお、第一筆者が担当する他の並列開講型授業「就業力育成演習B」（2年生対象）では、学生のクラス分けは教員側が主に専門領域や人数の均等配分を意図しながら、担当教員を教員が決定している。その結果、初回（2018年9月17日）のアンケートにおける授業への期待度は10点満点の平均7.17であり、自己決定ができる授業より0.71ポイント低かった。原因としては、学生は教員を選択できず、授業初回に初めて担当する教員を知り、その授業だけを受講することになる。その結果、シラバスを読まずに履修した大半の学生にとっては、決められた教員の授

業に割り振られるわけであり、授業に対する期待感が高まりにくい。

そのような授業環境の中で、学生が受け身で消極的な受講態度を示すのは、自己決定ができない中で、内発的動機よりも外発的動機が先行するため、アンダーマイニング現象が出たと考えられる。他の授業との比較においても、学生による自己決定による授業選択行動は、学生が自ら決定できるという点で受講動機を大いに高めたのである。

4. 結論

今回「自己決定行動」のプロセスを導入すれば、学生の受講意欲や姿勢に好影響が出るのかという仮説については、授業後のアンケート、インタビュー、他の授業との比較から仮説が証明された。

すなわち、第一希望の教員の授業を学生が取ることによって、授業に対する学生の期待度が大幅に上回った。それは、第一筆者が担当している他の授業に比べても明確である。

これまで教員を「教える側」としか捉えていなかった学生が、「学びたい授業（教員）を選択する」という自己決定の機会を与えられたことは、学習意欲の向上にプラスの影響を与えた。

受け身の消極的であると揶揄されがちな現代の大学生であるが、その受動性は学生自体が本来もっているものではなく、むしろ自己決定のない、選択権を奪った授業にその原因の一端があると考えられる。

もちろん、今回の仮説を設定するにあたって、この授業では、驚異の選択権があるにしても、「学び方」や「将来どう役に立つか」について選択権をどこまで認めるのかは今後の課題である。授業に対して、事前に十分な情報とともに選択権があった上で自己決定できれば、学生の内発的動機は高まる。今後、大学のユニバーサル化の中で、学生の基礎学力の低下や受動的な受講態度を嘆くより、このように学習意欲を喚起する工夫を検討することがより重要だと認識した。

5. 課題と改善目標

実際に授業を運営していく上での課題もいくつか見られた。

1つは学生のインタビューでも出た意見だが、どうしても前半の方が目新しさもあり受講態度が意欲的であり、後半の7回の講義は（あくまで前半と比較すると）ややマンネリ感や7回で企画提案を作り上げた直後にもう1セット取り組むことへの疲労感が感じられた。次回は3人の中で1人を選ぶものの、もう少し3クラス合同実施の回を増やす、また途中で移籍を認める制度を入れるなどの工夫を重ねていきたい。

また、今回はたまたま極端な選択の偏りは見られなかったが、5:4:1などの極端な偏

りが出た場合にはどのように運営していくのかという課題も残っているので今後の検討課題としていきたい。最終的には、自己決定の機会が最初だけではなく中間地点でも設けられ、学生だけではなく教員もモチベーションが維持され、結果的に学びの深い授業となるような仕組みを構築していきたい。

- [註1] 松井範惇「アメリカの大学教育システムは日本の大学に有用か」、『大学教育』, 3巻(山口大学大学教育機構, 2006, 3), p.11-12.
- [註2] 牧野幸志「大学生の一般的授業選択態度と成績との関連(1)1— 一般的授業選択態度のタイプ分け—」、『高松大学紀要』, 第36号, 2001, p.67-69.
- [註3] 田中幸代「大学教員に求められる教育力向上のために—教育心理学が検討できる問題の展望」, 『教育心理学研究』, 4, 46, 1998, p.474-475.
- [註4] 赤間健一, 「動機づけから考える大学生にととの授業」, 『人間文化研究: 京都学園大学人間文化学会紀要』, 29, 2012, p.125-127, p.146.
- [註5] シーナ・アイエンガー『コロンビア大学ビジネススクール特別講義 選択の科学』(文藝春秋, 2014), p.34-39.
- [註6] エドワード・L. デシ. リチャードフラスト『人を伸ばすカー内発と自律のすすめ』, 新曜社, 1999, p.117.
- [註7] 西村和雄. 八木匠, 「幸福感と自己決定—日本における実証研究」, 『RIETI—独立行政法人経済産業研究所ディスカッション・ペーパー』, p.19-20.

Building an EFL Course around a Feature-Length Film:
Exercises to Accompany *About a Boy* and Its Screenplay

三宅キャロリン

Carolyn MIYAKE

Building an EFL Course around a Feature-Length Film: Exercises to Accompany *About a Boy* and Its Screenplay

三宅キャロリン
Carolyn MIYAKE

教授（共通教育センター：英語教育・日本学）

This paper is a compilation of the course materials I have designed for EFL students to accompany the movie *About a Boy* and the Screenplay Publishing Company's book by the same title.

EFL 授業のために開発した教材の内、ここでは映画 *About a Boy* と Screenplay Publishing Company から出版されている同名の英語スクリプトに併用する教材を公開する。

1. Introduction.

This is the sixth in a series of papers in which I introduce materials to be used with a feature-length film and its bilingual annotated screenplay in an EFL class. (See also Miyake 2010, 2015, 2016, 2017, 2018.) Here I will introduce English language learning materials that I wrote for use with Screenplay Publishing Company's screenplay book, *About a Boy* (Screenplay, 2003) and that movie. The screenplay books (hereafter referred to as SP) from Screenplay Publishing Company include the script of a feature-length film in both English and Japanese, as well as notes explaining many of the English words, idioms and expressions in the dialogue and background information when it is helpful. The worksheets presented here are designed to give students material to work with in pairs and groups that will help to familiarize them with the vocabulary and expressions from the SP for *About a Boy*, while also offering practice in reading and writing English at the intermediate level.

Over the years research has continued to support the important role that video can play in the EFL classroom (Nunan 1989, Tomlinson 1998, Sherman 2003). I have found that feature-length films provide an excellent platform for the development of language-learning materials such as written and oral exercises, group discussions and games that can be designed to match the level of nearly any class. The continuity of subject and characters in a feature-length film helps students immerse themselves in the material and makes the coursework more interesting to the learners. The overall reaction of the students to this style of course has been consistently

positive. Likewise, I find these courses interesting to develop and teach.

More information on how I use this combination of a film and its screenplay in class and an analysis of many of the styles of activities presented here can be found in the two-part paper titled “*Movies in English-Language Teaching: Building an EFL Course around a Feature-Length Film*” (Miyake 1999, 2002). Also, a variety of other activities and games that I have designed for use with films are introduced in my “Video-Based Language Learning” series (Miyake 2012, Miyake 2013, and Miyake 2014).

2. Organizing the class and materials.

The following is a slightly revised and abridged expert from “*Movies in English-Language Teaching: Building an EFL Course around a Feature-Length Film Part I*” (Miyake 1999), which explains how I choose materials for this style of course and how the course is organized.

Materials

The movie

The movie, of course, is the most crucial element to the class. On the topic of selecting a textbook for an EFL class Marc Helgesen wisely advises to “choose it carefully. Nothing can make a year more miserable than having a book that doesn’t work well for you and your students” (Helgesen 1993:47). This holds equally true to the choice of the film to be used in the course…It is important to choose a film that will hold the students’ interest and one whose content will not be offensive to the target group.

The other more vital element to look at in selecting the movie for a class is, of course, language content. Here I look for vocabulary, phrases, dialogues, and language usage which represent modern spoken English and which can be used to develop a wide array of language-learning activities. One disadvantage to using movies with SPs is that one’s choice is limited to only those movies for which SPs have been published, but even so there is quite a wide variety of movies which meet the criteria above to choose from and new SPs are being published regularly.

Regarding the legality of showing these videos in the classroom, a very informative article by Casanave and Simons (Casanave and Simons 1995) helps to clarify this point. They cite Article 38 of the Japanese Copyright Law, which states “a work already made public may be publicly presented, performed, recited or presented cinematographically for non-profit making purposes and without charging any fees to the audience or spectators” (p.82). This can be interpreted to mean that the showing of pre-recorded videotapes to college students in a university classroom setting does not represent an infraction of the law.

Screenplay

The SP is a book of the complete script of the movie written in both English and Japanese. Written in between the dialogue are brief explanations of what is happening in the scene, such as one would find in the script of a play. The SP also includes notes explaining the significance of certain words and phrases in the dialogue when the meaning of such phrases is not evident through translation alone, as is sometimes the case with jokes, idioms, slang, historical references, and the like. My choice of a book that includes a Japanese translation of the dialogue is deliberate. My purpose in this class is to develop listening and speaking skills, and the SP provides a sort of database from which classroom activities can be developed. For large classes of students with varying ability levels, beginning with a shared understanding of the dialogue in the movie allows the conversational activities to progress more smoothly. Students are more than sufficiently challenged linguistically by the worksheets and printouts that they are given to complement the SP. (For a discussion of the importance of comprehensible input in second language acquisition see Krashen and Terrell [1983].)

Each SP is given a language-difficulty ranking set by the staff at Screenplay Publishing Company of from one to four stars, with one star representing the most elementary level of the movies being evaluated and four the most advanced. Criteria for evaluation include the speed of speech, the use of slang and dialects, and the difficulty of the linguistic content of the movie. In my estimation these star rankings are quite reliable, but since the students I teach are studying at the university level and since

they are provided with a copy of the script which they can study at home before class and have an instructor at their disposal to help break down the language content I do not consider the SP ranking when choosing a movie for my class. I do, however, draw the students' attention to this system when they come to me for advice on what movies and SPs I recommend to them for individual study.

Most of the students I have taught have not heard of the SP series and I think it would be useful for EFL instructors to mention this series of books to their students whether they are using videos with them or not. These books offer self-motivated students a fun way to improve their listening skills and increase their English vocabulary on their own. They are relatively inexpensive and can be purchased at most of the larger bookstores in Japan or ordered through them if they are not in stock. The movies to accompany SPs are also available through the bookstores or can easily be obtained at video rental centers in Japan, of which most students would appear to be members. I also keep a selection of SPs in my office to lend out to interested students. I find that students are always eager to learn of new ways in which they can work on their own to improve their language skills, and this is one source of self-study materials that seems to be both interesting and beneficial to the students who have tried it.

Worksheets and printouts

The printouts and worksheets are an integral element of the course. The worksheets are designed to help the students assimilate the language used in the movie and to give them opportunities to work with useful vocabulary, phrases, and language structures in the movie and SP. The type of exercises I use on the worksheets and the number of worksheets I provide vary from unit to unit, but for each unit I always begin with a list of what I feel are the most useful phrases for the students to know from that part of the movie... In subsequent sections of the worksheets I include exercises designed to give students further practice in using the vocabulary and expressions introduced in the first section of useful phrases.

Notebooks

In addition to these materials, students are required to keep an A-4 sized notebook into which they put the printed materials that I give them, write-ups of group work, notes which they take in class, and any other work they do that is relevant to the class. I collect these notebooks periodically to make sure the students are keeping up with their work and to give them feedback on their written assignments. Since we refer to previous worksheets regularly throughout the year, I emphasize to the students the importance of keeping their printouts and worksheets in chronological order in their notebooks and bringing their notebooks to class with them every week. (Miyake, 1999).

3. About a Boy Worksheets.

Below is a complete set of the worksheets that I have written to accompany the SP for *About a Boy*. The first is an introductory worksheet, followed by one set of worksheets for each unit in the book and a final comprehensive review worksheet. As much as possible the lines provided on the original worksheets for answers have been omitted here to save space. Worksheets for episodes one through ten are designed to correspond to the ten episode divisions in the SP, while page numbers in the exercises on the worksheets correspond to the pages in the SP.

INTRODUCTION: Language for Discussing Movies in English Class

1. To describe something means to explain what something is like. For example, if I say, "Describe Will's apartment," you could say, "It is clean, modern, and nicely decorated. There are many fancy machines and devices."
2. The lines in a movie are the words that the actor says. One of Will's lines in this movie is "No man is an island." One of Marcus's lines is "There were people out there who had a good time in life. I was beginning to realize I wasn't one of them."
3. A scene in a movie is a part where a series of events occur in one place. If I say, "What is one of your favorite scenes in Unit One and why?" you could reply, "I like the scene where Barney enters the room and starts spitting. I think that Will's reaction to that is funny."

4. "How do you know?" means "What is your information based on?" So if I say, "How do you know that Marcus is unhappy?" you can reply, "Because he says 'There were people out there who had a good time in life. I was beginning to realize I wasn't one of them.'"
5. "Pretend" means "make believe." You can do this by using acting skills, such as gestures or motions. So if I were to say, "Pretend you have a headache" you could hold your head in your hands and act like your head hurts.

Below is a list of activities to do when you have extra time in class.

- Read lines from the text to your partner and ask your partner to repeat them. Then ask your partner who said those lines to whom and where.
- Choose a conversation in the script with your partner, take parts, and read the conversation together.
- Choose a conversation that you would like to practice. Ask your partner to read the conversation to you line by line, and repeat each line after your partner reads it to you.
- Look at the Application of Useful Phrases section for each unit, and take turns quizzing each other.
- Ask your partner's opinion about characters or scenes in the movie.

UNIT ONE: TWO BOYS (PP. 8-25)

I. Useful Phrases (pp. 8-16). Find the sentences below in your book and highlight each one.

1. No man is an island.
2. I had a great time last weekend, so give me a call.
3. I like to think I'm pretty cool.
4. I just didn't fit. [American English: fit in]
5. She made four hundred pounds a week. (Marcus, p. 10) [to make money = to earn money]

6. I hated standing up in front of people.
7. Will, this is Imogen.
8. You can hold her if you'd like.
9. You'd better take her back.
10. The place is looking really nice. [NOTE: This is sarcasm. Will thinks their apartment is a mess.]
11. Christine's husband comes into the room, carrying their toddler son, Barney. (p. 13)
12. I'd rather eat one of Barney's dirty nappies. (p. 14)
13. You've never had a job, or a relationship that lasted more than two months.
14. I would say you're a disaster.
15. Seriously?
16. I'm really, really touched, but um, you must be joking.
17. I really am this shallow.

II. Application of Useful Phrases: Choose an underlined word from Part I and complete the sentences below.

1. If you want someone to telephone you, you can say _____.
2. What does Christine say when she introduces Will to her new baby?
_____.
3. Another way to say "if you want to" is _____.
4. A _____ is a child between one and three years old. _____
5. Another way to say "Are you joking?" or "You must be joking!" is _____.
6. An expression meaning "I would prefer to..." is _____.
7. Another way to say "I earn 1,000 yen an hour at my part-time job" is "I _____ 1,000 an hour at my part-time job".
8. When a man and woman are dating each other and nobody else, we say that they are in a _____.
9. Another word for home or apartment or flat is _____.
10. A word meaning a complete mess, or a failure, is a _____.
11. If something affects you emotionally and makes an impression on you, you say you are _____ by it.
12. In American English _____ are called diapers.
13. The opposite of deep is _____.
14. An expression meaning "you should" is _____.
15. Another way to say "telephone me" is _____.

16. An informal word meaning “very” or “quite” is _____.

III. Who said this to whom, where? Look at pages 8-16. Find the answers with your partner. Then take turns reading the lines to each other. The person answering should not look at the paper. Number one is done for you.

1. In my opinion, all men are islands. And what’s more, now’s the time to be one.
Will said this to himself in his apartment.
2. I had a great time last weekend, so give me a call, okay?
3. There were people out there who had a good time in life. I was beginning to realize I wasn’t one of them.
4. I hated standing up in front of people.
5. The place is looking um…really nice.
6. I would say you’re a disaster. What is the point of your life?
7. How would you like to be Imogen’s godfather?
8. I’m really, really touched, but um, you must be joking.
9. I really am this shallow.
10. You don’t have to walk me to school anymore. I know the way.

IV. Think about it.

1. How do you know that Will is happy with himself and his lifestyle? What does he say? (p. 10; p.14)
2. How do you know that Marcus is unhappy? What does he say? (p. 10)
3. Why is Will’s friend Christine worried about him?
4. Do you think that Christine should worry about Will, or do you think that she is trying to push her lifestyle on him?
5. Why do you think that the children at school tease Marcus?
6. Marcus says, “You don’t have to walk me to school anymore. I know the way.” Why do you think he says this? Do you think he wants his mother to walk him to school?

V. With your partner, read the conversation between Will and Angie on p. 18. Take turns being Will and Angie.

VI. Look at pages 18 to 24 and answer the following questions with your partner.

1. What are some negative adjectives that Will and his ex-girlfriends use in this section to describe Will?
2. What do you think of Will?
3. What do you think of Will's plan to date single mothers?
4. What do you think of Marcus?
5. Compare Will's and Marcus's pets.
6. What pets have you had? What would be your ideal pet?

VII. Write three of your favorite lines from Unit One, p. 8-24. Then dictate them to your partner.

VIII. Listen and write the lines your partner dictates.

IX. What is your favorite scene in Unit One, p. 8-24? (For example: I like the part where... OR I like it when...)

UNIT TWO: S.P.A.T. (PP. 26-37)

I. Useful Phrases. Find the sentences below in your book and highlight each one.

1. Fiona, severely depressed, tries to fix Marcus's breakfast cereal while crying uncontrollably.
2. The crying had started again and it scared me.
3. She'd never done that before.
4. I couldn't figure it out.
5. So, are you looking forward to school today?
6. Marcus, we don't really want you hanging around with us anymore.
7. They've got nothing to do with me.
8. Besides, everyone thinks you're weird.
9. Where did they hang out?
10. Will sees a flier for a single parents group, SPAT.
11. A group of average, middle-aged women sit in a circle and talk.
12. That was when I was seven months pregnant.
13. Mine was shagging his secretary.
14. You got dumped then?
15. May I ask, does your ex see Ned at all?
16. Sorry, I didn't catch your name.

17. How does he cope with that?
18. You hang in there, Dad!
19. That's amazing for a two-year-old.
20. The problem was, I also had an imaginary two-year-old boy.
21. A bewildered family looks on.

Highlight the following expressions in the margins of your textbook.

- 1) pour 2) spill 3) day dream 4) grocery store 5) roaring drunk 6) magazine stand
- 7) pregnant 8) cheat on 9) gasp 10) parking lot

II. Application of Useful Phrases

Look at the underlined words in the Useful Phrases for Unit Two and find a word or phrase that means the same or almost the same as the words and phrases below.

1. Do you mind if I ask...
2. Good luck! Don't give up!
4. manage in a difficult situation
5. normal
6. extremely and seriously
7. no connection
8. a previous boyfriend, girlfriend or spouse
9. strange, odd, unusual
10. extremely confused
11. frightened
12. watch from the side
13. extraordinary and wonderful
14. pretend
15. a person between 40 and 60 years old

III. Comprehension Questions

1. Why do you think Marcus can only have Cocoa Puffs on Sunday?
2. Why is Fiona crying?
3. Fiona has cried uncontrollably before. Why is Marcus more scared by it this time than when she had cried in the past for no obvious reason?

4. How do you know that Fiona doesn't realize Marcus is having trouble with the children at school?
5. Why does everyone in class stare at Marcus and begin laughing?
6. Why don't Niki and Mark want Marcus to hang around with them anymore?
7. Where does Will find the flier for SPAT?
8. What does SPAT stand for? (NOTE: SEIAN stands for Seian University of Art and Design.)
9. Will is practicing his lines on the way to his first SPAT meeting. What are the lines?
10. Why does Will say that men are bastards after listening to the women at SPAT talk?
11. Suzie asks Will if his ex sees much of Ned. When Will answers no, the women in SPAT gasp and act shocked. Why does this please Will? (See the top of page 34.)
12. Why do the women say that Ned is amazing for a two-year-old?
13. Why does Will crush potato chips into the new car set he bought for his imaginary son?

IV. What is your favorite scene in Unit Two? (I like the part where... / I like it when...)

V. Sequencing events means putting them in the order in which they took place. The following is a list of events, out of sequence, from a scene in Unit One. Put the events in order.

- ___ Christine asks Will to be Imogen's godfather.
- ___ Barney, Christine's toddler, runs around the room spitting.
- ___ Will hands Imogen back to her mother.
- ___ Christine and her husband look shocked by Will's reply to their suggestion that he be Imogen's godfather.
- ___ Christine tells Will that she thinks he's a disaster.

VI. Make a sequencing exercise for Unit Two. Choose from the scenes with Marcus or from the scenes with Will in Unit Two. Write five events out of order. Try to challenge your partner, and try to use some of the new words and expressions you have learned so far.

VII. Dictate the events to your partner. Your partner will write them down, then

put them in the correct sequence. Check your partner's answers when you are both finished. (Check both the sequencing and the spelling.)

VIII. Your partner will read you five events in the story, out of sequence. Write them down, and then put them in sequence.

IX. If you have extra time discuss the following in your groups.

- What are some of the lies that Will tells Angie in Unit One, and then at the SPAT meeting in Unit Two?
- Most children are teased about something by other children at school or by their siblings. (Siblings are brothers and sisters.) When the teasing is severe, it is called bullying. Talk in your groups about one or more of the following: 1) things that you used to tease your classmates or siblings about 2) things that you were teased about growing up 3) things that kids often tease other kids about in school.

X. Dictation

a) Read the conversation between Fiona and Marcus on page 26 to your partner, and have your partner repeat each line after you. Then do the same with the conversation between Miora, Will, and Suzie on page 32 and 34, beginning with Miora.

b) Next, dictate the conversation on page 26 to your partner and have your partner write those lines below.

MARCUS: _____ Cocoa Puffs?

FIONA: _____.

MARCUS: _____.

'Cause _____.

She'd never _____.

MARCUS: I couldn't _____. Nobody was dead. _____

_____ music therapist. She was kind of a teacher for sick kids. So

_____.

MARCUS: _____ breakfast?

FIONA: No, _____.

c) Now dictate the conversation on page 32 and 34 to your partner and have your partner write those lines on the worksheet below.

MIORA: _____, then?

WILL: Yeah. Yeah. Yeah.

SUZIE: Uh, _____ uh, _____?

WILL: Uh, well um, sorry, _____, uh...

SUZIE: Oh, um...Suzie.

WILL: Suzie. Um, _____, no. No.

SUZIE: _____?

WILL: Well, you know, he's a very good little boy, very, um, _____.
_____ resources, don't they?

SPAT WOMEN: Mmm.

WILL: Just the other day, _____ and he
came _____ and put his little pudgy arms _____
_____.

SUZIE: God, _____.

WILL: Is it?

SPAT WOMEN: Yeah.

WILL: Yeah, well, he's _____, very, very special. _____
you know _____ teaching
me the ways of the world. Uff. Sorry.

WILL: Thank you.

WILL: (v.o.) My God, _____. I was even _____
_____.

UNIT THREE: EMERGENCY (PP. 38-55)

I. Useful Phrases

1. Oh, what a shame.
2. Suzie hands a stroller to Will.
3. This is Megan, by the way.
4. Look what a mess Ned made of the car seat!
5. Suzie and Will walk along a bit uncomfortable.

6. I was beginning to wonder if we were gonna be stuck with this weird kid all day.
7. So how often do you look after Marcus?
8. You call it off color, I call it nuts.
9. (It's) my mum's homemade bread.
10. Well, it looks...it looks pretty good.
11. No, it isn't. It's healthy.
12. You miss him, don't you? [I miss them. / My friends missed me when I was out sick.]
13. You didn't have to throw the whole loaf, that would've killed me.
14. Sorry, I misunderstood.
15. He was throwing bread to try to sink the body, 'cause Megan here was getting upset.
[v. to get upset is to feel emotional distress (distress is unhappiness or suffering)]
16. They're my second-favorite animal after dolphins.
17. I'll have to wade in and get it.
18. That day, the dead duck day, was when it all began.
19. Are you decent? [This means "Are you dressed? Can I come in?"]
20. Marcus enters the flat to find his mother passed out on the couch, covered in her own vomit.
21. Will, call an ambulance. [Call the police. / Call 911.]
22. Well, she's conscious.
23. Suzie heads over to a vending machine.
25. Suddenly I realized: two people isn't enough. You need a backup. If there are only two people, and someone drops off the edge, then you're on your own.

Highlight the following expressions in the margins of your textbook.

- 1) (The) more the merrier. 2) Marcus, Will. Will, Marcus. 3) mess
- 4) What do you do? 5) off color 6) She just needs a weekend taking it easy.
- 7) loaf 8) Are you decent? 9) There you go. 10) Warm and flat. 11) a suicide letter

II. Look at Useful Phrases 1-24 above. With your partner, takes turns asking and answering, "Who said this to whom, and where?" For numbers 2, 5, 20 and 23 ask, "Where were they and what were they doing in this scene?" If you have time after you finish, take turns reading the lines to each other. The person repeating the line should not look at the paper.

III. With your partner, look for words or phrases on this page and between pages

46 and 54 in your book that have to do with illness and hospitals. Make a list of the words and expressions you find.

IV. Application of Useful Phrases: Fill in the blanks below with the appropriate underlined word in the Useful Phrases section for Unit Three.

1. _____ means relaxing.
2. To feel uneasy or awkward is to feel _____.
3. If you say someone is _____ you mean that person is a little strange or different.
4. To take care of someone is to _____ someone.
5. A word meaning crazy is _____.
6. _____ means "It looks delicious."
7. Another way to say that you are feeling under the weather or that you aren't feeling good is to say that you are a little _____.
8. The opposite of the verb float is _____.
9. A word meaning entire or complete is _____.
10. If a room is untidy or in complete disarray you can say it is a _____.
11. An expression meaning "That's too bad" is _____.
12. If the bubbles have gone out of a drink like cola or beer, we say that the drink is _____.
13. When a person passes out the person is unconscious. The opposite of unconscious is _____.
14. Another word for throw up is _____. (This is what happens when you are sick and the food in your stomach comes back up your throat.)
15. To walk in shallow water is to _____.
16. If someone walks toward something you can say that person _____ something. (In the movie, Suzie _____ the vending machine.)
17. A light chair with wheels for pushing a baby or toddler around in is called a _____.

V. About You: Discuss the following questions with your partners.

1. What is your favorite sport? What is your second-favorite sport?
2. When you get upset or stressed out about things, what are some things you do to calm down?

3. Marcus's mother is a health nut. Do you try to eat healthy foods every day? What are some of your favorite healthy foods? What are some of your favorite junk foods? [Junk food is food with low nutritional value, usually high in sugar and/or fat.]
4. Have you ever passed out?
5. Do you or anyone in your family cook homemade desserts? What kind? Is there any dessert that you'd like to learn how to make?
6. How often do you buy things from vending machines? What do you buy most often from a vending machine? How are vending machines in Japan different than those in other countries?

VI. Comprehension Questions: Discuss these in pairs if you have extra time.

1. Why does Suzie say, "Oh, what a shame" on page 38?
2. What does Suzie say when she introduces Will and Marcus to each other?
3. Why do you think Marcus sees his mother calling him from across the pond when he's in the park?
4. Suzie says to Marcus on page 48 "Hey, listen. You know this has nothing to do with you, don't you? What, I mean, you're not the reason that she... You're not the reason that she's here." Suzie didn't finish this sentence: "What, I mean, you're not the reason that she..." What was she going to say?
5. What happened on the day that Marcus calls "the dead duck day?" What effect did this day have on Marcus?
6. How does Will react to the day?
7. On page 54 Marcus says, "You need at least three." What can you tell about Marcus from this statement?

VII. Write three of your favorite lines from Unit Three, p. 38-55. If you have time, dictate them to your partner.

VIII. Listen and write the lines your partner dictates to you.

IX. Actions: Units 1-3. One of you is Partner A and the other is Partner B. Take turns reading the sentences below to each other. Your partner will act out the sentence that you read. Choose at random from the list. Do not show your list to your partner. If you don't understand, your partner will demonstrate the action for you.

Actions 1-10 Partner A

1. Pretend to throw something away. (p. 10)
2. Stare at the clock. (p. 12)
3. Hit your desk with your hand. (p. 14)
4. Pretend to tighten your belt. (p. 16)
5. Pretend to sip a drink. (p. 22)
6. Pretend to feed fish in an aquarium. (p. 24)
7. Pretend to reach for something above your head. (p. 26)
8. Pretend to daydream. (p. 26)
9. Gasp. (p. 32)
10. Hand your book to your partner. (p. 38)

Actions 11-20 Partner B

11. Pretend to push a stroller. (p. 40)
12. Pretend to spread a blanket on the grass. (p. 42)
13. Pretend to tear a piece of bread off of a loaf. (p. 42)
14. Give your partner a high five. (p. 44)
15. Wave to someone. (p. 46)
16. Pretend to choke. (p. 46)
17. Pretend to buy something from a vending machine. (p. 48)
18. Pretend to straighten up a room. (p. 50)
19. Pretend to read something and frown. (p. 50)
20. Motion for someone to come over to you. (p. 52)

X. If you have time after you both finish, act out some of the sentences between 1 and 20 in Exercise IX. Your partner will explain what you are doing.

EX: "You're pushing a stroller." Or "You're handing me a book."

UNIT FOUR: COOL UNCLE WILL (PP. 56-77)

I. Useful Phrases

1. The important thing in island living is to be your own activities director. [The important thing is]
2. And I find the key is to think of the day as units of time, each unit consisting of no more than thirty minutes. [EX: The screenplay for *About a Boy* consists of

ten units.]

3. Full hours can be a little bit intimidating, and most activities take about half an hour.
4. It's amazing how the day fills up.
5. How'd you get my number?
6. Suzie said we hit it off.
7. The night you dropped us off. [to drop someone off]
8. The thing is, mate, my life's really kind of hectic just at the moment.
9. Either we'll have to go somewhere cheap or you'll have to treat us. [treat someone to a meal]
10. Fiona laughs at her corny joke, as does Will, out of politeness.
11. I must have been insane.
12. All I wanted was a date with Suzie, and this was my punishment.
13. That's the problem with charity.
14. Like the time I volunteered to help out at a soup kitchen...and very nearly made it.
15. I just didn't decide on the spur of the moment because we'd run out of sausages.
16. I can't stop you from going to McDonald's. I'd just be disappointed if you did.
17. After a few visits, Will seemed to think he had to ask me serious questions.
18. I didn't know why he swore like that, but it made me feel better.
19. It made me feel like I wasn't being pathetic to get so scared.
20. Marcus was clearly really screwed up about it..

II. Write three of your favorite lines from Unit Four.

III. Application of Useful Phrases: Answer the following questions or fill in the blanks using underlined words or expressions for Unit Four. *NOTE: Change "fills up" (Part I #4) to "fill up" and change "The key is..."(Part I #2) to "the key _____ to _____ is..."*.

Answers for 1-9 are in 1-10 of the Useful Phrases section for Unit 4.

1. If you say "We _____" it means that you met someone for the first time and got along well.
2. When you buy someone a meal you _____.
3. The opposite of "to pick someone up" is _____.
4. Airline ticket agent: "Book your ticket early for Memorial Day Weekend. Those

flights _____ quickly.”

5. If something frightens you or makes you feel inadequate you can say that it is _____.
6. The opposite of expensive is _____.
7. “_____ to good health _____ good nutrition” means “the secret to good health is good nutrition.”
8. A _____ day is one filled with continual or frantic activity.
9. A traditional Japanese breakfast _____ fish, rice and miso soup.

Answers for 10-20 below are in 11-20 of the Useful Phrases section for Unit 4.

NOTE: You should change “volunteered” (Part I #14) to “volunteer” in your answer.

10. Will swore when Marcus said the dead duck day still bothered him. How did Marcus say that made him feel? He said, “_____.”
11. A word meaning almost is _____.
12. _____ means upset emotionally over something.
13. The opposite of joking is _____. EX: Are you joking? No, I’m _____.
14. Another way to say, “I reached my destination” or “I achieved my goal” is “I _____.”
15. To do charitable work without pay is to _____.
16. The opposite of rudeness is _____.
17. Obviously means _____.
18. The penalty you are given for doing something wrong is your _____.
19. If something (or someone) lets you down or fails to meet your expectations you are _____ in it (or him or her).
20. If you _____ something (ink in a pen, milk, etc.) you use it all up and it is gone.

IV. Highlight the following 17 words and expressions in the margins of your textbook for this unit, then use the words to complete Part V.

- 1) activities 2) director 3) mobile phone 4) Pardon? 5) (as a) matter of fact 6) -wise
- 7) sec 8) beat around the bush 9) vegetarian 10) Amnesty International 11) thumbs up
- 12) groceries 13) answer the door 14) manage 15) Are you decent? 16) swear
- 17) obscenity 18) deceased

V. Look at the 17 words and expressions in Part IV and find a word with the same meaning in the list below.

1. dead
2. Excuse me, what did you say?
3. cell phone (Am. English)
4. Are you dressed? Can I come in?
5. food you buy at the supermarket
6. cope; get by
7. The truth is.../Actually...
8. a person who doesn't eat meat
9. short for "a second of time"
10. use obscene or offensive language
11. an NGO campaigning for internationally recognized human rights

VI. Dictation

a) Look at page 56 in the book. Dictate the following sections to your partner. When you finish dictating all the lines ask your partner to read them back to you.

_____ in island living _____
_____. And I find _____ to think of the day_
_____, each unit _____ no more than _____.
Full hours can be _____ and most _____ take about _____.
_____; one unit. _____ "Countdown": one unit. _____:
two units. _____; three units.

b) Your partner will dictate the favorite lines he or she wrote for Unit Four Exercise Two. Listen and write them down.

VII. Answer the following questions.

1. According to Will, what is the important thing in island living?
2. What does Will say is the key to being a good activities director?
3. Why doesn't Marcus believe Will when he says his life is kind of hectic now?
4. What are two examples Will gives of his experiences of working as a volunteer?

VIII. Discuss some of your favorite scenes in the movie so far. Say what you like and why you like it.

UNIT FIVE: NEW TRAINERS (PP. 78-91)

I. Useful Phrases

a. Underline or highlight the sentences below in the script.

1. Does this happen often?
2. They give me a hard time about my hair and my clothes and my singing and stuff.
3. I'm not going to do it on purpose, am I? I'm not stupid, you know.
4. My advice is just keep out of people's way, try and make yourself invisible.
5. Marcus raises his voice.
6. There's nothing I can do about it. [=It's out of my control.]
7. I can't make you invisible, but I can make you blend in with the crowd.
8. I don't know how to tie them. [to tie a shoelace]
9. He's pretty trendy, your old man, isn't he?
10. Marcus, what happened to your shoes?
11. They stole them.
12. Where did you get cool new trainers?
13. He's sort of become my friend.
14. Well, fingers crossed, yeah.
15. Then you must have a lot of courage.
16. Hi, sorry, what did you say?
17. Fiona and Will begin to argue.
18. I know the difference between kids who can't settle down and kids who are just plain miserable.
19. Will, you're disturbing the other customers. [disturb = bother, upset]
20. Will apologizes to the staff. [to apologize]

b. Underline or highlight the words and phrases below in the margins of your textbook.

confront; give a hard time; on purpose; trendy; old man; sort of; fingers crossed; disturb; he's none of my business

II. Read the following sections in pairs with your partner.

- a) Read Will and Marcus on p. 78-80.
- b) Read Fiona and Marcus on page 84.
- c) Read page 88 starting from Fiona: "I think you're being a bit melodramatic."
(One of you will read Fiona, Marcus and Christine. The other read Will, the maitre d', and the server.)

III. Read some of your favorite lines in Unit Five to your partner and ask your partner to repeat them without looking at the book.

IV. Application of Useful Phrases: Answer with underlined words in Part I a and b.

1. Another word for things is _____.
2. _____ means intentionally.
3. The past tense of steal is _____.
4. A person who is brave has a lot of _____.
5. To _____ means to tell someone you're sorry.
6. If you make a lot of noise late at night you will _____ your neighbors.
7. _____ means "Pardon me?" but it is used when you are surprised by what the speaker has said.
8. To express disagreement, sometimes angrily, is to _____.
9. A word meaning extremely unhappy is _____.
10. Something that cannot be seen is _____.
11. Another word for fashionable and up-to-date is _____.
12. A person who buys goods or services is a _____.
13. _____ is slang for dad.
14. A word meaning very is _____.
15. _____ means to make a knot or bow with string.

V. Who said this to whom, where?

1. They give me a hard time about my hair and my clothes and my singing and stuff.
2. My advice is just keep out of people's way, try and make yourself invisible.
3. I can't make you invisible, but I can make you blend in with the crowd.
4. He's pretty trendy, your old man, isn't he?

5. Where did you get cool new trainers?
6. She kept repeating the last thing I said, except she shouted it.
7. I was just wondering why a single, childless man would want to hang out with a twelve-year-old boy all day.
8. I think you're being a bit melodramatic. Marcus is just fine.
9. I know the difference between kids who can't settle down and kids who are just plain miserable.
10. You can't shut life out. No man is an island.

VI. Comprehension Questions

1. Why is Will surprised when Marcus calmly makes himself a snack and sits down to watch TV after Will chases the bullies off?
2. Does Marcus sing in class on purpose? Explain.
3. Why does Will want to take Marcus shopping?
4. How does Will feel after buying shoes for Marcus? Why?
5. Why did Marcus shout "Cowabunga!" in the middle of the argument between Will and Fiona?
6. Fiona calls Will a selfish bastard. Who else has called him a bastard in this movie?

VII. About You

1. What is something negative that happens to you often, or that used to happen often? *EX: I often misplace my car keys. / When I was young I often lost things.*
2. When (in what situations) do you raise your voice?
3. Where did you get your dictionary? Do you recommend it? Why or why not?
4. In English we often say, "I have my fingers crossed" to mean "I'm hoping..." What do you say in Japanese in this situation? (Explain in English.)
5. Do you think Marcus is a courageous boy? Why or why not?
6. Do you know the difference between sentences a and b below? Explain what each each one means.
 - a) Here are the boy's books.
 - b) Here are the boys' books.

VIII. Write five true/false statements about Unit Five. Use some of the vocabulary and expressions you learned in this unit in your sentences, and

try to make the problems challenging for your partner.

IX. Your partner will dictate the sentences he or she selected for Part VIII to you. Write them down, then answer true or false.

UNIT SIX: CHRISTMAS (PP. 92-101)

I. Useful Phrases

1. I had to hand it to the kid, he could be enthusiastic about some truly crap presents.
2. That'll come in handy.
3. I'm afraid we haven't got a CD player.
4. I got you one of them as well.
5. Long time no see.
6. That's it. I'm off.
7. Thank you very much. It was great.
8. Suzie has every right to express her anger, Will. [To express your feelings means to say how you feel about something.]
9. Will looks completely humiliated and defeated.
10. All he did was make up a kid for a couple of weeks.
11. So what? Who cares?
12. It's not fair to gang up on him.
13. He's been a lot better behaved since. [to behave well/badly]
14. It's not really a discussion. It's an argument, and you always win.

II. Application of Useful Phrases: Complete the sentences below using underlined words or phrases in the Useful Phrases in Part One of this unit.

1. If you _____ well, you act in a way that people think is correct and proper. EX: The mother told her child to _____ himself at the restaurant.
2. If your dignity or pride has been damaged in public you feel _____.
EX: The politician felt _____ when his lies became public knowledge .
3. A phrase meaning "I had a good time" or "I enjoyed it" is _____.
EX: How was the movie? _____.
4. _____ to break the rules when you are playing a game.
ALSO: _____ to show bias toward one person over another.

5. The phrase “ _____ someone” is used when two or more people join together to criticize someone or to fight against them.
EX: Marcus doesn't think the Fiona and Suzie should _____ Will about his having invented Ned.
6. When two or more people talk about a subject together they are having _____.
7. _____ is a disagreement in which people express different opinions, often angrily.
8. Fiona thinks that Suzie _____ to tell Will how angry she is about being lied to by him.
9. A phrase meaning also or too is _____.
EX: A) I'm going to my teacher's exhibition in Kyoto tomorrow. B) I'm going _____.
10. Another way to say, “That's not important” is _____ or _____. However, these expressions are a little rude. “That's not important” is a more polite way of saying the same thing.
11. If Team A beats Team B in a game, you can say that Team B was _____ by Team B. The team that loses a game is the team that has been _____.
12. Another way to say “I'm going now” or “I'm leaving now” is _____.
13. When you see someone for the first time in a long time you can say _____.
14. Another way to say “I'm sorry to say…” is _____.
EX: _____ I can't come to your party tonight. I have to work.
15. To invent a story that is not real is to _____ a story.
16. If you are _____ about something you show how much you like it or enjoy it by the way you behave and talk.
EX: Marcus was _____ about the gifts he was opening.
17. Another way to say “I had to give the child credit” or “I was impressed by the child's actions” is “ _____ him.”

III. Feelings: Discuss the emotions the characters display in Unit Six in reaction to the other characters. Try to use some of the words in the Useful Phrases list above in your answers.

1. How does everyone react when Fiona tells Marcus that his singing brings sunshine and happiness into her heart? They feel embarrassed and

uncomfortable, because Fiona is so open in front of them with her feelings toward Marcus.

2. What is Will's reaction when he sees that his gift from Marcus is *The Single Parent's Handbook*?
3. How does Will seem to feel when he first sees Suzie at Fiona's?
4. How does Suzie feel when she first sees Will at Fiona's place?
5. How do you think Will feels when Suzie asks him if he's been impersonating Santas at the mall?
6. How does Will react to Suzie's sarcastic comments?
7. How does Fiona defend Suzie when Marcus says it's not fair for Suzie and Fiona to gang up on Will?
8. How does Marcus defend Will for lying to Suzie and his mother?
9. How do Suzie and Fiona react when Will mentions how he and Marcus became friends?
10. How does Will feel at Christmas dinner? How is this different from his past Christmas's?

UNITS ONE -SIX: REVIEW

Actions: Take turns reading the sentences below to each other. One of you has 1-16 and the other has 17-32. Your partner will act out the sentence that you read. Choose at random from the list. Do not show your lines to your partner. If your partner does not understand, demonstrate the action, then give the command again later.

Partner A

1. Pretend to throw something away. (p. 10)
2. Stare at the clock. (p. 12)
3. Hit your desk with your hand. (p. 14)
4. Pretend to tighten a necktie. (p. 16)
5. Pretend to sip a drink. (p. 22)
6. Pretend to feed fish in an aquarium. (p. 24)
7. Pretend to reach for something above your head. (p. 26)
8. Pretend to daydream. (p. 26)
9. Gasp. (p. 32)
10. Hand your book to your partner. (p. 38)
11. Pretend to play pool. (p. 56)

12. Pretend to hang up a phone. (p. 60)
13. Pretend to ring a doorbell. (p. 66)
14. Pretend to shake hands with someone. (p. 70)
15. Cross your fingers. (p. 86)
16. Pretend to apologize to your boss for being late. (p. 90)

Partner B

17. Pretend to push a stroller. (p. 40)
18. Pretend to spread a blanket on the grass. (p. 42)
19. Pretend to tear a piece of bread off of a loaf. (p. 42)
20. Give your partner a high five. (p. 44)
21. Wave to someone. (p. 46)
22. Pretend to choke. (p. 46)
23. Pretend to buy something from a vending machine. (p. 48)
24. Pretend to straighten up a room. (p. 50)
25. Pretend to read something and frown. (p. 50)
26. Motion for someone to come over to you. (p. 52)
27. Pretend to answer a phone.
28. Give your partner a thumbs up. (p. 64)
29. Pretend to answer the door. (p. 66)
30. Pretend to tie a shoelace. (p. 82)
31. Pretend to take a customer's order at a restaurant. (p. 86)
32. Pretend to unwrap a present. (p. 94)

II. Now look at all of the lines in 1-32. Take turns choosing something to act out. Your partner will say what you are doing. EX: "You are pushing a stroller." Or "You are handing me a book." The person answering should not read from the paper.

III. If you have extra time, talk about the scenes that you like most in Unit Six and why.

UNIT SEVEN: RACHEL (PP. 102-119)

I. Useful Phrases

1. Marcus got a crush on a girl. [to have a crush on someone]

2. And then, even stranger, so did I.
3. It was torture.
4. SPAT was for fun. This was serious.
5. I acted in self-defense.
6. I'm really interested in this woman.
7. What do you mean, "interested"?
8. I want to go out with her, OK?
9. Why didn't you just say that?
10. I was embarrassed or something, because this is a bit new to me.
11. How do I look?
12. Be as normal as you can, OK?
13. Good advice for Marcus, and I wish I could have followed it. [to follow someone's advice = to take someone's advice]
14. Rachel tidies up her flat. [to tidy up a room = to straighten up a room]
15. I'm sorry it's such a mess around here.
16. You could show him your new computer games. [to show someone something]
17. I'm not really sure it's up to me. [It's up to you, = You can decide. / You can choose.]
18. I was beginning to get the feeling that maybe this kid, Ali, was a serial killer. [I have a feeling that...]
19. Marcus goes over to Ali's computer, trying to change the subject.
20. Ali throws a temper tantrum.
21. I think it's sweet how much he seems to take after you and the way he dresses like you, as well. [If you take after someone you look and/or act like they do.]
22. Ali didn't get along with the last bloke I went out with.

II. About you

1. If you were looking after a 12-year-old boy in your home or apartment for the afternoon, what would you show him?
2. Who do you get along with best among your relatives? What do you like about that person? (More than one person is also OK.) ["Your relatives" usually refers to aunts, uncles and cousins.]
3. What was torture for you in high school? [EX: In PE class baseball was torture for me because I was afraid of the ball.]
4. Who do you take after in your family, and in what way? EX: I am good at art like my mother, and I look a lot like my father.

5. Did you ever have a crush on someone when you were in elementary school or high school? Did you ever tell the person? EX: The little boy had a crush on his kindergarten teacher.

III. Application of Useful Phrases

1. If you do something to protect yourself from harm, you are doing it in _____.
2. _____ is mental or physical pain or anguish.
3. _____ means painfully self-conscious, ashamed or humiliated.
4. When you don't understand what someone is trying to say you can say _____
5. _____ a room means to straighten it up.
6. _____ someone means to go on a date.
7. A person who murders a number of people over a period of time, usually using the same method, is _____.
8. If you like someone and want to get to be their boyfriend/girlfriend you are _____ that person.
9. _____ to decide what you'll do after you graduate from college.
10. The opposite of strange or different is _____.
11. When you want to ask someone's opinion about your physical appearance, usually before going out somewhere or before meeting someone you want to impress, you say _____

IV. Comprehension Questions

1. For Will, what was the difference between wanting to date Suzie and wanting to date Rachel?
2. Why does Rachel assume that Will has a son? Why doesn't Will correct her assumption?
3. What advice does Will give Marcus before they ring Rachel's doorbell?
4. Why does Marcus try to change the subject when he's talking to Ali?
5. Why was Ali so hostile and rude to Marcus?
6. Why do you think Will disagrees when Rachel says, "I think it's sweet how much he seems to take after you and the way he dresses like you, as well."

UNIT EIGHT: HONESTY (PP. 120-131)

I. Useful Phrases

1. You made me feel like a celebrity.
2. At least I'm honest.
3. Was I turning into Marcus? [to turn into = to become]
4. So I took his advice and told Rachel the truth. [to take someone's advice]
5. It must look very confusing from the outside.
6. It's just one of those long, boring stories.
7. Tell me about your relationship with Ali. Is it as complicated as mine with Marcus?
8. Pretty straightforward.
9. I envy you that.
10. You are Marcus's stepfather, but you don't live with him or with his mother.
11. The first time I met you I thought you were a bit...blank. But then you changed my mind.
12. Some of the kids who used to tease Marcus now tell him good-bye.
13. Marcus walks down the hallway and stops to look at a bulletin board which has a notice for a school concert.
14. Then I realized there was something she said I could do for her. [realize = understand; be aware; know]
15. You come here uninvited. You disrupt my life. You screw things up.
16. You don't care about anyone, and nobody cares about you.
17. Marcus signs up for the school concert. [to sign up for]
18. Marcus hands a crying Fiona a flier for the school concert.

II. Application of Useful Phrases

1. Something that is puzzling or unclear and difficult to understand is _____.
[EX: Sometimes manuals for machines can be very _____.]
2. A person who always tells the truth is an _____ person.
3. When a man marries a woman with children, the man is called the children's _____.
4. The opposite of interesting is _____.
5. A _____ is a sign in a public place with information, instructions, or a warning.

6. A _____ is a board that notices are pinned to.
7. The _____ that Marcus hands to his mother is about the concert that Marcus has signed up to sing in.
8. *Situation: A student without a dictionary, talking to the teacher at the beginning of the semester:*
I'm sorry, but I didn't bring a dictionary. I didn't _____ that we had to have one for this class.
9. _____ means empty or void.
10. _____ means to disturb or bother.
11. An _____ guest is someone who shows up at a party without being asked.
12. An issue that is clear and uncomplicated is _____.
13. If you wish you had something that your friend has and you don't, you can say _____ to your friend.
14. Something you did in the past but don't do now is something that you _____ do. EXAMPLE: When I was a junior high school student I _____ do club activities every day after school.
15. The opposite of simple or straightforward is _____.
16. A one-page simple notice used to advertise a special event etc. is a _____.

III. Comprehension Questions

1. What does Will mean when he says, "It looks a little more like owner and pet than boyfriend and girlfriend" to Marcus?
2. Why did Will ask himself if he was turning into Marcus?
3. What did Marcus sign up for? Why?
4. Why wouldn't Ellie accompany Marcus in the concert?
5. What was in the flier that Marcus handed to his mother when she was crying?
6. What do you think of Marcus's plan to sing in the concert?
7. Why are the boys who used to tease Marcus nice to him now?

IV. About You

1. Make a sentence using "make (someone) feel _____."
EX: The medicine I was taking for my cold made me feel sleepy.
The smell of French fries at McDonalds makes me feel nauseous.
The intimidating words of his teacher made him feel very small.
2. What is an example of something that you have signed up for in the past few years?

EX: I signed up to help with the university festival last year.

3. When you ask your parents or friends for advice, do you usually take the advice they give you? Give an example of a time that you did or didn't take their advice after you asked for it.

4. Who is a person you know personally who you do or don't envy? Explain why.

EX: I envy my friend John because he is so good at using computers. OR I don't envy my friend Jennifer because her life is a mess.

V. What is your favorite scene in this unit? What are some of your favorite lines?

UNIT NINE: SOMETHING FOR MUM (PP. 132-149)

I. Useful Phrases

1. The fact was, there was only one thing that meant something to me. Marcus. He was the only thing that meant something to me. And Fiona was the only thing that meant something to him. [to mean something to someone = to be important to someone]
2. And she was about to fall off the edge.
3. (He) doesn't exist. I made him up. [to make someone (or something) up]
4. Please don't try to commit suicide again. [commit = do something wrong or illegal; commit a crime; commit murder]
5. Will, you know I'm not attracted to you, right?
6. Let's get that fixed. [to get something fixed]
7. I've got a feeling I'd be useless.
8. He's really excited.
9. He's not expressing himself. He's expressing you.
10. I haven't been noticing properly. [to notice = to see; to realize]
11. He's got a special soul and I've wounded it. [to wound]
12. Everything's under control.
13. I heard you were about to commit social suicide so I thought I'd just drop by.
14. My mum wants me to sing.
15. The crowd boos.
16. They finish singing and Marcus takes a bow.
17. This was definitely not island living.
18. Will finishes his song and the entire audience laughs at him.
19. Marcus, thank you for the song. You were terrific.

20. I think we should celebrate.

II. Application of Useful Phrases: Complete the sentences below using underlined words from the Useful Phrases section above.

1. When you know something through intuition you say, “_____”.
2. When an audience is not happy with the performance of an entertainer, the audience _____ the performer.
3. If you are interested in someone and want to date that person you can say that you are _____ that person.
4. _____ someone is to cause that person injury, either physically or mentally.
5. If you do something on purpose that will result in ruining your reputation among your friends or in society that is called committing _____.
6. _____ means to create a person or story from your imagination.
7. If you say that a situation is _____ it means that there are no problems and there is nothing to worry about.
8. _____ means happy and enthusiastic about something good that is happening or that is about to happen. EX: The children were too _____ to sleep the day before their first camping trip.
9. _____ means wonderful, fabulous, or fantastic.
10. To _____ is to casually go to visit a friend at their house. Often the visit is not planned ahead.
11. _____ means to be aware of it. EX: Marcus’s mother didn’t _____ that Marcus was having trouble at school until Will told her.
12. To _____ means “to be” or “to be alive.” EX: Ned only _____ed in Will’s mind.
13. The people listening to a concert or performance are the _____.
14. A performer usually _____ at the end of a performance.
15. A word meaning absolutely or without a doubt is _____.
16. _____ means of no help at all.
17. _____ means to have it repaired.

III. Comprehension Questions

1. What does Will mean when he says that Fiona was about to fall off the edge?
2. Why does Fiona say, “Will, you know I’m not attracted to you, right?”

3. Why does Will say, "Oh please, just shut up. You're wounding my soul!" to Fiona?
4. Using a form of the expression in Useful Phrases #14, list some things that Fiona does and doesn't want Marcus to do. [Hints: She tells Marcus to think for himself. She tells Marcus that it makes her happy to hear him sing. She raises Marcus as a vegetarian.]
 - a. Fiona wants him to _____
 - b. She _____
 - c. _____
5. What are some of the things that the people in the audience do when Will keeps on singing after Marcus finishes?
6. Why does Fiona say, "I think we should celebrate?" to Marcus?
7. What does Fiona suggest they do to celebrate?
8. In this unit, Will expresses his love for Marcus by trying to help him. What are some things that he does for Marcus?

IV. About You

If you have extra time, discuss these questions with your partner. You do not have to write the answers.

- Did you do anything special to celebrate your birthday last year? Is there anything special you'd like to do to celebrate your birthday this year?
- Have you ever performed in front of an audience? If so, what did you do, and were you nervous beforehand? Do you mind getting up on stage before an audience to perform?
- What is your favorite scene in this unit? What are your favorite lines?

V. Choose the appropriate ending from Part B to complete the sentences below. Then number the events in the order that they happened.

Part A

- ___ The audience begins to boo _____
- ___ Will goes backstage before Marcus's act begins _____

- ___ When a woman at SPAT asks about Ned _____
- ___ Will goes out looking for Fiona _____
- ___ Marcus takes a bow when he finishes his song _____
- ___ When Will asks Fiona not to try to commit suicide again _____
- ___ Fiona suggests they go to McDonalds to celebrate _____
- ___ Ellie hits her friend on the back of his head _____
- ___ When Will enters the auditorium _____
- ___ Fiona parks Will's car _____

Part B

on their way home from the concert.
 Ali is performing on stage.
 and tries to talk him out of performing.
 because he realizes that she may be about to fall off the edge.
 all of her SPAT friends look shocked.
 while Will runs off to find Marcus.
 because Will won't stop singing.
 Will says he made him up.
 but Will keeps on playing.
 when he begins heckling Marcus while he's singing with Will.

VI. Speaking Practice: After putting the sentence in Part V above in order, work with a partner. One of you will look at Part A. The other will look at Part B. The student looking at Part A will read the first half of the sentences. The student with Part B will repeat, without looking at Part A, and choose the appropriate ending from Part B. Take turns reading Part A and B.

UNIT TEN: NO MAN IS AN ISLAND (PP. 150-153)

I. Useful Phrases

1. By the following Christmas, things were back to normal.
2. (Are you) serious?
3. Yeah, but that was when she was depressed and I was desperate.
4. Thanks, mate. Cheers.
5. How do you use this blender thing?

6. Ellie gets plates and silverware ready for dinner.
7. Ellie pulls Ali off of the couch.
8. How do you know Will?
9. Are you insane?
10. I'd created a monster. [to create]

II. Comprehension Questions

1. How does Will know Tom?
2. Why did Will invite Tom to Christmas lunch?
3. How has Marcus's life changed between the beginning of the movie and the end?
4. What changes do you see in Will between the beginning and the end of the movie?
5. Marcus says, "All I meant was I don't think couples are the future. You need more than that. You need backup." What does Marcus mean when he says "backup?"

III. Complete the sentences with the appropriate names.

1. _____ asks _____ if he is going to marry his mother.
2. _____ tells _____ that he had once wanted _____ to marry his mother.
3. _____ invited _____ to Christmas lunch so he could meet _____.
4. _____ makes _____ help get Christmas dinner ready.
5. _____ tells _____ that he thinks he and Rachel might have a future together.

UNITS 1-10: Comprehensive Review Activities

- I. **Memorable Characters:** Think of two or three other characters who impressed you, either negatively or positively, in this story. Explain and discuss your impressions in your groups.
- II. **Favorite Scenes:** What are one or two of your favorite scenes in this movie? In your groups, describe those scenes and explain why you liked them.

III. Favorite Lines: What are some of your favorite lines in this movie? Read some of them to your group. For each line or set of lines explain who is talking to whom and in what situation. Then read the lines again and ask the others in your group to repeat them after you without looking at their books.

References for *About a Boy*

- Casanave, C.P. (1995). Copyright law and video in the classroom. In Casanave, C.P. and J. D. Simons (Eds.), Pedagogical perspectives on using films in foreign Language classes. In Keio University SFC Monograph #4, 78-90. Fujisawa, Japan: Keio University SFC.
- Helgesen, M. (1993). Dismantling the Wall of Silence, in Wadden (Ed.).
- Krashen, S. and T. Terrell (1983). *The Natural Approach*. London: Prentice Hall.
- Miyake, C. (1999). Movies in English-Language Teaching: Building an English Language Course around a Feature-Length Film Part One. In Seian Zokei Daigaku Kenkyu Kiyo (The Bulletin of Seian University of Art and Design) Vol. 6, 43-55. Otsu, Japan: Seian University of Art and Design.
- Miyake, C. (2010). "Building an EFL Course around a Feature-Length Film: Exercises to Accompany *Back to the Future* and Its Screenplay" in Seian Zokei Daigaku Kiyo Dai Ichi Go (Journal of Seian University of Art and Design) No. 1, 43-69. Otsu, Japan: Seian University of Art and Design.
- Miyake, C. (2012). Video-Based Language Learning: A Communicative Activity for Teaching Target Vocabulary from a Film. In Seian Zokei Daigaku Kiyo Dai San Go (Journal of Seian University of Art and Design) No. 3, 77-94. Otsu, Japan: Seian University of Art and Design.
- Miyake, C. (2013). Video-Based Language Learning II: Communicative Activities to Accompany the Oxford Video Adaptations of Nick Park's Wallace and Gromit Films. In Seian Zokei Daigaku Kiyo Dai Yon Go (Journal of Seian University of Art and Design) No. 4, 102-120. Otsu, Japan: Seian University of Art and Design.
- Miyake, C. (2014). Video-Based Language Learning III: Communicative Review Activities to Accompany the Oxford Video Adaptations of Nick Park's Wallace and Gromit Films. In Seian Zokei Daigaku Kiyo Dai Go Go (Journal of Seian University of Art and Design) No. 5, 83-106. Otsu, Japan: Seian University of Art and Design.
- Miyake, C. (2015). "Building an EFL Course around a Feature-Length Film: Exercises to Accompany *Die Hard* and Its Screenplay" in Seian Zokei Daigaku Kiyo Dai Roku Go (Journal of Seian University of Art and Design) No. 6, 47-77. Otsu, Japan: Seian University of Art and Design.
- Miyake, C. (2016). "Building an EFL Course around a Feature-Length Film: Exercises to Accompany *Cinderella Man* and Its Screenplay" in Seian Zokei Daigaku Kiyo Dai Nana Go (Journal of Seian University of Art and Design) No. 7, 3-36. Otsu, Japan: Seian University of Art and Design.
- Miyake, C. (2017). "Building an EFL Course around a Feature-Length Film: Exercises to Accompany Erin Brockovich and Its Screenplay" in Seian Zokei Daigaku Kiyo Dai Hachi Go (Journal of Seian University of Art and Design) No. 8, 93-128. Otsu, Japan: Seian University of Art and Design.
- Miyake, C. (2018). "Building an EFL Course around a Feature-Length Film: Exercises to Accompany *Catch Me If You Can* and Its Screenplay" in Seian Zokei Daigaku Kiyo Dai Kyu Go (Journal of Seian University of Art and Design) No. 9, 47-90. Otsu, Japan: Seian University of Art and Design.
- Nunan, D. (1989). *Designing Tasks for the Communicative Classroom*. Cambridge: Cambridge Uni-

- iversity Press.
- Screenplay Corporation (2003). *About a Boy*. Nagoya, Japan: Screenplay Corporation.
- Sherman, J. (2003). *Using Authentic Video in the Language Classroom*. New York: Cambridge University Press
- Swan, M. (1980). *Practical English Usage*. Oxford: Oxford University Press.
- Tomlinson, B. (1998). *Materials Development in Language Teaching*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Wadden, P. (Ed.), (1993). *A Handbook for Teaching English at Japanese Colleges and Universities*. Oxford: Oxford University Press.

企画展示「きらめきの結晶体／紡がれる物語」報告
—版画技法“石膏刷り”を使用した出品作品解説をふまえて—

A Report on a Series of Exhibitions, “Shining Crystals /
Spinning Tales”: Regarding the Comments on Exhibition Works
Made Using the Printmaking Technique “Plaster Printing”

石井 誠

Makoto ISHII

企画展示「きらめきの結晶体／紡がれる物語」報告

一版画技法“石膏刷り”を使用した出品作品解説をふまえて一

A Report on a Series of Exhibitions, “Shining Crystals / Spinning Tales”: Regarding the Comments on Exhibition Works Made Using the Printmaking Technique “Plaster Printing”

石井 誠

Makoto ISHII

助手（総合領域：版画・展示計画）

This paper is a report on a series of exhibitions titled “Shining Crystals / Spinning Tales” held from June 3, 2018 to March 24, 2019. Here I will report on the plan, exhibiting process and management of the exhibitions. In the latter half of this paper I will explain the printmaking technique known as “plaster printing”, which I have applied to my works since 2015 to nowadays.

1. はじめに

昨今、多くの作家や企画者によって、実験的な自主企画展が開催されている。その背景には保守的、あるいは商業的な側面ばかりが取り上げられやすい時代性への問いかけがある。かつての先達もその問いや意思表示を通してムーブメントを築き上げてきた。本稿はそれらをふまえ、「結晶体」、「物語」というキーワードを通して、「展覧会を開催する意義」という根本的なテーマについての再考を目的とし、2018年6月3日より2019年3月24日の会期にて開催した巡回企画展「きらめきの結晶体／紡がれる物語」の企画、出品、運営を行った記録報告である〔註1〕。後半では私の制作主題、作品テーマと表現をふまえ、本展にも出品した2015年から個展などで発表している版画技法「石膏刷り」について解説する〔註2〕。

2. 展覧会「きらめきの結晶体／紡がれる物語」について

本展覧会は、石井誠（1986～ 北海道出身、滋賀在住、主に北海道と京都で活動）、寺脇扶美（1980～ 愛知出身、愛知在住、主に京都と愛知で活動）、福田真知（1983～ 岐阜出身、滋賀在住、主に京都で活動）の3名による自主企画展示である。それぞれにゆかりのある「滋賀」「北海道」「愛知」「京都」の4つの場所を巡回しながらも、出品作品を変化させていく形式をとっている。これは単純な巡回展ではなく、各作家の出品作品と様々な出会いによる発見を「きらめき」と捉え、その結果生まれた作品を「結晶体」に見立て、その過程を「紡がれる物語」として示すということを展覧会の主軸としているためである。また、以上の趣旨から作品サイズは、トランクケースに収まることを条件とし、

各会場では様々な想いの詰まったケースの中身が上げられるというコンセプトでの展示とした。

巡回する展覧会をひとつの物語として、鑑賞者に意識させるため、平田剛志（1979～美術批評家、元京都国立近代美術館研究補佐、元カロンズネット編集長）にテキスト執筆を依頼し会場ごとに掲示することや、展覧会関連イベントへ、鉱物やアーカイブの研究者等の〔註3〕コンセプトに則したゲストを招聘するなど、企画・運営にあたり様々なアーティスト主体による企画展示の記録や文献を参考に、従来にはない展覧会の企画、構成のあり方を試みた。

3. 展覧会会場について

各作家がそれぞれのゆかりのある土地を担当として、会場やトークゲストへの交渉を行った。私は北海道会場を担当し、「TO OV cafe/gallery」に企画展示の交渉を行った〔註4〕。なお、当初、北海道会場からのスタートを予定していたが、成安造形大学内の【キャンパスが美術館】ライトギャラリーの使用が認められたため、滋賀会場をはじめの会場として設定し、展示を開催した。

4. 展覧会広報について

本展示の広報媒体には案内状としてのフライヤーのほかにWEBサイトやSNSにて紹介ページを作成し、告知を行った。また、全ての巡回が終了したのち、記録冊子の発行を予定している。それらを含めた展覧会のトータルデザインは成安造形大学メディアデザイン領域（現：情報デザイン領域）卒業生でもあるデザイナーの塩谷啓悟に依頼した。私は塩谷氏とのデザインに関するディレクションを担当し、展覧会コンセプトより「結晶体」と「物語」を取り上げた方向でのデザイン作成依頼に至った。展覧会会場ごとにゆかりのある作家を強調させるデザインとして、ベースである図版の無いテキストのみのモノクロのフライヤーに対して、各会場情報、前の展示場所での展示風景などを記載したカラーの帯が巻かれるデザインとなっている〈図1〉。

フライヤーに関心をもって遠方より訪れた来場者も多く、特に展覧会のコンセプトまで反映したフライヤーの少ない北海道会場や、通常ギャラリーとして頻繁には展示を開催していない愛知会場〔註5〕ではその効果がおおいに感じられた。

WEBサイトとSNSに関しては出品作家で分担して作成を行い、定期的なコンテンツの追加や更新を行った。全ての会場でそれぞれがアーティストでもある澤田華、山岸せいじ、麥生田兵吾による記録写真の他、出品作家である福田真知による会場ごとの情感のある映像は短編ながらもSNS等で多くの反応があり〔註6〕、展覧会の告知方法について今回反響のあった映像による告知手法などを今後の活動にも使用していきたい。



図1 《展覧会フライヤー》デザイン：塩谷啓悟

5. 滋賀会場について

2018年6月3日より最初の会場である成安造形大学【キャンパスが美術館】ライトギャラリーでは、3日が大学のオープンキャンパス日であったこともあり、初日より72名以上の来場が確認され、最終的に183名の来場が確認された。私は「信仰」「技術」をテーマとした下記4点で構成した<図2>。



図2 《滋賀会場：成安造形大学【キャンパスが美術館】ライトギャラリー》2018, 撮影者：澤田華

1. 《Movie quotes》石膏刷り・シルクスクリーン・顔料・染料, 70×88cm, 2018
2. 《Ark》石膏刷り・シルクスクリーン・顔料・染料, 45×60×10cm, 2018
3. 《…of Theseus》石膏刷り・染料, 30×22.5×3cm, 2018
4. 《proving ground》石膏刷り・染料, サイズ可変, 2018

また、会期中は成安造形大学美術領域非常勤講師、岡本光博よりの提案により、岡本氏の授業の一環として、トークイベントを開催し、美術領域現代アートコース学生（出席者、3年生、7名）の質問を起点に、岡本氏より今後の展示への様々な助言をいただいた。

6. 北海道会場について

2018年8月17日からは2番目の会場である TO OV cafe/gallery にて展示を開催した。通常時はカフェとしても運営している場所のため、来場は途切れなく122名の芳名記入があり、それ以上の来場があった。巡回作品である「Ark」のほか、下記5点で構成した<図3>。



図3 《北海道会場：TO OV cafe/gallery》2018，撮影者：山岸せいじ

1. 《Nameless Landscape NORTH》石膏刷り・シルクスクリーン・染料，30×25.5×8cm，2018
2. 《Ark》石膏刷り・シルクスクリーン・顔料・染料，45×60×10cm，2018
3. 《…of Theseus》石膏刷り・染料，30×22.5×3cm，2018
4. 《Nameless Landscape》石膏刷り・染料，25×21×5cm，2018
5. 《Monolith》石膏刷り・染料，5×5×5cm，2018

7. 愛知会場について

2018年11月9日より愛知会場、AHA ギャラリーにて展示を開催した。前述のとおり通常時はギャラリーとは使用していない場所であったが、51名の来場があった。巡回作品「Ark」のほか、下記6点で構成した<図4>。

1. 《Proving ground》石膏刷り・染料，10×10.5cm，2018
2. 《Ark》石膏刷り・シルクスクリーン・顔料・染料，45×60×10cm，2018



図4 《愛知会場：AHA ギャラリー》2018, 撮影者：澤田華

3. 《inside out》シルクスクリーン, 32×24cm, 2018
4. 《Nameless Landscape》石膏刷り・染料, 25×21×5cm, 2018
5. 《Monolith》石膏刷り・染料, 5×5×5cm, 2018
6. 《Jacobs's capsules》石膏刷り・染料, 25×21×5cm, 2018

展示会場では2回のトークイベントを行った。なお、2回目のトークイベント終了後は会場にてクローゼイングイベントにて装飾、調理を担当した。会場の愛知県の成り立ちや、名古屋についてのリサーチを行い、それらにちなんだ愛知の食材を使用した料理を振る舞った。

8. 出品作品テーマおよび、版画技法「石膏刷り」の解説

私は幼少期を北海道の山奥で山岳信仰をもつ祖父宅で過ごし^{〔註7〕}、そこでの実体験から民間信仰やアニミズムに関心を持つに至った。また、京都精華大学大学院を修了後は京都に居住し、寺社仏閣の保管する様々な遺物の保存・修復・展示業務に携わった経験から^{〔註8〕}、信仰の対象としての「もの」が、長い年月を経て、価値や意味が変化していくプロセスや、「アーキタイプ (archetype)」^{〔註9〕}と呼ばれる人種や土地に由来しない共通の象徴的イメージへの関心をもつに至った。

本展出品作は、展示コンセプトをふまえ、幼少期に自身も思い入れのある車やルービックキューブなどのおもちゃを模した作品「Monoliths」や、旅のイメージを想起させるトランクを模した作品「Ark」を展示した。出品作のうち「Movie quotes」<図5>は、映画「第三の男」と「ハート・ロッカー」における共に主人公格の人物による言葉を、石膏刷りとシルクスクリーン版画技法を用いて制作した作品であり、自身の制作に関する意識、考え方の指針となっている。作品は言葉の記載されたノートを模した立体作品と、それぞれの言葉から想起されるイメージをそれぞれ表した平面



図5 《Movie quotes》石膏刷り・シルクスクリーン・顔料・染料, 70×88cm, 2018,
「きらめきの結晶体／紡がれる物語」滋賀会場, 撮影者：澤田華

作品の合計3点により構成されている。下記に英文と、筆者による日本語意識を記載する。

“You know what the fellow said—in Italy, for thirty years under the Borgias, they had warfare, terror, murder and bloodshed, but they produced Michelangelo, Leonardo da Vinci and the Renaissance. In Switzerland, they had brotherly love, they had five hundred years of democracy and peace—and what did that produce? The cuckoo clock.” *The Third Man* (1949)

「だれかがこんなこと言っていた。イタリアではボルジア家30年間の圧政下は戦火・恐怖・殺人・流血の時代だったが、ミケランジェロやダ・ヴィンチの偉大なルネサンスを誕生させた。

片やスイスはどうか？ 麗しい友愛精神の下、500年にわたる民主主義と平和が産み出したものは何だと思う？ 鳩時計だ」キャロル・リード (Sir Carol Reed, 1906年 -1976年) 「第三の男」(1949年)

幸福で平穏な環境では革新的な作品は生まれないという皮肉であるが、事実、ソ連時代のロシア美術など、ある圧政・弾圧下には革新的な発展が見られ、現代においても多くの問題を抱える環境で様々なムーブメントが生み出される。だが果たして「民主主義と平和が生み出した」とされる「鳩時計」もただの工芸品としての意味しかもたないものであるのだろうか、という問いから不穏なイメージの鳩時計をモチーフに描いている。

“Once you get older, some of the things that you love might not seem so special anymore. Like your Jack In The Box, maybe you realize it’s just a piece of tin and a stuffed animal, and then you forget the few things you really love” 「The Hurt Locker」 (2008)

「年をとってしまくと、好きだったものも、以前のような特別なものじゃなくなってしまいます。この“びっくり箱”だってそうさ、いつかブリキとぬいぐるみでしかないことに気づいてしまうんだ。すると、君は本当に自分が好きだったものさえ忘れてしまうのさ。」ハート・ロッカー (2008年) キャスリン・ビッグロー (Kathryn Ann Bigelow, 1951年～)

この言葉から意を得て、自身のありかたによって事物の見え方は決定されていく、という考えをもつに至り、幼少期に思い入れのあったおもちゃなどを模した作品を制作するようになった。なお、描いているモチーフは、現在も中東で使用されている旧式の対人地雷である。

次に、自身の作品解説にあたり本展覧会でも主な出品作とした、石膏を使用した版画「石膏刷り」について記述する。石膏刷りは主に銅版画技法であるエッチングやドライポイントなどの凹版〔註10〕を紙に刷る以外の版画制作方法として、19世紀にララーヌ (Maxime Francois Antoine Lalanne 1827-86) のエッチングに関する論文の中に掲載されているが、のちにパリにて「アトリエ17」という銅版画の研究工房を設立した研究者ヘイター (Stanley William Hayter 1910-1988) の著書「New ways of gravure」(1948年)において詳細な制作方法が記述されている。石膏を使用する版画はインクの粘度や版面のインクの拭き取りが紙とプレス機による一般的な凹版の制作とは異なる。具体的にはインクへ混ぜるアマニ油などの油分を多めにし、版面の描画部分以外の拭き取りも多少油膜が残る程度に行う。これは石膏と版を剥離させる効果をもたせるためである。使用する石膏は塑像等に使用する石膏でも制作可能であるが、収縮が少なく、硬化時間の早い歯科用の硬石膏の使用が望ましい。硬化速度に比例して、版面からのインクを含めた油分、粒子の吸着が起こるためである。

私は石膏刷りをベースとしながらも、これまでに学んできた染織分野や、その分野を発祥とするシルクスクリーン版画技法を併用し、サイズによって多少の変化はあるが、基本的には下記の手順にて制作を行っている。

- 1：金属板（銅板またはアルミ板）へのエッチングまたはドライポイントによる描画
- 2：石膏刷りによる刷り
- 3：石膏が硬化するまでに染料または顔料による着彩
- 4：シルクスクリーンによる刷り

5：サンドペーパーなどによる研磨

6：染料または顔料による着色（必要に応じて4-6を繰り返す）

7：完全硬化後（約1週間後）にメディウム、ニスによる画面保護を兼ねた皮膜の作成

以前は防水加工された紙を支持体として、厚く載せたインク研磨することで作品を制作していたが、石膏刷りによる制作を用いることで、支持体でありながらも、研磨に耐えうる強固な描画面を生かし、物質性を強く感じさせるマチエールの表現を行い、石膏の特性である水分や粒子の吸着効果を利用した擬似的なフレスコ画の作成を試みている。版による複数の作品作成は可能であるが、複数の技法の混合と手彩を使用するなど、版画における複数性は求めておらず、80年代より関西で主に用いられてきた「版表現」による制作を行っているという認識を持って制作を行っている。また、「知や情報を伝える本や他のメディアを介した革新的な伝達ツール」としての版画の可能性について視野を広げ、制作を通して「ことば」を伝えるものとしての版画についても探求していきたい。

9. おわりに・今後の計画について

本稿は京都会場開催を控えた中間報告ではあるが、私がこれまで参加して来た染色や版画による作品が出品の大半であるグループ展とは大きく異なる形態の展示であり、また、多くの研究者とのトークイベントでは、芸術、美術分野と他分野の関係性の広さ、深さについて知見を得ることができた。そして、改めて自身が専攻する「版」を使用する美術の横断性、他分野との親和性を再発見する機会が多くあった。

また、展示開催にあたり、会期中も「なぜ展示を行うのか」「誰のための展示か」「来場者と制作者の関係性」といったテーマを設け、ゲストやデザイナーも交え、出品者たちでそれぞれ資料を持ち合って話し合い、展示内容やイベントについての審議を行った。その際に自身が参照した資料のうち、特に印象に残った美術館あるいは作家による企画展示カタログの文章を記載する。

“美術作品を読み解くことには、これまでその人が経験してきたことが深く関係してくる。物語を読むときもそれは同じだ。話の展開を予想するとき、経験があることに対しては考えが及び、想像が膨らむけれど、経験がないことについては、読み進めてみないとわからない”（中村 2014）^{〔註11〕}

“もしかすると私たちは、語る事、残すことではなく、沈黙し、伝聞を積み上げていくことで歴史を紡ごうとしているのではないか。1980年代の自主企画展のなかにも、カタログやリーフレットをしっかりと制作しているものももちろん存

在する。(中略) 今私たちが自主企画展をするのであれば、カタログにはできる限りのことを載せる必要があるのではないかと考えた。たとえば20年後の誰かがこの展覧会を調べたいと思ったときに、曖昧な伝聞だけが一人歩きしないようにしたいと考えた。”(長谷川 2013) [註12]

展覧会とは、ある意思表示とそのための行為の伝達の結果構成されるものである展覧会の記録や作品を残すこと、その意義について全ての会場展示を終えた時、自身の回答を提示したい。

謝 辞

多くの方の尽力を得て開催、実施に至った展示であるが、特に滋賀会場、成安造形大学【キャンパスが美術館】ライトギャラリーにての展示は、助手個人からの申請は初めてのことであり審議がなされたと聞いている。【キャンパスが美術館】事務局担当教員、担当職員の方々の寛大な配慮があり実施の機会を与えて戴いた。ここに深謝の意を表する。

自身が所属する総合領域長尾浩幸教授、同領域山本和人教授には作品制作ならびに展覧会の企画運営や本稿執筆にあたり、多大なご助言、ご指導をいただいた。また、英文部分作成については共通教育センター三宅キャロリン教授、島先京一准教授にご指導いただいた。ここに感謝の意を表する。

[註1] 本稿は2019年3月12日(火)からの京都会場開催を控えた中間報告である。

[註2] あくまでも銅版画を刷るための実験的な技法のひとつとして紹介されていることが多く、版画に関する書籍でも、技法書に数ページのみの記載が多く、用語や作家のアーカイブである書籍への記載は少ない。現代においても数は少ないものの、京都市立芸術大学、京都精華大学では授業内にて石膏刷りの制作課題があるほか、石膏刷りを主な制作技法として使用する作家として設楽智明(1955～、愛知県立芸術大学教授)、池垣タダヒコ(1955～、京都精華大学教授)、高浜利也(1966～、武蔵野美術大学教授)、鷹野健(1980～、武蔵野美術大学副手)が挙げられる。

[註3] 執筆時点では下記の方々にトークゲスト、テキスト執筆等で展覧会にご協力いただいている。

山下 俊介(北海道大学総合博物館助教)

藤村 俊(美濃加茂市民ミュージアム学芸係)

大塚 友恵(NPO法人 古代瀬波の里・文化遺産ネットワーク 主任研究員)
加藤 恵(岐阜県美術館 学芸業務専門職)

[註4] 北海道会場: TO OV cafe/gallery (ト・オン・カフェ・ギャラリー)
カフェギャラリーの形式をとっているギャラリーではあるが、企画展のみを実施しており、札幌国際芸術祭を含め、様々な企画や、行政との様々な連携を行い、北海道を代表する現代アートの拠点となっている。「TO OV (ト・オン)」とはプラトンの『饗宴』におけるポイエシスの説明の項「あるものがまだそのものとして存在していない状態から存在(ト・オン) to onへと移行することについてのいっさいの原因」に由来する。

[註5] 愛知会場: AHA ギャラリー(エー・エイチ・エー・ギャラリー)は出品者、寺

脇が利用しているアトリエ付近の展示スペースである。名古屋駅より徒歩10分程度の好立地ではあるが、アトリエとしての機能がメインであり、これまではアトリエのオーナーによる企画で数回程度の展示のみを開催していた。

- [註6] 2018年12月12日時点で北海道会場案内の映像は合計535回の閲覧、愛知会場案内は281回の閲覧があった。
- [註7] 北海道北広島市仁別「高山」山中（札幌より南東に約30kmに位置する）
- [註8] 「株式会社京額」にて主に滋賀、京都の寺社仏閣や企業への企画提案、制作、営業を担当した。特に三井寺、清水寺、北野天満宮社務所に関する業務経験が制作テーマへの強い関心となっている。2013年7月・入社～2017年2月・退職、2017年11月・再入社～2018年7月・退職
- [註9] アーキタイプ (archetype) 元型 (げんけい) または原型と訳され。ギリシア語に由来している。ユング (Carl Gustav Jung, 1875 - 1961) が提唱した分析心理学における概念では夜に見る夢のイメージなど、集合的無意識に存在する力動作用を表現するのに使用されている。
- [註10] 凹版 (おうはん・Intaglio) 金属板などに彫刻刀 (ビュラン) や金属針、酸などをしようして表面に凹部を作成する技法全般のこと。主な技法にエッチング、アクアチント、ドライポイント、エンゲレーヴィングが挙げられる。線の強弱や酸による腐食の強弱により微細な表現を可能とし、版の凹凸に沿ってインクの凹凸も反映される技法である。
- [註11] 「KIRAKIRA ZAWAZAWA HIRAHI-RA 展」カタログ 横須賀美術館 2014 p36-p39
「キラキラ・ざわざわ・ハラハラはどこから？」中村 貴絵
- [註12] 「北加賀屋クロッシング2013 MOBILIS IN MOBILI—交差する現在—」カタログ 北加賀屋クロッシング実行委員会 2013 p37 長谷川 新

記録

会期・会場：

・滋賀会場

2018年6月3日 (日)～6月12日 (火)

成安造形大学【キャンパスが美術館】ラ

イトギャラリー

〒520-0248 滋賀県大津市仰木の里東4-3-1

・北海道会場

2018年8月17日 (金)～26日 (日)

TO OV cafe/gallery

〒064-0809 札幌市中央区南9条西3丁目

2-1マジソンハイツ1階

・愛知会場

2018年11月9日 (金)～25日 (日)

AHA ギャラリー

〒453-0013 名古屋市中村区亀島1-9-10

・京都会場

2019年3月12日 (火)～24日 (日)

Art Spot Korin

〒605-0089 京都市東山区元町367-5

・きらめきの結晶体／紡がれる物語 実行委員会 (※出品作家たちによる自主企画)

石井誠／寺脇扶美／福田真知

・展覧会テキスト：平田剛志 ほか

・広報物デザイン：塩谷啓悟

・協力：成安造形大学【キャンパスが美術館】

参考文献

『New Ways of Gravure』Stanley W. Hayter Oxford University Press 1981

『改訂 銅版画の技法』菅野 陽 美術出版社 1962

『版画辞典』室伏哲郎 東京書籍株式会社 1985

『愛知県立芸術大学紀要 (No.15)』「石膏刷り (plaster-printing) 1の研究」設楽知昭 1985

『大学版画学会会報17』大学版画学会 1988 p6-p9

『関西現代版画史』関西現代版画史編集委員会 美学出版 2007

『北加賀屋クロッシング2013 MOBILIS IN MOBILI—交差する現在—』カタログ 北加賀屋クロッシング実行委員会 2013

『プリントって何？—境界を越えて』カタログ 市原湖畔美術館 2014

『KIRAKIRA ZAWAZAWA HIRAHI-RA 展』カタログ 横須賀美術館 2014

「地域とモダニズム・プロジェクトチーム」の取り組みと
《移動と収集—M・デュシャン「トランクの中の箱」より—》の展開

The Approach of the Project Team “Region and Modernism”
and “Movement and Collection from ‘The Box in a Valise’
by Marcel Duchamp”

馬場 晋作

Shinsaku BABA

「地域とモダニズム・プロジェクトチーム」の取り組みと 《移動と収集—M・デュシャン「トランクの中の箱」より—》の展開

The Approach of the Project Team “Region and Modernism” and “Movement and Collection from ‘The Box in a Valise’ by Marcel Duchamp”

馬場 晋作

Shinsaku BABA

准教授（美術領域：現代美術・絵画）

This paper shows the activities in the exhibition “2017 Seian Arts Attention Vol.10 ‘Megure! (Go Around) Tsunagare! (Be Connected) Color and Shape. Wai-Wai Our Modernism’”. At the exhibition, I launched a project team “Region and Modernism” and produced works titled “Movement and Collection from ‘The Box in a Valise’ by Marcel Duchamp”. This project attempted to research and verify the relationship between the public museum and regional inhabitants, from which the keyword “modernism” in “The Museum of Modern Art Shiga” was established.

1. 「地域とモダニズム・プロジェクトチーム」の取り組みについて

1.1 プロジェクトの概要

滋賀県立近代美術館は2017年4月から施設改修のため休館に入った^[註1]。この期間中に美術館所蔵の作品の鑑賞機会を広く作るため「滋賀県立近代美術館 県内移動展示事業」として成安造形大学【キャンパスが美術館】を使用した大学との連携展示プログラムが企画された。これは美術館、芸術大学両者が共同し企画運営を行なう新たな試みであり、2017年10月21日から11月26日までの期間、「2017 秋の芸術月間 セイアンアーツアテンション VOL.10 滋賀県立近代美術館県内移動展示事業『めぐれ！つながれ！色とかたち。ワイワイわれらのモダニズム。』」と銘打って本学【キャンパスが美術館】にて開催された。この企画を受け、私は2017年3月に滋賀県立近代美術館の成り立ちや県民との関係性を改めて調査し、上記展覧会にて展示・発表を行なう事を目的としたアーティスト・コレクティブを立ち上げた。

1.2 プロジェクトの動機と意義

クレア・ビショップは、近年の芸術活動を「アトリエ制作以後」と位置づけ、これらの活動により拡張された実践的な領域、いわゆる「参加型アート」を定義している^[註2]。またこのような1990年代以降の美術と現代社会との接点が激しく更新し続ける状況において、ボリス・グロイスは、様々な社会実践との接合の場となる表現やプロジェクトを、アーティストと共同で創造していく美術館やキュレーターの今日的な役割に言及しながらも、旧来のマーケットに主導されるような絵画や彫刻も入り混じる

複雑なアートワールドの生態について指摘している〔註3〕。このような従来の価値づけられたものとしての作品を提示する事だけが美術館の役割でなくなっている環境の中で、地方都市の公立美術館はいかにして「地域」と「美術」を接合し、文化の拠点となり得るのだろうか。この疑問がプロジェクト立ち上げの動機である。70年代に始まった地方美術館設置の気運がバブル経済期を経て実を結んだ80年代より30年以上が経過し、多くの地方美術館が岐路に立っている。滋賀県立近代美術館が1984年の開館時に理想を掲げ収蔵したアメリカを中心としたモダニズムアートのコレクションは、「美術館の」だけでなく「この時代の」アイコンでもある。昨今文化施設は文化的な営みを育む素地として地域に根付き生活に密接に関わることが求められているが、このアイコンとの隔たりは顕著である。今まさに新たに美術館が再整備されることを受けて、地域とアートの関係性を見つめ直す必要があるように感じる。この異質なものたちの構造や関係性、また希望的にみれば何かしらの共感を、多角的な方法論を持って視覚化することは、地域と美術館との関係性を再考する上でも重要な素材となるのではないかと考えられる。

1.3 プロジェクトチームの特徴と取り組み

このグループは私が発起人となり、渋谷亮（成安造形大学講師・教育思想）、高橋耕平（京都造形芸術大学専任講師・美術家）、谷本研（成安造形大学助教・アートディレクター）の3名の協力を得て活動することとなったアーティスト・コレクティブである。展覧会企画主体である【キャンパスが美術館】と滋賀県立近代美術館との議論を受け、グループの名称は「地域とモダニズム・プロジェクトチーム」となった。このグループでは、個々のリサーチは問題意識を共有しながら個人の動機付けから進めることを前提とした。個人史の調査をドキュメンタリーに取材し映像や写真などで発表する高橋耕平。美術作品や情景を色彩など別のバクトルに変換し視覚化する谷本研。教育哲学、教育思想史を中心に研究し、近現代の思想研究をベースに特別支援に関するフィールド研究をする渋谷亮。絵画史と近現代の視覚変化を造形的に表現する馬場晋作。各メンバーは美術館の歴史や収蔵作品についての大きな文脈と、地域に住まう特定の個人という二重の構造に焦点を当てその関係性を探ることとなる。結果として学芸員や地域住民への取材やフィールドワークを音源、イメージ、テキストなど、様々な媒体に出力し、展覧会の構成要素として展示することとなった。このリサーチプロジェクトは、作家や研究者の個人的な視点の軽やかさを保持することで地域社会への参与を開きながら状況の主体者としての考察を可能にし、チームでは集団の中での熟議を適時行なえる重層性に重きをおくこととなった。個人の動機付けを主体にし、緩やかにつながる集まりとしての両義的な活動であることが特徴である。

具体的な主題として、「滋賀県立近代美術館 県内移動展示事業 成安造形大学連携展示プログラム」での展覧会企画を受け、美術館のアメリカを中心としたモダニズムアートの所蔵作品とそれを取り巻く環境（美術館、地域、住民、大学）を調査対象に、

それらの関係性をリサーチし上記展覧会で視覚的に提示する事を目指した。我々は滋賀の地域に住まい、この自然豊かな環境の中で日々生活する人々がどのように世界を構築し、またその世界の中にどのように美術という文脈が関わるのかという点に興味を共有することとなった。

これらの活動は高橋耕平の滋賀県立近代美術館に関わる人たちの取材音源と美術館の備品を組み合わせたサウンド・インスタレーション、《傍でつぶやく》、谷本研の美術館所蔵作品の色を解析する《マンセル・カラーシステム・プロジェクト》やその色を音への変換を試みる《PhotoMusic 実験室》、渋谷亮との協力で作成した、美術館が開館した1980年代を美術館の歩みと共に俯瞰する年表と、美術館の備品やカタログ、展覧会ポスターなどの資料で構成したインスタレーション《われらの時代と美術館》(図1) など、多様なプレゼンテーションが展開された。しかしその全貌を紹介するにはここでは紙面が足りない。ここでは、私のリサーチ活動から展開し、展示を試みたインスタレーション、《移動と収集—M・デュシャン「トランクの中の箱」より—》(図2) の中で作品解説文として会場にて提示したテキストを再構成し紹介することによって、その活動の一部を提示することにとどめる。このテキストは展示要素の解説であるが、私のリサーチ活動や考察プロセスの再現でもある。また地域とモダニズムの関係を「移動」と「収集」といった重要なキーワードによって紐解き、想像を喚起させるツールとしても活用できることを目指し作成したものである。以下のテキスト



図1 美術館の備品、資料などで構成された展示空間 (撮影：筆者)

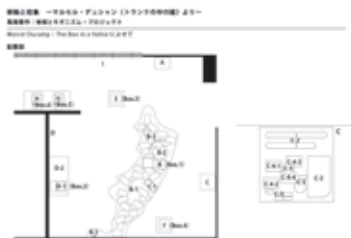


図3 展示配置図



図2 《移動と収集 —マルセル・デュシャン「トランクの中の箱」より—》展示風景、ミクストメディア、サイズ可変、2017年 (撮影：筆者)

は、それぞれの番号を配した展示資料に対応しており、展示資料を巡りながらインスタレーションを俯瞰できる仕組みとなっている。各章の通し記号は、当時の展示環境に適合した通し記号であるアルファベットをそのまま使用した。(図3)

2. 《移動と収集—マルセル・デュシャン「トランクの中の箱」より—》

Marcel Ducamp | The Box in a Valise によせて

A. Marcel Ducamp 《The Box in a Valise》(1955-68) について (図4)

《トランク中の箱 (The Box in a Valise)》はトランクの形を成す、M・デュシャンによる作品の一つである。滋賀県立近代美術館には、開館当初より所蔵されている。箱型のその作品の中には、デュシャンがこれまでに発表した仕事のマルチプルが複数入れられており、持ち運んでどこでも彼の代表作が鑑賞できる仕組みになっている。これはさながら移動する美術館だろう。ベンヤミンの著書『複製技術時代の芸術作品』を含め、写真などの複製技術が美術作品へ様々な影響を及ぼした状況を想像するなら、《トランクの中の箱》も複数性やオリジナリティの概念を更新したデュシャンの重要な仕事のひとつといえるだろう〔註4〕。しかし、私はこの作品と、滋賀県立近代美術館の移動展示事業である本展を結びつけ、そこから見つけた「移動する」と「集める」ことに着目した。このモチーフを通じて、私たちの日常と美術館のことを考えてみたいと思ったのだ。そして、マルセル・デュシャンの《トランクの中の箱》に敬意を評し、本展覧会用に6種類の異なる《トランクの中の箱》を構想した。

■展示資料

『Marcel Ducamp:The Box in a Valise』BONK, ECKE, Rizzoli, 1989年 他

B. 「Box.1：移動の箱」(拾い集められたものたち) (図5)

本展覧会では滋賀県立近代美術館のコレクションが、美術館から成安造形大学まで移動する。まさしく《トランク中の箱》のごとき「移動美術館」である(実際には美術館所蔵の作品は、改修工事のため一旦倉庫に預けられ、そこから運ばれるのだが…)。作品が移動する意味を考えた先に、「そもそも移動するということは、どのような経験なのだろうか」という問いにたどり着いた。そこで私は、実際に美術館からこの場所まで歩いて移動することにした。そして実際に歩いた中で見つけた風景や、拾い集めたものを「移動の箱」に入れた。しかし道中で集められた数多くの色やかたちは、「移動の箱」に収まり切らず、箱の外にはみ出していく。約半日の歩行を経て、移動の経験やその時巡った固有の場所に思いを巡らせた。歩行は人間の移動のもっとも原初的な方法である。逢坂の関で有名な大津-山科間はこのような徒歩で移動する者たちが、行き来し、出会いと別れを繰り返していたのだろう。想像は膨らみ、移動に関わる様々なモ



図4 会場に資料として置かれた《トランクの中の箱》の図版（撮影：筆者）



図5 「Box.1：移動の箱」移動と共に収集した写真と拾得物（撮影：筆者）

チーフがさらに集められた。「移動の箱」の中に収まり切らない様々な経験が台を埋め尽くす。

■展示資料

- B-1. 歩行時に使用した大津市の地図
- B-2. 移動しながら採取した様々なイメージ
- B-3. 移動しながら拾い集めたもの（文化公園の楓、一里山のボール、瀬田大橋の駐輪許可書、膳所のゴム、石山の針金、苗鹿の石、苗鹿の根、など）

C. 近代と移動（緩やかな近代と緩やかな移動）（図6）

1920年に発足した江若鉄道は、三井寺 - 叡山間を1921年に開通し、鉄道事業を開始した。その名の通り近江と若狭を結ぶべく、膳所から近江今津（膳所 - 浜大津間は国鉄貨物線、京阪石山線と共用）まで琵琶湖西岸の約2/3におよぶ鉄道路線を開通させた。それは国鉄の湖西線建設決定を受けた1969年の廃線まで湖西地区、特に坂本以北の市民の足として親しまれた。近代は、民主化と工業化によって様々な変化が社会に現れた時代である。移動手段は特にその大きな変化の一つだろう。国道の整備に合わせた車の普及と高速鉄道の整備は、我々のもつ時間の感覚を変えていく。湖西地区を走っていたこの鉄道は、住民の利便性を飛躍的に向上させたという。それでも浜大津から近江今津までの51kmを約1時間半程度かけて移動する、今から思えば緩やかなスピードの鉄道であったように思う。そして国鉄湖西線建設や国道整備による自家用車の普及に伴い、この移動手段は消え去り、住民の記憶の片隅に残るだけとなる〔註5〕。移動手段の近代化は単なる人の移動ではなく、人口の流入や流出を大規模で起こす。人々の帰属の変化を伴う「社会的移動」とも言うべき変化を顕在化させる。それは逆説的に、固有の場所に帰属意識が芽生える近代自我の制度発展をも予感させる〔註6〕。それに対し緩やかな移動は、人やものが場所に直接触れて混じり合う。固有の場所は固有性を少しずつ消失させながら新しい固有性を獲得するのではないか。近代化における移動手段の変化を思いながら、移動について想像を膨らませる。



図6 江若鉄道の模型などを移動のモチーフとして展示した（撮影：筆者）



図7 徳田平八郎《東京オリンピックと江若鉄道》DVD、27分、1964,1969年（撮影：筆者）

■展示資料

- C-1. 《東京オリンピックと江若鉄道》（撮影：徳田平八郎、1964年・1969年、27分）（図7）
- C-2. 江若鉄道の模型、江若鉄道浜大津駅舎の模型（大津市歴史博物館蔵）
- C-3. 江若鉄道の切符（個人蔵）
- C-4-1. 《浜大津駅 昭和31年4月朝》（撮影：西村榮次郎 大津市歴史博物館蔵）
- C-4-2. 《石場駅 昭和30年頃》（撮影：西村榮次郎 大津市歴史博物館蔵）
- C-4-3. 《皇子山中付近 昭和31年4月午後》（撮影：西村榮次郎 大津市歴史博物館蔵）
- C-4-4. 《江若鉄道浜大津駅 昭和40年》（大津市歴史博物館蔵）

D. 「Box.2：収集の箱」〔草の根博物館の収集記録〕（図8）

博物館または美術館の役割の一つには、歴史的資料や美術品を収集することがある。近代において博物館の役割は収集した様々な資料を分類し、市民へ公開することになった。そもそも美術品や歴史的資料をコレクションしていたのは、王室や一部の富裕層であり、それらコレクションの一般公開は、民主化や啓蒙思想といった近代化による価値の変化とセットといってもよい。滋賀県立近代美術館の南東にある瀬田（勢多）丘陵を超え、3kmほどに下った場所に田上と呼ばれる地域がある。平安後期の歌人源頼俊が編纂した歌集「田上集」の里としても知られる歴史ある場所である。昭和40年頃のこと、田上の上牧集落にある真光寺住職の東郷正文氏は、地域のゴミ捨て場に廃棄された見慣れない農機具を持ち帰った。第二次世界大戦後の経済成長を背景に、農村部にも著しい生活環境の変化が訪れた。機械化され廃棄された多くの農機具は、使用方法もわからず謎めいており、東郷氏にとって魅力的なものに見えたのだろう。これが転機だったという。失われていく郷土の生活や文化また郷土自体への関心を危惧し、地域の有志と協力して郷土文化の収集を呼びかけた。東郷氏の声かけのもと、若い有志はそれぞれの職務の傍ら不要になった農機具をかき集めた。やがてその活動は昭和44年の田上郷土史料館開館へと繋がっていく〔註7〕。このような民俗資料館の成り立ちは、全国各地に見られ、近代化の大きなうねりに抗う人々の思いが共通しているとも言えるだろう。草の根的な彼らの収集活動は、美術館の作品収蔵のプロセス

と対比すると興味深い。さらに東郷氏の収集は、ものや道具を集めるだけではすまなかった。50年もの間、収集した様々な生活のための道具や器具を管理する傍ら、関連する品々の使用方法やそれにまつわる地域固有の発展の仕方に始まり、催事、伝承、恋路や遊びなど、失われていく様々な民俗史を記録し収集した。時には倉庫に眠っていた農具の発祥地が遠く離れた地方だったと聞きつけると、その生産地にも足を運び、取材ノートを作成する。東郷氏が収集した農具やおびただしい数の取材ノートを眺めると、彼の収集・記録への情熱やそれを支える動機の源泉は、地域の文化を残そうとしたことだけだったのだろうかかとふと感じてしまう。どのような動機があったにせよ、近代化し合理化して行く中で廃棄されてしまった地域の道具は、草の根の運動の中で収集され、博物館の中に整理、分離され、保管・管理されることとなったのだ。ここにその取材ノートを複写し展示した。この場所に置かれている取材ノートは、彼の収集の軌跡のほんの一部である。



図8 「Box.2：収集の箱」 田上郷土史料館の資料を構成（撮影：筆者）

■展示資料

D-1. 田上郷土史料館の取材ノートの一部（田上郷土史料館蔵）

D-2. 豆植え道具（田上郷土史料館蔵）

E. 「Box.3：近美の箱」（図9）

F. 「Box.4：大学の箱」（図10）

展示空間は大津市南部の縮図である。この縮図の南東には、本展覧会の主要な作品群を収蔵する滋賀県立近代美術館がある。そしてそこから北西に向かった先に、現在それらの作品が展示されている成安造形大学があり、展示室内のそれぞれの場所には「近美の箱」と「大学の箱」の《トランクの中の箱》が置かれている。この箱はそれぞれ美術館の縮図でもある。さらにいえば、この場所にある美術館が《トランクの中の箱》のように移動でき、自由に収集できる美術館であつたらどうだろうか。「近美の箱」「大学の箱」は、展覧会開始時は未完成の状態で開催されている。会期中の11月12日（日）に、参加者を集い、彼らの手によってそれぞれの美術館に仕立て上げられた。このワークショップの参加者が大学内を散策し、自由にものを集め、自分たちの経験を「移動美術館」へと練り上げる。滋賀県立近代美術館の学芸員も参加者となり、会話を交え、私たちの美術館を作っていく。私はここで、美術館や美術作品がアクチュアルな経験の場へはみ出していく、そんな状況を想像してみたいと思った。このワークショップを通じて、美術館の位置づけをほんの少しズラしながら拡張させることで、美術館という構造に隙間ができたのならば、私はきっと心地がよい。



図9 「Box.3：近美の箱」美術館の写真と備品を構成（撮影：筆者）



図10 「Box.4：大学の箱」学内ワークショップにより拾得物で構成（撮影：筆者）

G. 「Box.5：滋賀の色」（学生が採取した様々なイメージと色）

H. 「Box.6：滋賀のかたち」（学生が採取した様々な取得物）（図11）

成安造形大学総合領域の授業である「プロデュース基礎演習」は、成安造形大学【キャンパスが美術館】企画の展覧会と連動して展覧会企画や運営の現場を体験することを目的とした授業である。この授業を履修している成安造形大学総合領域学生の協力のもと、色とかたちを頼りに、学生たちが滋賀県内各地を散策した。散策の中で気になる色やかたちを、イメージ（写真）や取得物や購入物として集めてもらった。それらをもとに「滋賀の色」「滋賀のかたち」を構成する。滋賀県内各地で採取したイメージは各々の経験を源泉にし、自分たちが感じた色を写真の端に色付けし分類した。経験に基づく色の選択は数値化された分析のように客観的ではなく、あくまでの印象であり、写真では映し出せなかった色として定着しているかもしれない。取得物や購入物は大小様々で、箱から溢れてしまっている。どれも学生たちがその場で移動

し、経験し、自らの身体へと収集したイメージのかけらたちである。

I. 移動し集まり蓄積する時間（窓の向こうに見える景色は）（図12）

デュシャンの《トランクの箱の中》から始まったこのプロジェクトの旅は、湖畔の各地を移動し、河川の小石のようにイメージが集まり堆積していく。移動は様々なものとの出会いであり、そして別れでもある。歩行による緩やかな移動は、我々の日々の移動手段がいかにダイナミックで、瞬間的な事柄なのかを感じさせてくれる。イメージを拾い集めながら進む行程は、私の中に様々な「他なるもの」をゆっくりと取り入れて行く刺激的な体験である。私は移動する中で様々なイメージやモチーフを収集した。収集と移動の行程は類似している。どちらも時間の蓄積の中で、層となって折り重なる緩やかな経験である。「移動」と「収集」を再考する中で、蓄積される厚みある「時間」が浮かび上がった。田上郷土史料館の50年という時間の重なりを目の当たりにすると、「移動」や「収集」に関わる時間を、社会やそれを取り巻く構造と切断した個別固有の時間とは異なる、緩やかに繋がり、曖昧な固有性を持った時間として想像が可能になる。曖昧な固有性とは、「他なるもの」をゆっくりと取り入れ、変化する固有性である。この「時間」は決して瞬間的な知覚ではなく、かつて湖西地区を走っていた鉄道のように、緩やかに、その場所場所に足跡を残すように働く時間である。緩やかな時間の中で、ものやイメージは堆積する。窓の外の湖の先は、ちょうど滋賀県立近代美術館が建っている瀬田丘陵あたりだろう。美術館は34年の年月をかけて、様々なイメージを堆積させ続けている。美術館が収集しているものは作品だけではない。そんな風に折り重なる時間と共にある美術館を想像してみるの、本当に心地がよい。

これやこの 行くも帰るも 別れては 知るも知らぬも 逢坂の関(蟬丸) [註8]



図11 「Box.5：滋賀の色」と「Box.6：滋賀のかたち」（撮影：筆者）



図12 窓からは琵琶湖越しに瀬田を望める（撮影：筆者）

- [註1] 滋賀県は2020年3月までの3年間の改修期間を経て、新生美術館としてのリニューアルを目指すべく整備計画を予定していたが、入札の不調や社会環境の変化などの理由により整備計画はいったん凍結となっていた。2018年11月29日に三日月大造知事より、計画を見直すとともに、既存の美術館の改修へと方針を変更したことが表明された。この決定により仏教美術やアールブリュットとこれまでのコレクションを複合した新たな美術館構想は白紙となった（中日新聞2018年11月30日朝刊より）。地域とモダニズム・プロジェクトチームは、新しい地方公立美術館の形を構想とする動きの中で発案されたものとしての前提を共有されたい。
- [註2] クレア・ピショップ、『人工地獄 現代アートと観客の政治学』、大森俊克訳、フィルムアート社、2016。
- [註3] ボリス・グロイス、『アート・パワー』、石田圭子、齋木克裕、三木松倫代、角尾宣信訳、現代企画室、2017。
- [註4] ヴァルター・ベンヤミン、『複製技術時代の芸術作品』、浅井健二郎、久保哲司訳、『ベンヤミン・コレクション〈1〉近代の意味』、ちくま学芸文庫、1995。
- [註5] 当時の市民の暮らしについては、大津市編、『新修大津市史』を参考にした。（大津市編、『新修大津市史〈第5巻〉近代』、大津市、1982。大津市編、『新修大津市史〈第9巻〉南部地域』、大津市、1986。）
- [註6] 移動手段の変化と固有性問題は中村牧子、『人の移動と近代化—「日本社会」を読み換える』、有信堂高文社、1999。で指摘されている。
- [註7] 田上郷土史料館の成り立ちについては、田上郷土史料館運営委員会編、『田上郷土史料館報2 田上のあしあと—見聞記・民謡・石造美術・石居廃寺—』、田上郷土史料館、1973。及び、発起人の一人である東郷正文氏への聞き取り調査を参考にした。
- [註8] 小倉百人一首第10番として知られ、『後撰和歌集』（950年頃成立）に収録されている平安の歌人蝉丸（生没年不詳）の歌。「これがまあ、東国へ旅立つ人もそれを見送る人もここで別れを告げ、知る人も見ず知らずの人もここですれ違い、皆ここで別れ、そしてここで出会うという逢坂の関なのだなあ。」逢坂の関は、京都四ノ宮から大津に向かう間にあった関所。逢坂の峠で緩やかに繋がり緩やかに別れる今も変わらぬ移動の経験を、見事に表した歌として最後に取り上げた。（この現代語訳は滋賀県高等学校国語教育研究会編、『近江の文学』京都カルチャー出版、1994。及び大津歴史博物館企画編集、『大津の文学ふるさと大津歴史文庫10』、大津歴史博物館、1993。を参照し、私なりの解釈を加えた。）

編集後記

ここに成安造形大学紀要第10号を刊行いたします。

編集子の非力な情報収集能力から判断する限りではありますが、残念ながら今日の世界の様ざまな潮流は、混迷の度合いを深める一方のように思われて仕方ありません。極めて少数の限られた人びとに富が集中する一方で、世界中のありとあらゆるところに、人間としての最低限の生活レベルを維持することすら拒絶されて生きている人びとがいます。そして極めて残念なことではありますが、かつては先進国の一翼を担っていたこの国においても、悲惨な暮らしを強いられている人びとがいるという事実から目を背けることができません。編集子の視点はあまりにも悲観的に過ぎるという批判もあろうかとは思いますが、しかし楽観的な線の史観にすべてを委ねることができないのは事実でしょう。

このような時代であればこそ、私たちは速過ぎる状況の変化に踊らされることなく、思考という私たちの最も強力な武器を行使すべきです。大学という機関の社会的な機能の一端も、目先の利潤追求にとらわれることなく組織的な思考力を世界の本質に対峙させ、そこから未来への指針を抽出し提案することにあるはずです。私たちのこの小さなメディアは、規模としては決して大きくはない私たちの取り組みを、テキストという堅固な形に昇華し残そうとする希望の具体化です。

今号では、本学に勤務する若い研究者諸氏からの、制作活動や発表活動に関する澁淵とした考察の成果の寄稿がありました。彼らの思考の成果は彼ら自身の今後の活動に活かせるのみならず、貴重な社会的、文化的資源としての輝きを保ち続けてくれるに違いありません。若き才能のプロモーションを後押しすることができたのであれば、すでに老兵ともいべき編集子にとってこれ以上の喜びはありません。

(Chepito)

成安造形大学紀要 第10号

Journal of Seian University of Art and Design No. 10

発行日：2019年3月22日

Date of Issue: 22 March 2019

発行者：学校法人京都成安学園 成安造形大学 附属芸術文化研究所
〒520-0248 滋賀県大津市仰木の里東4-3-1
電話：077-574-2111（代表）

Publisher：Kyoto Seian Gakuen, Seian University of Art and Design, Center for Arts
Oginosato-Higashi, 4-3-1, Otsu-City, Shiga-pref.,
zip 520-0248, Japan
Tel: +81-77-574-2111

編集：芸術文化研究所
Editor：Center for Arts

印刷・製本・デザイン：株式会社 北斗プリント社
Print, Design：Hokuto Print Co., Ltd.

【 】

成安造形大学